之レ實ニ謂ハレナキモノニシテ、政府ハ白銅交換ノ爲メ之ニ相當スル（從來ノ相場以上ヲ以テ）新貨幣ヲ發行セシニ由リ、決シテ通貨ノ縮少ヲ來シタルモノニアラズ。況ンヤ京釜京義ノ二大鐵道ノ建設及ビ軍事上ノ爲メ韓國一般ニ通貨ノ撒布セラレシモノ實ニ夥シ、唯交換ノ爲メ白銅貨ノ價格騰貴セシニ依リ手形所持人ハ現貨ノ支拂ヲ要求シ手形ヲ以テ手形ヲ支拂フノ舊慣ヲ諾セザルニ至リシモノ、卽チ白銅手形ノ流通困難ハ白銅交換ノ間接ノ影響ニ依ルモノニシテ、此他何等ノ原因ヲ爲スヲ認メザルナリ。

原因既ニ明ナリ依テ之ヲ救濟スベキ要點ヲ揭グレバ

一、手形ノ流通ヲ助成スルコト

二、動產擔保貸付ヲナスコト

三、不動產ノ擔保貸付ヲナスコト

ノ三點ニ歸着ス

第一　手形組合ノ設立

手形ヲ發行セシモノハ從來相當ノ地位アル商民ニシテ、其發行セシ手形ハ轉輾流通セシガ如シ。故ニ此等商民ヲシテ別ニ組合ヲ設ケシメ、新貨幣ヲ以テ手形支拂ノ用ニ供セシメ、且ツ手形ノ形式ヲ正シ其信用ヲ確實ニナスモノトス。

組合組織ノ要點左ノ如シ。

一、信用アル商民ヲ以テ組織セシムルコト

二、手形用紙ヲ定メ其形式ヲ正スコト

三、手形ノ流通ヲ確保スル爲メ共同基本金幾萬圓ヲ備ヘ共同擔保トスルコト

四、組合員ノ手形發行ヲ監督シ其濫發ナキヲ期スルコト

卽チ組合ハ別ニ定ムル所ニ依リ、手形ニ證印ヲ爲シタルモノニ就テハ其支拂保證ノ位置ニ立ツモノニシテ、手形ノ流通ヲ疎通スル上ニ於テ組合員ノ享クル利益尠少ニアラザルナリ。

第二、共同倉庫會社ノ設立

共同倉庫會社設立ノ要旨左ノ如シ、

一、內下金十五萬圓及資本金十五萬圓ヲ資本トス

二、京城及其他樞要ノ地ニ倉庫ヲ設ク

三、其營業種類ハ

（一）預リ品ニ對シ預リ證券ヲ發行シテ資金融通ノ便ニ供スルコト

（二）預リ品ニ對シ金融ヲ爲スコト

（三）資本金通用上許ス限リ不動產ヲ擔保トシテ貸付金ヲ爲スコト

（四）各地方ノ支庫ハ米穀ヲ擔保ニ貸付ヲ爲スコト

以上ノ外第一銀行ハ右ノ如キ機關ヲ通ジテ專ラ金融ノ便ヲ計ルベキニ付、其金融上ニ及ボス影響ハ多大ナルベシ。之ヲ要スルニ手形ノ流通ヲ計リ、且ツ動產及不動產貸付ヲ爲スニ於テハ救濟方法トシテ餘蘊ナキヲ得ベシ。

唯朝野徒ラニ口ニ救濟ヲ唱ヘテ爲メニ爲スモノアルガ如シ。政府當局者ハ此ノ如キノ議ヲ排除シ、奮テ右計畫ノ實施ニ努ムレバ其商民ヲ益スルコト大ニシテ、且今後却テ商業ノ適當ナル發展ヲ促スヲ得ベシ。

其他米穀ノ輸出減少ヲ以テ其原因亦金融ニ在リトナセドモ、昨年及本年ニ引續キタル減作殊ニ本年ノ如キハ約四割ノ減收アルモノニ對シテ、輓近日本軍隊及外人ノ移住大ニ增加シ、在來ノ米穀ヲ以テハ或ハ缺乏スルナキヤヲ怖ルルモノニシテ、之ガ爲メ價格騰貴シ終ニ輸出ノ減少ヲ來セシモノトス。而シテ倉庫會社ニ於テ農民ノ爲メ金融ヲ計ルノ外、別ニ農事改良ノ方法ヲ策シ將來益ゝ生產ノ增加ヲ謀ルハ緊要ノ急務ナルベシ。

韓國皇帝の覺書

明治三十八年十一月二十九日韓國皇帝陛下ノ命ニ依リ宮內府大臣李載克ノ齎シタル陛下ノ要求ト覺書。

一、從來皇室費ハ眞ノ經常費ノミ宮內府ニ於テ豫算ヲ編製シ之ヲ政府ニ送リ、政府ハ各部ノ豫算ト同ジク之ヲ議定シテ年額ヲ定メ、而シテ臨時費ハ一切隨時之ヲ政府ニ要求シテ捧上セシメタリ。自今此制度ヲ改メ、經常臨時兩費ヲ合セテ一ケ年皇室費年額ヲ定メ、之ヲ宮內府ニ渡シ切リ、皇室ノ財政ヲ獨立セシメ度キ事。

二、皇室所有財產卽チ皇室所屬ノ鑛山、紅蔘、驛田屯土及各宮陵園所屬ノ田土等ハ總テ從前ノ如ク帝室ニ於テ所有管理スル事。

但シ右ニ關スル一般ノ國稅ハ從前ノ如ク之ヲ國庫ニ納付スル事。

三、帝室ノ財政及ビ所有財產ニハ政府財務顧問ノ干涉ナク帝室自ラ之ヲ處理スルコト。

四、一般ノ財政整理進步ノ程度ト矛盾セザル樣帝室ニ於テモ務メテ諸弊ヲ矯正整理スル事。

五、宮禁肅淸其他諸制度ノ弊害ヲ矯正スルハ總テ文明國ノ模範ニ倣ヒ宮內府ニ於テ漸次之ヲ實行スル事

各國公使ト取替シタル八ケ條書

各國公使夫々國許政府ノ代リトシテ日本政府ノ代人何某ト今度取替セシ八ケ條書ハ既ニ外國交易ノ爲兵庫開港大坂開布之儀ニ付日本政府ニ約セシケ條書之附錄也

第一

兵庫並大坂外國人居留地去四月日本政府ト申談セシケ條書ニ附屬スル繪圖面通リニ無之ニ付此度改而繪圖等ヲ引シメ此ケ條書ニ附錄ス

第二

日本政府ニ於テ兵庫居留地ヲ設ケシ惣入費九萬九千六百八十兩ト相定マリ大坂ハ壹萬五千八百七十貳兩三分ト相定メ右兵庫居留場年々地代之惣高六千六百六兩ニテ大坂之義ハ三千百三十三兩三分右ハ道路普請橋並下水溝修覆掃除常夜燈並日本政府ニ可納當然ノ地税ヲ惣計セシモノ也

第三

日本政府ニ於テハ前條書載セ有之地税ヲ請ルニヨツテ道路橋下水溝常夜燈不殘修覆致シ並往來筋拂除イタスヘシ且兵庫ニ於テ常夜燈百六十六座大坂ニ於テハ七十座終夜燭スベシ

第四

兵庫居留地……ニ分チ右總坪數……坪但壹坪ニ付元金何程年々ニ地税何程且場所ノ善惡ヲ以テ價ニ相違有之故ニ公ケノ繪圖ヲ三等ニ分チ上等ノ元代金ハ三兩中等ハ二兩壹分下等ハ壹兩貳分ナリ尤下水溝掃除常夜燈ノ入費ハ場所ニヨリ差別無之ニ付都テ地税同樣ナルベシ

大坂居留地……坪ニ分チ惣坪數……坪仍而壹坪ニ付元代ハ何程地税者何ホド

第五

外國居留地ニ面セリ賣之義ハ此ケ條書ニ附屬スルセリ賣之法則ニ隨フベシ尤兵庫表セリ賣ハ來ル西洋二月五日ヨリ相始段々地面ヲ不殘セラシムベシ大坂表セリ賣ハ來ル西洋二月十日ヨリ相始段々地面ヲ不殘セラシムベシ

第六

セリ賣殘リ三分ハ追テ日本政府ト外國公使ト相談之上一度又ハ二度セラシムベシ兵庫表元代ハ西洋二月十日ヨリ再度セリ賣之日限マデ壹ケ年一割之利則之割合ヲ以加フベシ

第七

去ル五月取替セシケ條第六ケ條ニテ貸渡ノ金高日本政府ニテ費セシ金高ニ越ル時ハ其差引益金日本政府江取置ベキ約束ノ處兵庫居留地取設ルニ依テ費セシ金高利則ニ損失無之樣取計ニ付前ニ述シ

益金居留地諸入用之積金ト致スベシ此積金之遣掃ハ追テ日本政府ト外國公使ト相談之上取極ムベシ

第八

兵庫並大坂外國人居留地取締入費金ヲ才覺スル爲年々壹坪ニ付金壹歩之三割ヲ不過金高ヲ持主ヨリ相納ムベキ事ヲ地券ェ書載スベシ取締人數並入費之事毎年奉行並外國岡士相談ニテ取極メ輿論ヲ採用スベシ且右取締人數之職務者已ニ日本政府ト各國公使ト取結ヒシ横濱取締之法則ニ隨フベシ

第九

日本政府ニ於テ兵庫大坂兩居留地石垣上陸場所修覆致シ且上陸場最寄之海河ヲ浚ヒ差支ナカラシムヘシ

第十

下水溝入費トシテ兵庫ハ壹萬兩大坂ハ四千四十三兩既ニ取除置有之ニ付兩奉行兩所各國コンシエル差圖ニテ可成丈ケ右下水等ヲ設クベシ

徵兵免役者ヨリ授産金徵收ノ議

徵兵免役ノ者ヨリ授産金ヲ徵收シ、之ヲ以テ服役者ノ勞ニ酬ヒ、其處置公平ヲ得ントスルノ趣意ハ、之ヲ人民私ノ約束トシテ一府縣或ハ一郡區ニ施行スルハ敢テ官ノ問フ所ニ非ラズ、宜ク人民ノ協議ニ任ズモ妨ナシト雖ドモ、若シ此法ヲ國法ト定ムルモノトセバ、大ニ徵兵ノ旨趣ニ背馳スルヲ以テ、聊カ之ヲ左ニ辨ゼザルヲ得ズ。

抑徵兵ハ國民ノ一大義務ニシテ、丁年ノ者ハ必ズ一タビ此役ニ服シテ報國ノ分ヲ盡スベキハ固ヨリ論ヲ俟タズ、然レドモ兵員ハ國ニ定額アリ、平時ニ於テ悉ク現役ニ服セシム可ラザルヲ以テ、或ハ財産ノ保持、或ハ修學、或ハ教育上、又ハ國益ノ進歩ニ於テ缺クベカラザル者ノ爲ニ免役規則ヲ設ケテ現役ニ服スルヲ免ジ、其餘ノ故障ナキ者ハ體格ヲ檢査シ、兵役適當ノ者ヲ以テ抽籤ノ順序ニ由リ當時所要ノ兵員ニ應ジ之ヲ徵發スルモノニシテ、免役適當ノ者ト雖ドモ、國民軍ノ籍ニ在テ素ヨリ兵ノ任アル者ナリ。其國民軍タル有事ノ日ニ當リ、許多ノ兵員ヲ要スルトキハ、疾病及ビ罪人ヲ除クノ外、壯年ノ者ヨリ之ヲ擧ゲ、以テ所要ノ員ニ充テザル可ラズ。是故ニ在役シテ其身ヲ致スハ、即チ國民軍ノ家鄕ニ在テ産業ヲ營ム者、或ハ教育等ニ從事スル者ト其報國ノ務ニ於テ敢テ異ナ

ルコトナキガ如シ。唯現役ト非役ト其緩急ノ差等アリト雖ドモ、譬ヘバ現今服役者ノ子孫ニ至テハ將來免役適當ノ者トナリ、現今免役者ノ子孫ハ將來服役者トナルノ理ニシテ、交互循環之ヲ永遠ニ期シ、遂ニ自カラ平均ヲ得ルニ至ル。是レ則チ貧富强弱便否得失相助クルモノナリ。又檢査不合格ノ者及ビ矮小ノ者ハ敢テ人爲ニ出ヅルニ非ズ、又自カラ免役ヲ求ムルニ非ズ、官ノ便宜ニ由テ之ヲ採ラザルモノニシテ、卽チ天然ニ出ヅルモノト云フベシ。又五尺未滿及ビ補充ノ如キハ兵員不足ノ時ニ當リ必ズ之ヲ擧ゲザルヲ得ズ。卽チ明治十年ハ征戰ノ事アルガ爲ニ補充兵ヲ悉皆常備ニ編入シ、十一年ハ四尺九寸以上ノ者ヲシテ召募ニ應ゼシムト雖ドモ、尙常備ノ不足スル軍營尠カラザルヲ以テ、之ヲ他軍營ノ補充ヨリ取リ、漸ク常備ノ數ヲ充實セシガ如シ。然ルヲ是等ノ者ヲ現役擔不擔ノ偏頗アリトシテ授產金ヲ出サシムルハ、却テ平均ヲ失フ而已ナラズ、若シ授產金ヲ出シテ服役ノ義務ニ均シキモノトセバ、一旦出金セシ後ハ戰時ノ徵募ニ應ズル者ナキハ勿論、時トシテ常備兵ノ缺員ヲ前年ノ補充ヨリ召募スル成規ヲモ履行スル能ハズ、更ニ他ニ求ムベキノ兵員アルコトナク、終ニ恐クハ賦兵ノ本意ニ乖戻シ、大ニ弊害ヲ生ズルコトアラン。此他成典ノ旨趣ニ支吾スルモノ少カラズト雖ドモ、其細目ノ如キハ玆ニ之ヲ略シ、大體ヲ槪論スルコト斯ノ如シ。

今玆ニ別冊授產金ノ法ヲ以テ之ヲ行フモノト假定スルモ、亦原案其理由ヲ見ザルモノアリ左ニ略說スベシ

第六條　七ケ年ノ服役ハ常備後備ヲ合算シタル年期ニテ常備三ケ年ハ在營スト雖ドモ後備四ケ年ハ鄕里ニ在テ產業ヲ營マシム然ルヲ之ニ授產金ヲ與フルハ其理ナキガ如シ若シ强テ之ニ與フルトセバ補充服役中ノ日數ニモ與ヘザル可ラス

第七條　服役中病氣除隊ノ中公務ニ發スル者ト私事ニ發スル者トノ別アリ死亡者ト雖ドモ亦斯ノ如シ之ヲ區別セズシテ均シク授產金ヲ與フルハ公平ヲ得サルノミナラズ疾病ヲ作爲シ或ハ詐僞ヲ釀成スルノ弊害恐クハ尠カラズ又官ニ於テ已ムヲ得ザル事故アリ兵役ヲ解クノ規則ハ固ヨリ之レナシ又後備軍ハ常ニ家居シ產業ヲ營ムモノニシテ之ヲ免ズル時ニ授產金ヲ與フルモ亦理ナキガ如シ

第九條　出金ノ割免役ノ者一人ニ付金五圓ヲ出サシムルノ制ハ官省府縣奉職ノ子弟ハ支障ナキモ民間ニ於テハ其金額多キニ過グルガ如シ尤貧人ハ五ケ年賦トナスノ餘地ヲ與フト雖ドモ貧富ヲ識別スルハ實際ニ於テ甚ダ難カルベシ且五ケ年賦トナスベキ貧人ノ多キトキハ集金ノ割合從テ差異ヲ生ズベシ

一、矮小竝ニ檢査落ハ自カラ免役ヲ望ム者ニ非ズ官ヨリ之ヲ除クモノナレバ若シ出金ヲ厭ヒ强テ服役ヲ望ム者アルトキハ之ヲ處置スルノ道ナキガ如シ又之ヲ細論スレバ矮小及ビ檢査前ノ如キハ其體格自ラ作爲スルモノニ非ス然ルヲ之ニ出金セシムルハ甚ダ理ナキガ如シ

一、五尺未滿竝ニ補充ノ如キモ出金ヲ厭フガ爲ニ自カラ强テ入營ヲ望ムトキハ之ヲ處置スルノ難キ亦前條ニ同ジ

一、某國某郡一所ノ徵兵ハ朱書記載ノ通リナルベシト雖ドモ之ヲ十九兩年全國ノ徵兵ニ比例スルトキハ其人員自カラ差異ヲ生ズルノミナラズ去ル七年ノ如キハ臨時常備兵五千二百八十八人ヲ徵募シ又昨十年ハ全國ノ補充七千三百八十一人ヲ悉ク臨時常備トナセリ尙將來臨時ノ常備兵ヲ要スルトキハ出金者ハ減少シ受金者ハ從テ增加スルヲ以テ朱書集金ノ割合ヲ施行スル能ハザルハ明瞭ナルベシ

附　言

徵兵免役者ヨリ授產金徵收ノ議ハ、數年前以來之ヲ建議スル者數人アリ、其論述スル所大同小異ナリ。然レドモ到底賦兵ノ法ト相併行セザル者ナレバ、要スルニ國法トシテ行フ可ラザルハ別紙陳述ノ通リタリ。尤モ現今ノ人民ハ未ダ兵役ノ何物タルヲ辨知セズ、詐僞百端以テ兵役ヲ忌避スル者多シ。已ニ本年ノ如キハ許多ノ缺員ヲ生ズルニ至レリ。此弊害ヲ防止シテ徵員ヲ充分ナラシムルハ、徵兵令ヲ改正シ官省府縣ニ奉職ノ者ハ勿論、嗣子戶主ト雖ドモ之ヲ徵募シ、且下檢查等ノ法ヲ精密ニセザレバ他ニ此弊害ヲ防止スルノ道ナキヲ以テ、卽今徵兵令改正案取調中ニ有之、此改正整頓ノ上之ヲ實地ニ施行スルトキハ、徵兵法自カラ精密ニ至リ、前顯ノ如キ弊害ヲ矯正スルニ足ルベシ。

別紙本議ノ如キハ畢竟人民ニ於テ政府ヲ怨ムコト之ヨリ甚シキハナキヲ以テ、之ヲ憫量スルノ最モ切ナルヨリ、萬一ハ人民ノ安ンズベキ一端トモ成リ、又ハ其命令ノ行ハル可キ助ケトモナランカト、假リニ此ノ如キ方法ヲ設ケシモノニシテ、之ヲ國法トナシ、之ヲ公告スル等ノモノニ非ズシテ、人民ノ協議上ニ成立スベキモノナルハ言ヲ俟タザルナリ。就テハ前議數ケ條ノ如キニ至リテハ、元案ヲ取捨修正スル元ヨリ妨ゲナキナリ。然ルニ附言嗣子戶主ト雖モ之ヲ徵募シ、且下檢查等ノ法ヲ嚴ニシ云々、弊害ヲ矯正スルニ足ル等ノ事ニ至リテハ、實ニ驚愕痛歎ニ堪ヘザルナリ。如何トナレバ我國人民殆ンド三千五百萬、而シテ人民ノ義務タルノ何事ナルヲ知ルモノ未ダ百分ノ一ニ至ラズ、故ニ曩ニ出ス處ノ徵兵令スラ人民怨恨ノ第一タリ、況ンヤ此ノ如キ人民ニシテ此ノ如キ嚴刻ノ制ヲ出ス時ハ、泣々之ヲ奉ズルアルモ、決シテ之レガ國ノ爲トナルニハ非ザルナリ。之レ結局大壓制ニシテ、益々人心離反ノ原素タリ。故ニ徵兵令ノ如キハ先從前ノ儘之ヲ存シ、自今十數年ノ後ニ至リ、附言ノ如キ精密ノ法ヲ設クルニ至ラバ自ラ人民之ヲ服膺スルノ時期モ有ルベキナリ。敢テ辯論ヲ好ムニ非ザレドモ、陸軍省モ亦政府ノ一部分タリ。故ニ此件ニ至リテハ格別注意ナカルベカラザルコトナリ。依テ少カ贅ス。

日英同盟ト日露協商

目次

壹　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
貳　佛國外相デルカツセー氏ト會見ノ記（其一）
參　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
四　佛國大統領ルーベー氏ニ謁見ノ記
五　佛國外相デルカツセー氏ト會見ノ記（其二）
六　林在英公使ヨリ參考ノ爲メ接受シタル電報拾種
七　伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報
八　林在英公使ヨリ郵送シ來レル參考電報
九　伊藤侯爵ヨリ林在公使宛電報
拾　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
拾壹　伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報
拾貳　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
拾參　露西亞皇帝ニコライ二世陛下ニ謁見ノ記
拾四　井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報
拾五　伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報
拾六　伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報
拾七　露國外相ラムスドルフ伯ト會見ノ記（其一）
拾八　露國藏相ウキツテー氏ト會見ノ記
拾九　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
貳拾　林在英公使ヨリ送附シ來レル參考電報
貳拾壹　林在英公使ヨリ接受シタル參考電報二種
貳拾貳　露國外相ラムスドルフ伯ト會見ノ記（其二）
貳拾參　井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報
貳拾四　伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報
貳拾五　伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報
貳拾六　伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報

貳拾七　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
貳拾八　井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報
貳拾九　伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報
參拾　伊藤侯爵ヨリ山縣侯爵井上伯爵宛電報
參拾壹　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
參拾貳　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
參拾參　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報
參拾四　伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報
參拾五　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
參拾六　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
參拾七　杉村在露臨時代理公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
參拾八　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報
參拾九　獨逸皇帝ウイリアム二世陛下ニ謁見ノ記
四　拾　珍田外務總務長官ヨリ伊藤侯爵宛電報
四拾壹　露國外務大臣ヨリ伊藤侯爵宛書翰
四拾貳　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報
四拾參　伊藤侯爵ヨリ杉村在露臨時公使宛電報
四拾四　伊藤公爵ヨリ林在英公使宛電報
四拾五　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
四拾六　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
四拾七　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
四拾八　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報
四拾九　伊藤侯爵ヨリ露國外務大臣宛返翰
五　拾　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
五拾壹　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報
五拾貳　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報
五拾參　英國外相ランスダウン侯ト會見ノ記（其一）
五拾四　同　上　（其二）
五拾五　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
五拾六　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

五拾七　伊藤侯爵ヨリ栗野公使宛電報
五拾八　栗野公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
五拾九　栗野公使ヨリ伊藤侯爵宛電報
六　拾　栗野公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

（一）桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十一月十一日於巴里接電

明確ナル協和ニ關スル日英兩國政府間ノ商議大ニ其歩ヲ進メ、至急帝國政府ニ於テ決答ヲ爲サヾル點ニ達セシヲ以テ、貴下ハ當方ヨリ更ニ御通知致スマデ巴里ニ滯在セラレンコトヲ望ム。

（二）佛國外相デルカツセー氏ト會見ノ記（其一）

明治三十四年十一月十三日佛國外務省ニ於テ

明治三十四年十一月十三日伊藤侯爵都筑馨六氏ヲ隨ヘ、秋月代理公使ノ案内ニテ佛國外務大臣デルカツセー氏ヲ外務省ニ訪問セラル。

外務大臣　閣下ニ面會スルハ余ノ最モ幸福トスル所ナリ。閣下ハ單ニ余輩ノ常ニ同情ヲ以テ交際スル親交國ノ國民ナルノミナラズ、閣下ノ人格ノ非凡ナル、常ニ欽慕ノ至リニ堪ヘザリシ所ナリ。今日幸ニモ閣下ニ會合スルノ機會ヲ得タルハ余ノ光榮トスル所ナリ。

侯爵　厚情深謝ノ至リニ堪ヘズ、當國着以來種々好意ヲ表セラレ、殊ニ當市到着ノ節ノ如キハ特ニ貴省ノ官吏ヲ停車場ニ派遣セラレ好誼深謝スル所ナリ。

外務大臣　閣下ノ着來ニ少シク先チ、栗野氏ヨリ來信アリ、不遠閣下ノ來遊ヲ知ルヲ得シガ故ニ、官房ノ一人ヲ差出シタルニ過ギザルナリ。行程萬里聞ク所ニ依レバ米國ヲ通過セラレタル由、定メテ御疲勞ナルベシ。

侯爵　米國旅行中ハ僅々タル日數間ニ社交上爲スベキ事意外ニ多カリシガ爲メ、多少疲勞ノ氣味無キニ非ザリシモ、當地着以來全ク常體ニ復シタリ。

外務大臣　欣喜ノ至リナリ。余ハ閣下ノ巴里滯在ノ安樂ナランコトヲ希望ス。

侯爵　拜謝ス、當地ハ見聞スベキ事多大ニシテ來遊スル毎ニ新ナルヲ感ズルヲ以テ、當地ニ滯留スルハ余ノ最モ喜ブ所ナリ。

外務大臣　閣下ノ如斯ク感ゼラルヽハ余輩ノ深謝スル所ナリ。

侯爵　當時ハ議會開會中ナリ、且又外交モ多端ナルノ觀アリ蓋シ御繁忙ナルベシ。

外務大臣　然リ、侯爵モ特ニ熟知セラルヽ如ク、議會ナルモノハ一種ノモノニシテ、兩院共ニ開會

中ナルノミナラズ、當時ハ恰モ改選ノ前ニ當リ、選擧區ノ關係モアリ、聊カ多忙ナリ。

侯爵　御繁忙察スルニ餘アリ。

外務大臣　日本ノ議會モ近年ハ頗ル多端ナルガ如ク察セラル、行動敏活ニシテ僅々タル短日月間ニ遂行シタル所甚ダ多キガ如シ。

侯爵（微笑シツヽ）　日本ニ於テハ議會政治ヲ布キテ以來事物ノ進行活潑ヲ缺クモノアルガ如シ。

外務大臣　然リ議會政治ハ國家ノ爲メ利乎將タ害乎、蓋シ重大ナル疑問ナリト信ズ。

侯爵　尙ホ新聞紙ノ如キモノナルベシ、善ナル所多々アリト雖モ、又其弊モ少シトセザルナリ。

外務大臣　兎ニ角今日ノ時代ニテハ自ラ之レト調和シテ進行スルノ外無シ。

侯爵　御多忙ノ際閣下ヲシテ貴重ナル時間ヲ費サシムルモ不本意ナレバ告別スベシ

外務大臣　夫ハ何故ナルヤ、實ハ閣下ト懇談センコトヲ欲シテ特ニ午前ノ如キ他ニ用事少キ時間ヲ撰定シ置キタルナリ。尤モ閣下ニ於テ今日御疲勞ナルカ、或ハ又他ニ先約ニテモアラバ他日更ニ面談スルモ妨ナシ。

侯爵　決シテ然ルニ非ラズ、唯ダ多忙ナル閣下ヲ永ク煩ハスヲ恐レテ陳ベタルニ過ギザルナリ。

外務大臣　今日ハ特ニ時間ヲ備ヘ置キタルガ故ニ貴慮ヲ煩スコト勿レ。東洋問題ニ關シテハ自分モ深ク注意シ居ル所ナルガ、貴國ト我國トハ從來一トシテ利害ノ衝突シタルコトナク、殊ニ近時清國ニ於テハ兩國ノ兵士交情ヲ暖メタルガ如キ形跡アリ。

侯爵　然リ清國事件ハ一ノ不幸タリシニハ相違無キモ、爲メニ相互ノ事情ヲ疏通シ得タルハ不幸中ノ幸ナリト稱スルヲ得ベシ。

外務大臣　全ク然リ、東洋方面ノ問題ニ關シ貴說ヲ承リタシ。

侯爵　清國ノ事ハ往々人意ノ外ニ出ヅルモノアルガ故ニ、將來如何ナル事變ヲ生ゼズトモ保證シ難シ、然レドモ一朝事變ノ起ルコトアランカ、事局ヲ制限スルヲ勉メテ出來得ル限リ平和ヲ維持シ、以テ商工業上ノ關係ノ發達ヲ圖ルノ外無シト信ズ。

外務大臣　貴見ハ卑官ノ全然同意ヲ表スル所ニシテ、上院ニ於テモ下院ニ於テモ、自分ハ東洋ノ平和ヲ維持シ商工業ノ發達ヲ圖ルノ重要ナルコトヲ既ニ明言シタリ。

茲ニ於テカ談話恰モ中絕スルノ傾アリ秋月代理公使發言ス。

秋月代理公使　栗野公使ハ轉任ヲ命ゼラレタリ。

外務大臣　栗野公使ハ其當地ニ於テ有セラレシガ如キ思想ヲ以テ彼地ニ向ハルレバ定メテ歡迎セラルヽナラント信ズ。栗野氏ハ當地出發ノ前日又ハ前々日ナリシガ、余ト會見ヲ遂ゲタリ。其節種々細密ナル談話モアリ、閣下モ恐ク既ニ御聞及ビアリシナランガ、日露間ノ關係時々圓滑ヲ缺クコトアルハ全ク誤解ニ基ク、如何ニカシテ此誤解ヲ釋キ兩國ノ人心ヲ和ラゲ度キモノナリ。日佛

兩國從來ノ親密ナル關係ハ、將來ニ於テモ尙ホ繼續スルモノト見効シ、萬一東洋ノ風雲日本ヲシテ多少他國ノ友誼的援助ヲ借ルノ必要ヲ感ゼシムルコトアラバ、當國ハ日本ヲ援助スルノ意アリヤトノ問モアリシ故ニ、自分ニ於テハ飽マデ盡力スベキコトヲ約シタリ。其節ニモ日佛間ニハ何等問題ノ起ルベキ恐無ケレドモ、露國トノ關係ニ至リテハ多少問題ノ起ルベキ恐無シトモ保シ難シ。若シ如斯キ場合アランニハ、佛國ハ友誼ヲ以テ公平ニ援助セラルヽノ意志アリヤトノ問モアリシナリ。元ヨリ露國ト日本ト相合シテ、而シテ佛モ亦之レト相提携スルニ至ル時ハ、優ニ彼方面ニ於テ優勢ヲ占ムルヲ得ル次第ナルガ故ニ、異存ノ在ルベキ所謂無ク、現ニ二週間前ニモ東京駐在佛國公使ヨリ、佛國現政府ノ方針ハ其ノ當時栗野氏ニ傳ヘラレタル所ト同一樣ナルカヲ問ヒ來リシニ就キ、全然同一ナリト返答スル考ナリ。

侯爵　露日間ニ於テモ朝鮮ノ外何等起ルベキ問題ト稱スベキモノ無シト雖モ、朝鮮ニ關シテハ日本國內ノ感覺鋭敏ニシテ、或ハ出先ノ些少ナル衝突モ終ニハ其影響スル所大ナルニ至ルノ恐無キニ非ラズ。將來萬一如斯キ事情ノ生ズルアラバ、貴國ハ直接利害ノ關係スル所モ無キガ故ニ、彼我ノ間ニ立チ公平ナル判斷ヲ下スヲ得ベシト信ズ。從テ將來或ハ貴慮ヲ煩ハスコト無キヲ保セザルナリ。

外務大臣　朝鮮問題ニ關シテハ貴國ト露國ノ最高政府ニ於テ公明正大ノ思想ヲ以テ其目的ヲ達セラレンコトヲ勉ムルニ於テハ、必ズ之ヲ遂行シ得ベシト信ズ。出先ノ兩國代表者間ニ議論ノ合セザルコトアランカ、之ヲ更迭セシムレバ足ル。要ハ唯中央政府ニ於テ其意向ヲ有スルヤ否ヤニアリ。自分ハ元ヨリ直接其衝ニ當ル者ニモ無キガ故ニ、深クモ研究セザレドモ、日露間ニハ何カ協商ノ既ニ成リタルモノアル由ナリ。又露國ノ當路者ニ面會シテ聞キタル所ニ依レバ、露國政治家ハ概ネ調和的思想ヲ有シ居ルモノヽ如シ。

侯爵　日露協商ハ存在シ居ルト雖モ、是ハ未ダ最終ノモノナリトモ認メ難シト信ズ。

外務大臣　或ハ然ラン、然レドモ兩國政府ニ於テ公明ナル思想ヲ以テ其協定ヲ圖ルニ於テハ、細密ナルモノヽ出來ザル筈ナカルベシ。露政府既ニ調和的思想ヲ有シ、且又日本ノ朝鮮ニ於ケル商業上及工業上ノ利害關係ハ露政府ニ於テモ充分認識シ、其發達ハ勿論正當視シ居ル樣ナレバ、若シ双方ノ合意相整ヒ依リテ以テ日佛露相合スルヲ得バ、殆ンド之レニ敵スルモノ無カルベシ。

侯爵　露政府ニ於テ調和的思想ヲ抱持シ居ルコトハ平常聞知スル所ニシテ、閣下ノ言ニ依リ更ニ之ヲ確ムル事ヲ得タルハ自分ノ最モ喜ブ所ナリトス。

外務大臣　閣下ハ今回ノ御旅行中露國ニモ行カルヽヤ。

侯爵　本國出發前露國公使ノ勸誘モ有リシ事故、行キ度シトハ思ヘドモ未ダ確答シ難シ。

外務大臣　尙ホ幾日間程當地ニ滯在セラルヽヤ。

侯爵　凡ソ一週間位ナルベシ。

外務大臣　左樣ニ短キカ、自分ハ屢々侯爵ト會談スルノ機會アランコトヲ切望シタルニ遺憾ノ至リナリ。昨夜大統領ニ面會セシニ、速カニ謁見ノ運ニ至ルベキコトヲ話シ居ラレタリ。

侯爵　此地ヲ去ル前ニ於テ大統領閣下ニ敬意ヲ表スルコトヲ得ルハ滿足スル所ナリ。

茲ニ於テカ外相答禮ノ時刻ヲ約シテ去ル。時ニ正午十二時

(三)　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十一月十三日於巴里接電

巴里ニ赴キ先電陳述ノ問題ニ關シ貴見ヲ問フベキ旨公使（林董男）ニ訓令シタリ。

(四)　佛國大統領ルーベー氏ニ謁見ノ記

明治三十四年十一月十四日エリゼ宮ニ於テ

明治三十四年十一月十四日午前十時十分伊藤侯爵都筑馨六氏ヲ隨ヘ秋月代理公使同伴ニテ「エリゼ」宮ニ赴キ、佛國大統領ルーベー氏ニ謁見セラル。

侯爵　本日ハ謁見ノ榮ヲ得テ大幸ノ至リニ存ズ。

大統領　侯爵ノ如キ英名ノ當地ニ嚇々タル偉人ニ會合スルヲ得タルハ甚ダ滿足スル所ナリ。貴國民ハ東洋ノ佛人ナリ。然リ而シテ如何ナル忠實如何ナル勇氣如何ナル識見ヲ以テ侯爵ノ國家ニ盡ス所アリシヤハ自分ニ於テモ夙ニ熟知スルガ故ニ、今日侯爵ニ會合スルコトヲ得タルハ自分ノ最モ喜ブ所ナリ。

侯爵　屢々當地ニ來遊シ芳名ハ夙ニ拜承セシニ拘ハラズ、不幸ニシテ今日マデ拜顏ノ榮ヲ得ザリシニ、今日大共和國ノ大統領トシテ拜顏スルヲ得タルハ自分ニ於テ深ク光榮トスル所ナリ。

大統領　貴國ハ議會政治ノ新經驗ヲ爲サレツヽアリ。是ハ當方ニ於テモ大ニ興味ヲ以テ注目シツヽアリ。上下兩院ノ制度等ハ大體上當國ノ制度ト異ル所無キガ如シ。而シテ其國家ニ及ボス影響及其活動如何等ニ關シテハ自分ニ於テハ一日モ怠ルコト無ク注目シ居レリ。

侯爵　我國ニ於テハ立憲政治ヲ布キテ以來未ダ拾數年ニ過ギズシテ、經驗スル所モ從テ少シト雖モ、自分ハ當初ヨリ此事ニ直接關係シタルガ爲ニ、多少考フル所モアリ、自分ノ見ル所ニ依レバ、漸ヲ追テ善良ナル成績ヲ收ムルモノヽ如シ。自分ハ歐米ニ旅行スル毎ニ他國ニ於ケル立憲政治ノ實況ヲ研究シ、以テ歸國後ノ參考ニ供スルコトヲ勉メ居レリ。

大統領　栗野公使ノ近況如何、氏ト交際スルヲ得タルハ自分ノ最モ喜ビタル所ナリ。先年當地ノ博覽會ニ於ケル日本ノ出品物ハ非常ノ成功ニシテ、又同博覽會ニ關係セシ貴邦人ノ親切ナリシハ實

ニ喜ブ所ナリ。就中自分ニ對シテハ一同誠ニ懇切ヲ盡シ吳レ、自分ニ於テモ滿足ノ至ナリキ。日本ノ出品ハ品質ノ精巧ニシテ注意ノ周匝ナル、一般世人ノ賞贊ヲ博シタリ。日本ノ美術ハ特ニ名聲ヲ博シ、トロカデロノ日本古美術展覽會ノ如キ、日本美術ノ精巧ヲ賞贊スルノ外ナシ。

侯爵　栗野ハ自分出發前ニハ無事ニテアリキ。慥カ露國ヘ轉任セリト聞ク。博覽會ニ於テ日本部ノ幾分カ成功セシコトハ自分モ聞知セル所ニシテ、誠ニ滿足ニ堪ヘズ。美術ニ關シテハ貴國ヲ以テ歐洲第一トナスハ謂フ迄モ無シ、日本ニ於テモ深ク此點ニ注目シ、未ダ成功ノ見ルベキモノ無シト雖モ、貴國美術ノ研究ハ充分爲シツヽアリ。

大統領　自分ノ故郷ナル當國南方ノ一小洲ト、日本トハ殆ンド三十年乃至三十五年以前ヨリ密接ナル關係アリ。蠶病ノアリシ際、歐洲諸國ニ人ヲ派遣シテ研究セシメタルモ、好結果ヲ得ズシテ終ニ日本ニ人ヲ派遣シテ種紙等ノ調査研究ヲ爲サシメタリ。自分ハ尙ホ蠶紙ノ見本ヲ保存ス。如斯キ關係ガ緣トナリテ日本ヨリ三少年來リ、鄕里ノ中學ニ於テ勉强スルニ至レリ。

侯爵　左樣ナルカ、凡ソ幾年程以前ナルカ。

大統領　十四五年以前ナランカ、一人ハ宮內省御用馬車製造人ノ子ナリシガ如シ。其後三人ノ內一人ハ佛國南方ニ於テ佛人ヲ娶リ、尙ホ佛國ニ在留シ居ルモノヽ如シ。其他ノ二人ハ歸國セシナラム。自分ノ伴ハ當年二十七歲ナリ、其頃同時ニ勉學セシガ故ニ恐ラク拾四五年前ノ事ナラン。

大統領更ニ語ヲ更メテ曰ク

大統領　閣下御歸國ノ節ハ自分ノ常ニ　天皇陛下皇族方ノ隆盛幸福ヲ祈リ居ル旨、及ビ貴國ニ對スル佛國ノ好意同情ヲ　陛下竝ニ國民一般ニ告ゲラレヨ。

侯爵　御下命ノ趣必ズ執行スベシ　陛下竝ニ皇族方ニ於カセラレテモ定メシ御滿足ニ思召スナラン。且又人民一般ニ於テモ先年北淸事件以來互ニ氣質ヲ知リ、兄弟ノ如キ感ヲ抱キ居ルコトナレバ貴意ノ在ル所ヲ敎示セバ定メテ大ニ喜ブ所アルベシト信ズ。

大統領　閣下ハ尙ホ暫ク當地ニ御滯在ナル乎。

侯爵　凡ソ一週間ナラント信ズ。

大統領　來週ノ終迄ナル乎。

侯爵　凡ソ本月二十日頃迄ナルベシ。

大統領　然ラバ來ル月曜日（十八日）極メテ無儀式的ニ自分ノ內輪ノミニテ、所謂家族的ニ食事ヲ差上度ク希望ス。御請下サルベキカ。

侯爵　自分ニ取リテモ大ナル名譽ナリ謹ンデ御請仕ル。

大統領　就キテハ二三週間前ニ東洋ヨリ歸國シタル一軍人アリ、卽チ貴國兵等ト肩ヲ竝ベテ戰ヒタル我ガ指揮官ヴオツルン中將ニシテ、先キニ貴地滯在中閣下ニ拜顏セザリシヲ遺憾トナシ居ルヲ

以テ、閣下ノ來邸ヲ幸ニ彼レヲモ同時ニ招キ置キ度ト存ズ。閣下ニ於テハ御異存無キカ。彼レハ極メテ幼少ナル頃ヨリ自分ノ私友ナリ。

侯爵　異存無キノミナラズ、其機會ニ於テ氏ニ拜顏スルヲ得ルハ自分ノ最モ喜ブ所ナリ。

大統領　北清事件ノ際ログラン大佐ガサン、シオン兵學校ニ於テ教授セシ二人ノ貴國士官ト出會シ、公務ノ傍ニハ度々會談シテ極メテ愉快ナリシ由語リ居レリ。

茲ニ於テ握手ノ禮ニ終リテ退出ス時ニ拾時四十五分。

（五）佛國外相デルカツセー氏ト會見ノ記（其二）

明治三十四年十一月十四日巴里マンチメンタル旅館ニ於テ

明治三十四年十一月十四日午前十一時二十分佛國外務大臣デルカツセー氏答禮ノ爲メ伊藤侯爵ヲ旅館ニ來訪ス。席ニ都築馨六氏及秋月代理公使アリ。

侯爵　昨日ハ御邪魔申上ゲタリ。

外務大臣　本日ハ大統領ニ謁見セラレタル筈ナリ。

侯爵　今朝拜謁只今歸館致セシノミナリ。實ニ懇切ナル事ニテ滿足ノ至ナリ。

外務大臣　貴國ニ對スル感情ハ昨日陳述シタルガ如シ。大統領ニ於テモ其友情ヲ表示シタルニ過ギザルベシ。

侯爵　日本ノ如キハ其關係スル所主トシテ東洋ニ限レルガ如シト雖モ、貴國ノ如キハ洋ノ東西ヲ問ハズ、總テ關係スル所少カラザルガ故ニ、御繁忙ノ程察スルニ餘アリ。日本ノ外交ハ只今モ述ベタル如ク、幾分カ簡單ニシテ、主トシテ東洋ニ於ケル平和ヲ維持シ、經濟上ノ發達ヲ計ルニ止マル。幸ニシテ貴國トハ利害ノ衝突スルモノ無ク、將來益〻親密ヲ加フルノ徵アルハ滿足ニ堪ヘズ。

外務大臣　既ニ昨日モ陳ベタル如ク、東洋ニ於ケル佛國ノ政策ハ、既有ノモノ（領土ノ謂也）ヲ確守シ、經濟上ノ發達ヲ計ルニ在リ。然ル上ハ平和ヲ切望スルハ勿論ナリ。之レ屢々自分ノ議會ノ演壇ニ於テ公言シタル所ナリ。換言スレバ、佛國ノ政策ハ極メテ保守的ナルガ故ニ、將來日本トハ毫モ利害ノ衝突スル所ナク、益々親密ノ度ヲ加ヘンコト疑ヲ容レザルナリ。

侯爵　貴我ノ關係ハ元ヨリ然リ、東洋ト云ヘバ其一ハ支那ヲ意味スル次第ナルガ、同國ノ狀勢ハ往々豫言スベカラザルモノアリテ、昨年ノ如キ奇變將來ニ於テモ起ルコト無キヲ保セズ。萬一如斯キ事變ニ際セバ、關係列國ニ於テ其事局ヲ制限スルコトヲ勉メ、且又一方ニハ列國間ニ於テ互ニ利害ノ衝突ヲ避クルコトヲ勉メバ、或ハ將來ニ於テモ幸ニ無事ヲ保ツコトヲ得ンカ。

外務大臣　北清事件モ幸ニ無事終局ヲ告ゲタル今日ニ當リ、近キ將來ニ於テ再ビ右ノ如キ奇變無カランコトヲ切望ス。今回ノ事件ノ結局ノ如キハ古今未曾有ニテ、文明諸國ガ何等利己的ノ意志無

ク、仁道ノ爲メニ各々出兵シ、各國ノ兵士肩ヲ並ベ相提携シテ事ニ當リタルガ如キハ、外交史上多ク見ザル所ナリ。然リ而シテ列國間毫モ衝突スルコト無ク、圓滿ナル結局ヲ見ルニ至リタル事實ハ、將來ニ於テモ亦一朝變亂ノ生ジタル際、今回ト同樣平和ニ局ヲ結ブコトヲ得ベキ前徵ナランカト信ズ。閣下ノ高論ニ依レバ（是ハ通譯ノ多少不足セシ爲メ、侯爵ハ將來萬一ノ場合ニ於ケル心得方ヲ語ラレシモ、外務大臣ハ却テ將來右ノ如キ場合ニ於テハ云々ノ點ハ憂慮スベキモノアリト云ハレタルガ如ク了解セリ。之レ卽チ此質問ノ出ル所以ナリ）或ル國ノ深意等憂慮スベキモノアルガ如ク感ゼラルヽモ、右ハ何レノ國ヲ意味セラルヽヤ伺フコトヲ得ベキカ。

侯爵　自分ハ一二ノ國ヲ指サント欲シタルニアラズ。唯將來右ノ如キ心得ヲ以テ各國和衷協同シテ東洋ノ事ヲ處スルニ於テハ、幸ニ其無事ヲ持續スルコトヲ得ベキカト云ハント欲シタルニ過ギズ。

外務大臣　然リ、而シテ佛國ノ希望ハ全ク右御陳述ノ趣ト異ル所無シ、乍併御疲勞ノ際餘リ長ク閣下ヲ煩ハスモ不本意ナリ、且又何レ御出發前ニ更ニ拜眉ノ榮ヲ得ベシ。大統領ハ定メシ食事ニ招待セシナラン自分モ列席ノ筈ナリ。

侯爵　然リ來ル十八日ノ晝餐ナリ。

外相乃チ辭シ去ル時ニ拾壹時五拾分

左記拾通ノ電報ハ明治三十四年十一月十四日巴里ニ於テ參考ノ爲メ林在英公使ヨリ接受シタルモノノ大意ナリ。

（六）(1) 林在英公使ヨリ曾根外務大臣宛

明治三十四年八月一日午後四時倫敦發電

七月三十一日ランスダウン侯小官ニ語テ曰ク、電報第七拾中ニ嘗テ述ベタル永久的協和ノ問題ハ、今ヤ之ヲ考慮スベキ時ナリト、而シテ侯ハ日本ガ果シテ滿洲ニ於テ利益關係ヲ有スルヤ否ヤ、且又此ノ協和ヲ爲スニ就テハ日本ハ如何ナルコトヲ要求スルカヲ知ランコトヲ望メリ。小官答ヘテ曰ク、自分ノ意見ニ依レバ、滿洲ニ於ケル日本ノ利益ハ間接ナリ、然レドモ若シ露西亞ニシテ滿洲ノ富源ヲ開拓發達スルコトアランカ、進ンテ手ヲ朝鮮ニ出スニ至ルベシ。是レ卽チ日本ノ飽ク迄防遏セザル可カラザル所ナリ。故ニ愚見ニ依レバ、日本ハ第一成ル可ク露西亞ヲ滿洲ヨリ遠クルコト緊要ナリ。第二若シ已ムヲ得ズシテ露西亞ト兵戰ヲ交ユルニ至ル場合ニ於テハ、第三國ノ露西亞ヲ援助セザルコト必要ナリト。ランスダウン侯曰ク、大不列顛國ハ朝鮮ニ於テハ利益關係ヲ有セズト雖モ、而カモ朝鮮ノ露西亞ノ手中ニ陷ルヲ見ルヲ欲セズ、而シテ支那ニ對シテハ英國ノ政策ハ門戶開放及ビ帝國保全ヲ維持スルニ在リ。故ニ日英兩國ノ目的相一致シ、今日コソ兩國相互ノ保護ノ爲

メ何等カノ處置ニ出ヅベキ時ナレド、侯ハ他日更ニ此ノ問題ヲ語ランガ爲メ、尙ホ考慮ヲ竭サンコトヲ小官ニ望メリ。侯ハ尙ホ露西亞ガ嘗テ朝鮮ノ中立ヲ保護セント申込タル時ニ、日本ハ之ニ滿足セズシテ拒絶セシニ非ズヤト問ヒタルガ故ニ、小官之ニ答ヘテ曰ク、朝鮮人ハ自ラ其國ヲ治ムル能ハズシテ忽然由々敷騷亂ノ起ラザルヲ保セズ、玆ニ於テカ何人ガ朝鮮ノ政ヲ行フカノ問題起リ、終ニ朝鮮ニ利益關係ヲ有スル諸國間ノ衝突ヲ喚起スルニ至ルモ亦已ムヲ得ザルナリト。ランスダウン侯曰ク、果シテ然ラバ朝鮮ニ於ケル日本ノ利益關係ハ、ツランスバールニ於ケル大不列顛國ノ利益關係ニ類似スルモノアリト。

以上ハ全ク私人トシテノ會話ニ過ギザレドモ、以テ英國政府ノ意向ヲ表示スルニ足ルモノト解セザルヲ得ズ。特ニ既電報ヲ以テ報告ニ及ビタル以後ニ亘ルヲ以テ、尙更然リト認メザルヲ得ズ。話題如斯ク其歩ヲ進メ來リタル以上、日本政府ハ全ク如斯キ協和ヲ爲スノ意ヲ有セザルカ、或ハ又條件如何ニ依リテハ之ヲ爲スモ可ナリトナスカヲ知ルコト小官ニ取リテ最モ必要ナリ。二途其ノ一ヲ以テ小官ニ訓令センコトヲ乞フ。小官ハ政府ヲ拘束スルガ如キ行爲ハ充分注意シテ之ヲ避クベキニ付キ、其邊ハ安慮アリタシ。條件ハ實際商議ヲ開始シタル後ニ之ヲ議スルモノトス。敢テ小官ノ見ル所ヲ述ベンカ、日英兩國間若クハ事宜ニ依リ日英獨三國間ニ於ケル相互援助ニ關スル公然ノ條約ハ、極東ニ於ケル我ガ勢力ノ維持上大ニ利益アルベシ。

(2) 曾根外務大臣ヨリ林在英公使宛

明治三十四年八月八日午後五時十分東京發電
同日午後八時三十八分倫敦著電

極東問題ニ關シ明確ナル協和ヲ爲サントスル英國政府ノ提議ニ關シテハ、日本政府其ノ主意ニ就キテハ異存ヲ挾マズト雖モ、實際果シテ如斯キ協和ヲ締結シ得ベキヤ否ヤノ問題ハ、一ニ關係國ノ間ニ意見ノ一致ヲ見ルコトヲ得ベキヤ否ヤニ依リテ決スベキモノトス。故ニ日本政府ノ望ム所ハ先ヅ準備的歩分トシテ、協和ノ性質竝ニ範圍ニ關スル英國政府ノ意志ヲ一層明瞭ニ知ルニ在リトス。日本政府ハ之ニ報ズルニ本問題ニ關シ其ノ見ル所ヲ以テスベシ。本問題ニ關スル貴官ノ電報ヲ見ルニ、サー、クロード、マクドナルドハランスダウン侯ニ比シ一層胸襟ヲ開キテ談論ヲ爲スノ形跡アリ。是レ固ヨリ當然ノ事ニシテ敢テ怪シムニ足ラズト雖モ、貴官モ亦之ニ對シテ同樣ノ方針ヲ守ラザルヲ得ザルベシ。故ニ貴官ニ許スニ本問題ニ關スル前陳日本政府ノ態度ヲサー、クロード、マクドナルドニ內談トシテ知ラシムルコトヲ以テス。尤モ此ノ委任タル決シテ貴官ノ認メテ以テ得策ナリトナス場合ニ於テハ、同樣ノ內談ヲランスダウン侯ニ對シテ爲スヲ妨ゲザルモノトス。兎ニ角日本政府ノ態度ヲ知ルハ貴官ヲシテ從前ニ比シ一層自信ヲ以テ本問題ニ關シランスダウン侯ト討議ス

ルヲ得セシムル所以ナリトス。（未完）

明治三十四年八月八日午後七時三十五分東京發電
同日午後九時四十二分倫敦著電

貴電ヲ以テ報告アリタルランスダウン侯ニ對スル貴官ノ答辯ハ之ヲ是認シ、尙ホランスダウン侯及ビサー、クロード、マクドナルドト談論中臨機下記ノ如キ解說ヲ爲スヲ認許ス。

朝鮮ヲ以テ外國ノ膨張政策ノ影響以外ニ置クコトハ、假令之ガ爲メニ如何ナル危險ヲ犯スコトアリトスルモ、又之ニ對シテ如何ナル代價ヲ拂フコトアリトスルモ、帝國政府ノ常ニ保持セザルヲ得ザル方針ナリトス。蓋シ此ノ方針ヲ保持スルハ卽チ自己ノ安全ヲ謀ル所以ナレバナリ。又日本政府ノ見ル所ニ依レバ、露西亞ノ滿洲ニ於ケル勢力ニシテ、現存協定以外ニ張溢スルコトアラバ、是レ卽チ朝鮮ノ獨立ヲ危クスル所以ニシテ、自ラ日本ノ憂慮セザルベカラザル所トス。加之如斯キ勢力ノ擴張其他北淸ニ於ケル領土的商業的工業的利益壟斷ノ增進ハ、日英兩國ノ政策ト相容レザルモノ、如シ。貴官ハ本協和ニ關連スル種々ノ問題ニ就キ英國政府ノ意見ヲ成ル可ク充分ニ敲クコトヲ努ムベシ。如斯キ商議ハ其成否ニ拘ラズ、貴官ニ於テハ最モ愼重ナル態度ト臨機應變技倆トヲ要スベキコトニ就キテハ特ニ之ヲ明言スルノ必要ナカルベシ。凡テ本問題ニ關スル貴官ノ交涉ハ祕密的且談話的タルベシ。

(3) 林在英公使ヨリ曾根外務大臣宛

明治三十四年八月十五日午後五時三十五分倫敦發電

貴電ニ關シ小官ハ八月十四日ランスダウン侯ト會見シ、協和問題ニ就キ日本政府ニ電報シテ其ノ意見ヲ問ハンガ爲メニ、一層精細ナル說明ヲ得ンコトヲ乞ヘリ。侯ハ之レニ答フルニ、本問題攻究ニ關スル利害關係ガ日本ハ英國ニ比シテ一層重大ナルガ故ニ、日本ヨリ希望ヲ發言スル方然ルベシトノ意ヲ以テセリ。侯ハ尙ホ附言シテ曰ク、余等ノ會見ニヨリテ察スルニ、協和ノ重ナル目的ハ淸帝國ノ門戶開放及ビ保全竝ニ朝鮮ニ於ケル日本ノ利益維持ニ在リト。之レニ對シ小官ガ以上ハ單ニ小官一個ノ私說ニ過ギズト答フルヤ、侯ハ八月六十日ヨリ約一ケ月間愛蘭土ニ赴クヲ以テ、休暇中同地ニ在リテ尙ホ本問題ニ就キ熟慮スベシト陳ベタリ。侯ハ其間ニ小官ニ於テ日本政府ノ委任ヲ得テ、侯歸京ノ際ニハ眞面目ニ本問題ヲ談論シ得ベキ運ニ爲サンコトヲ望メリ。事局ノ發展ヲ速カナラシメンガ爲メ、小官ハ委曲協定ノ準備トシテ、正式ニ意見ヲ交換スルノ認許ヲ望ミ、既電中ニ枚擧シタル諸項ノ如キモノヲ列ネテ之ヲ個人的ニ提議シ、以テ協商ノ基礎トナスノ認許ヲ得ンコトヲ希望ス。

サー、クロード、マクドナルドハ倫敦ニ在ラズ、小官ハ機ヲ失セズシテ貴官ノ訓令ニ接センコトヲ切ニ待望シツヽアリ。

(4) 林在英公使ヨリ曾根外務大臣宛

明治三十四年八月十九日午後四時三十分倫敦發電

サー、クロード、マクドナルドハ日本ニ向テ出發スル前ニ、倫敦ニ歸來スルコトナキ樣子ナリ。從テ小官ハ同氏ノ盡力ヲ利用スルコト能ハザルベシ。然レドモ今ヤ外務大臣既ニ本問題ヲ開始シタレバ、思フニ小官ハ彼ト交渉スルノ便宜アルベシ。彼ハ勿論其ノ言論ヲ愼ミ、概シテ兩國各自ノ利益ヲ相互的ニ保護スル爲メノ永久的協和ト稱シ來リタレドモ、日英同盟ナル語モ亦屢々彼ノ口ヨリ出タリ。小官ノ見ル所ニ依レバ、ランスダウン侯ノ意中ト、サー、クロード、マクドナルドノ意中トハ同一物ヲ指スニ在ルコトハ疑ヲ容レザルナリ。從テ今ヤ問題ハ如何ナル方法ニ依リ、右相互的保護ヲ執行シ得ベキヤト云フニ在リ。彼我ノ內孰レヨリ條件ヲ發言スベキヤハ枝葉ノ論ナリ。然レドモ小官ノ見ル所ニ依レバ、寧ロ發案者ニ利アルベシ。滿洲及朝鮮ニ關シテランスダウン侯ニ語リタル愚說ハ、既ニ貴官ノ是認スル所トナリタルヲ以テ、小官ハ凡テノ機會ヲ利用シ、同地方ニ於ケル日本ノ利益ヲ指示スルニ貴電ノ意味ヲ以テスルコトヲ怠ラザルベシ。當時內閣大臣ハ休暇ノ爲メ凡テ田舍ニ在リテ、今後些クモ一ケ月間ハ捗々敷公務モ運バザルベシ。其間本問題ニ就キ熟慮アラソコトヲ望ム。

(5) 林在英公使ヨリ小村外務大臣宛

明治三十四年十月十六日午後十一時十五分倫敦發電

十月十六日ランスダウン侯ニ會見シ、同盟問題ニ關シ意見ヲ交換スルノ委任ヲ受ケタルコトヲ同侯ニ告ゲタリ。尤モ精細ナル訓令ニ接セザルガ故ニ、談話中小官ヨリ提議ヲナスコトアルモ、其ハ凡テ自分一個ノ私說ニシテ、後日ニ至リ我政府ヨリ之ヲ變更又ハ拒絕スルコトヲ妨ゲズ、從テ政府ハ之レガ爲メ毫モ拘束セラルヽ所ナキモノナルコトヲ了センコトヲ乞ヒタリ。然ル後小官ハ侯ノ意見ヲ問ヒタルニ、侯ハ協約ノ範圍及性質ヲ決定セント欲セバ、先ヅ第一著ニ當事者ノ希望ヲ知ルコト最モ必要ナリト答ヘタリ。小官曰ク、日本ノ希望ハ凡テ朝鮮ニ於ケル其ノ利益ヲ保持シ、他國ヲシテ之ヲ攪亂セシメザルニ關連スト。侯ハ日本ノ對淸政策ヲ問ヘリ。小官曰ク、日本ノ政策ハ英國政府ノ聲明シタル政策ト同一ニシテ、淸帝國ノ領土ヲ保全シ、其ノ門戶開放ヲ維持スルニ在リト。次ニ侯ハ同盟ノ性質ニ關スル小官ノ意見ヲ問ヘリ。小官曰ク、二國又ハ二國以上ガ締盟國ノ一方ニ對シ干戈ヲ訴フル時ハ、他ノ一方ハ直ニ兵力ヲ以テ其ノ同盟國ヲ援助スベシト。侯ハ之ニ同意ヲ表セシノミナラズ、英政府ノ意ハ單ニ以上ノ條件ニ止マラズシテ、常ニ兩國間ニ親密ナル關係ヲ維持シ、依テ以テ極東問題ニ就テハ互ニ信據シテ相提携セントスルニアリト。侯ノ意ハ蓋シ締盟國ハ誠

意ヲ以テ同盟ヲ重ンジ、同盟ヲ利用シテ陰ニ款ヲ他國ニ通ス可ラズト云フニアルナランカ。小官ハ侯ニ告グルニ是レ卽チ我等ノ蹈ミ來リタル同一軌道ニシテ、今日ト雖モ之ト異ル所ナク、本同盟モ亦此ノ關係ヲ密ニスルニ過ギザルベキ旨ヲ以テセリ。侯ハ此等ノ意見ヲソルスベリー侯ニ提供シ、右方針ニ基キテ尙ホ細目ヲ摘記シ、再ビ小官ト協議スベシト答ヘタリ。次ニ小官ハ獨逸政府ヲ本件ニ加入セシムルコトニ就キ侯ノ意見ヲ問ヒタルニ、侯ハ目下ノ處本件ヲ以テ兩國政府間ノ事柄ニ止メ、將來幾分カ明瞭ナル處分案ヲ見ルニ及ンデ之ヲ獨逸政府ニ告グベキ旨ヲ答ヘタリ。要スルニ討論ノ端緒ナルヲ以テ、會話ハ自然頗ル大體ニ涉レリ。然レドモ小官今日マデノ行動ハ日本政府ノ是認スル所トナランコトヲ希望ス。

(6) 小村外務大臣ヨリ林在英公使宛

明治三十四年十月十九日午後三時二十分東京發電
同日午前十時三十六分倫敦著電

日本政府ハ貴電ヲ以テ報告セラレタル貴官ノ行爲ヲ是認シ、鶴首シテ後報ヲ待ツ。

(7) 林在英公使ヨリ小村外務大臣宛

明治三十四年十一月六日正午十二時倫敦發電

先電ニ關シランスダウン侯ハ內閣ノ議ニ附シタル後、十一月六日ヲ以テ協約草案及別條案ヲ小官ニ交付シタリ其文左ノ如シ。

協約草案

偏ニ極東ニ於テ現狀及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ、且ツ外國ノ朝鮮ヲ併呑スルヲ防遏スルコト、及支那ノ獨立ト領土保全トヲ維持シ、該國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ、特ニ利益關係ヲ有スル各自ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケタル下名ハ玆ニ左ノ如ク約定セリ。

第一條　大不列顛國又ハ日本國ノ一方ガ上記ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ、別國ト戰端ヲ開クニ至リタル時ハ、他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ、併セテ其ノ同盟國ニ對シテ他國ガ交戰ニ加ハルヲ妨クルコトニ努ムベシ。

第二條　上記ノ場合ニ於テ若シ他ノ一國ガ該同盟國ニ對シテ交戰ニ加ハル時ハ、他ノ締約國ハ來リテ援助ヲ與ヘ、協同戰鬪ニ當ルベシ。媾和モ亦該同盟國ト相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スベシ。

第三條　兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經ズシテ他國ト上記ノ利益ニ影響ヲ及ボスベキ別約ヲ爲サヾルベキコトヲ約定ス。

第四條　大不列顛國若クハ日本國ニ於テ上記ノ利益ガ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ、兩國政府ハ相互

ニ充分ニ且隔意ナク通告スベシ。

別　條

兩締約國ノ間ニハ尙ホ兩國ノ海軍ハ成ル可ク平時ニ於テ行動ヲ共ニシ、一方ノ軍艦ヲ他ノ一方ノ港灣內ニ於テ修繕スルコト、石炭蓄積地ヲ利用スルコト、及其他各自ノ海軍ノ隆盛及實力ニ影響スベキ便宜ハ相互ニ之ヲ與フベキコトヲ約定ス。

右ノ草案ニ關スル小官ノ意見及建議ハ後電ニ讓ル。

(8) 林在英公使ヨリ小村外務大臣宛

明治三十四年十一月七日午後六時十五分倫敦發電

先電ニ關シ協約草案序文中ノ朝鮮ニ關スル文章ニ特ニ注意セラレンコトヲ望ム。ランスダウン侯ハ右ノ文章ハ日本ガ朝鮮ニ於テ取得セント欲スルモノヲ包含スト說明スレドモ、愚見ニ依レバ特ニ說明的ノ一條ヲ設ケテ以テ一層明細ニ大不列顚國ハ朝鮮ニ於ケル日本ノ主優ナル利益ヲ承認シ、且日本ニ於テ之ヲ保護スルノ目的ヲ以テ施スベキ措置ハ、凡テ之ヲ承認スベキコトヲ明示スルヲ以テ、策ノ得タルモノトナスナリ。而シテ此一條ハ之ヲ公ニ發表セザルモ亦可ナリ。協約草案ヲ小官ニ交付スルニ際シ、ランスダウン侯ハ語テ曰ク、內閣ニ於テ本問題ヲ議スルノ際、或ル閣員等ハ楊子江岸ニ於ケル英國ノ利益ハ朝鮮ニ於ケル日本ノ利益ノ如ク最重ナルモノニアラザルガ故ニ、須ク協約ノ範圍ヲ擴メ、之ヲ以テ他ノ地方例之ハ印度ノ如キ地方ニ於ケル英國ノ利益保護ニ應用シ、以テ各當事者ノ利益ヲ平等ナラシムベシト論ジタルモノアリト。

而シテランスダウン侯ハ小官ニ乞フニ此議論ニ就キ充分考慮センコトヲ以テセリ。小官ニ於テハ條約ノ範圍ヲ擴張シ、暹羅海峽殖民地及印度ニ於ケル英國ノ利益保護ヲ包含セシムルモ大ナル異論ナシ。如何トナレバ大不列顚國ハ決シテ重大ナル理由ナクシテ干戈ヲ動カスモノニアラザレバナリ。小官ハ此點ニ關スル日本政府ノ意見ヲ知ランコトヲ望ム。又草案中ニハ協約ノ有効期間ニ關シテ明言スル所ナキガ故ニ、小官ハ右期間ヲ些クモ五年トシ、期限ニ達スレバ更ニ五年間効力ヲ再新シ得ベキコトヽセンコトヲ提議ス。貴覽ノ如ク英國政府ハ既ニ本件ニ關シテ熟慮ヲ遂ゲ、小官等ハ最早單ニ私說ノミヲ交換シツヽアルニアラズ。小官ハ日本政府ガ本問題ニ就キ充分ニ考慮シ、小官ニ委任スルニ日本政府ノ意見ヲ英國政府ニ通牒スルヲ以テセンコトヲ望ム。

(9) 小村外務大臣ヨリ林在英公使宛

明治三十四年十一月十三日午後五時十三分東京發電
同日午後二時三十分倫敦著電

貴電ニ關シ日本政府ノ確乎タル決定ハ其内電報ニ及ブベシ。貴官ハ不取敢巴里又ハ其他ノ伊藤侯ノ現滯在地ニ赴キ、本問題ニ關スル最近ノ電報ヲ悉ク同侯ニ示スベシ。貴官ハ成ルベク英政府ノ提出シタル草案ニ包含スル主意ニ就キ、侯ノ賛同ヲ得ンコトヲ勉メ、其結果ヲ直接本官ニ電報スベシ。

（七）伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十一月十五日於巴里發電

余ハ係屬中ノ草案ヲ見タリ。其大體ノ主意ニ就テハ異論ナシ。然レドモ貴下ハ下ノ諸點ニ深ク注意シテ考慮ヲ盡サヾル可カラズ。

第一　若シ獨逸ヲ此契約ニ加ヘンコトヲ望マバ、商議ノ進行餘リ其歩ヲ進メザルニ先チ、同國ニ協議スル方或ハ得策ナルベシ。

第二　協約ノ範圍ヲ支那本部ニ限ルト、清帝國全體ニ及ボスト二者ノ内孰レヲ擇ブベキカ。

第三　「他國ノ朝鮮併呑」ハ我等ノ目的トスル所ニ照シテ狹隘ニ失スルコトナキヤ。

兎ニ角貴下ハ余ガ露國政府ト意見ノ交換ヲ遂グル迄、確定ノ判斷ヲ延バサル、方得策ナルベシ。而シテ差向キ該協約ノ大綱細目文章竝ニ其ノ將來ニ及ボスベキ結果等ニ就キ、注意シテ研究セラレシコトヲ希望ス。

左記ノ電報ハ林在英公使ヨリ參考ノ爲メ伊藤侯爵ニ郵送シ來リタルモノニシテ明治三十四年十一月二十三日伯林ニ於テ接受

（八）林在英公使ヨリ小村外務大臣宛

十一月二十日ランスダウン侯ニ會見シタルニ、侯ハ先電ヲ以テ小官ヨリ報告シタル侯ノ草案ニ對シ返答如何ヲ問ヘリ。小官之ニ答ヘテ、該案文ハ政府ニ電報シタルモ、右ハ日本ニ於テ初メテ新政策ヲ執ル儀ニ付、熟慮ノ爲メ多少ノ時日ヲ要スベシト告ゲタリ。侯曰ク今ヤ眞面目ニ本問題ニ着手シタルヲ以テ、成ルベク速ニ之ヲ結了スルコト緊要ナリ。若シ日本政府ヨリ修正ヲ提議スルコトアラバ、當國ノ内閣會議ニ附シ、而シテ後再ビ日本ト協議セザルベカラズ。此手續ノミニテモ些カラザル時日ヲ要スベシ。若シ多クノ時日ヲ費セバ漏洩ノ恐アリ。爲メニ不都合ナル結果ヲ生ズベシト。小官ハ侯ニ語ルニ、日本政府ハ絶對的必要ノ時日以外ニ之ヲ遲延スルコトナカルベキヲ以テセリ。

ランスダウン侯及ベルチーハ（小官ハ別々ニ兩氏ト會見シタリ）伊藤侯露國行ノ目的ニ就キ疑ヲ抱クモノヽ如ク、兩氏共ニ對話中、日英協和ノ交渉現今ノ程度マデ其歩ヲ進メタルトキニ當リ、露西亞ト別約ヲ締結スルガ如キコトアラバ、甚ダ之ヲ遺憾トスルノ語氣ヲ漏セリ。小官ハ伊藤侯ノ露西亞行ハ單ニ偶然ノコトナリト陳辯シタルモ、彼等ハ尙ホ幾分カ疑念ヲ抱キ居レリ。彼等ガ警戒シ

テ伊藤侯ノ行動ニ注目スルハ明ナリ。談話ノ序ニ其レトナク小官ハランスダウン侯ニ問フニ、協和締結前ニ獨逸ニ協議スルニアラザレバ、同國ハ爲メニ遺恨ニ感ズルコトナカルベキヤヲ以テセリ。然ルニ侯ハ曰ク、獨逸ハ每ニ聲明シテ極東ニ於テハ日英ノ利益第一位ヲ占メ、獨逸ノ利益ハ第二位タルニ過ギズトナセリ。從テ侯ハ獨逸ガ遺恨ニ感ズルコトナカルベキコトヲ信ジ、却テ商議ヲ知ラシムルコト早キニ失スレバ、獨逸ハ他方面ニ於ケル自己ノ利益ヲ增進スル爲メニ之ヲ濫用スルノ虞アリトナセリ。

協和發表ニ關シ小官ノ誤解シタル所アルニ付キ玆ニ之ヲ匡正セザル可カラズ。ベルチーノ云フ所ニ依レバ、此種ノ協和ハ決シテ公式ヲ以テ發布スルモノニアラズ、寧ロ間接ノ方法ニ依リテ知ラシムルナリト。小官ハ本電報ノ寫ヲ伊藤侯ニ送リタリ。

（九）伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報

明治三十四年十一月二十四日於伯林發電

會見報告ノ貴電ニ依リ、余ハ係屬中ノ商議ヲ繼續スルノ必要ヲ認ム。乍去今日ノ場合日本政府ハ商議ノ步ヲ進ムル每ニ、周匝ナル注意ヲ以テ最微ノ細目ニ至ルマデ充分攻究熟慮センコトヲ望ム。露西亞ニ於ケル余ノ談話ハ、右日英間商議ノ主意ニ違反スルコトナキヲ充分ニ勉ムベシ。余ハ貴下ガ本電報ヲ日本政府ニ轉電センコトヲ望ム。

（拾）桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十一月二十二日於伯林接電

公使ヨリノ電報ニ依レバ、貴下ノ露西亞行ハ來月初旬ナルベシ。然ルニ公使ヨリモ聞カレシ如キ現狀ニシテ、我政府ハ重大ナル理由無クシテ回答ヲ遲延スルコト能ハズ（電文暗號不明蓋シ如斯キ意味ナルベシ）故ニ本官ハ閣下ガ成ルベク速ニ聖彼得斯堡ニ向ツテ出發セラレンコト、且又同盟ノ商議ハ頗ル其步ヲ進メ、最早甚ダシク國家ノ名譽ヲ毀損スルニアラザレバ、決シテ背進スル能ハザル點ニ達シタルヲ記憶セラレンコトヲ望ム。

（拾壹）伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十一月二十六日於聖彼得堡發電

林男爵ハ余ニ請求シテ曰ク、凡ソ露西亞ト協和ヲ試ムルハ假令之ヲ滿韓ニ關スル平和的ノ協和ニ限ルトスルモ、尙ホ係屬中ノ商議ヲ全然攪亂スルノ恐アルヲ以テ、余ノ當地滯在ノ目的ヲ漫遊カ又ハ雜談的意見交換ニ止メンコトヲ以テセリ。且又最後ノ貴電ニ依レバ、日本政府ハ日英ノ商議ヲ成

ルベク速ニ完結スルノ決意ナルガ如シ。就テハ余ノ當地滯在ノ目的ニ關シテ、日本政府ノ希望スル所モ亦前陳林男ノ希望ト同一ナルモノト認メ可然ヤ、速ニ返電アラシコトヲ乞フ。

（拾貳）　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十一月二十七日於聖彼得堡接電

在英公使ヨリ貴下ノ御希望ニ依リテ外務大臣ニ轉送シ來リタル同公使宛ノ貴電ニ由リ、本官竝ニ他ノ閣員ハ決心ヲ固メタリ。而シテ今日ノ境遇ニ顧ルニ、日本政府ハ最早退歩シテ英政府トノ商議ヲ遲延スル能ハズ。如斯キ事情ナレバ貴下ハ其ノ行動ヲ林董氏ノ請求竝ニ前陳貴電後段ノ趣旨ニ從ヒ、單ニ雜談的意見交換ニ止メラレンコトヲ切望ス。

（拾參）　露西亞皇帝ニコライ二世陛下ニ謁見ノ記

明治三十四年十一月二十八日ツアルスコエ、セロ離宮ニ於テ

明治三十四年十一月二十八日午後一時、伊藤侯爵都筑馨六氏ト共ニ禮裝シテ旅館ヲ出デ、當時ツアルスコエ、セロ宮ニ起居セラルヽ露國皇帝陛下ニ謁見ノ爲メ、聖彼得斯堡ツアルスコエ、セロ停車場ニ至リ、場内ノ貴顯待合室ニ入リテ待ツコト暫時ニシテ發車時刻來レバ、特ニ皇室御用汽車ノ準備セラレタルアリ、乃チ之ニ乘ジテツアルスコエ、セロ驛ニ下車シ、王宮ヨリ差遣ハサレタル馬車ニ依リテ王宮ニ達ス。先ヅ導カレテ休憩室ニ入レバ、プランス、プーチヤチン接待掛ニテ茶菓ノ饗應アリ、暫ク雜談ニ時ヲ移セリ。プランス、プーチヤチンハ拾年前ニ日本ニ遊ビ、侯爵邸ニモ招カレタルコトモアリトテ當時ノ模樣等委シク記憶シテ語リタリ。暫クニシテ侯爵ト都筑氏ハ皇帝ノ御前ニ召サレタリ。

侯爵　本日ハ敬意ヲ表示スルノ許可ヲ得テ感謝ノ至リナリ。

皇帝　閣下ノ事ニ關シテハ從來聞知スル所甚ダ多キガ故ニ、閣下ノペテルスブルグニ來遊セラレタルコトハ朕ノ最モ喜ブ所ナリ。殊ニ朕ハ閣下ノ當國ニ對シテ常ニ友誼ヲ抱持セラルヽ政治家タルヲ知ルガ故ニ、今日ノ會見ハ欣喜ニ堪ヘザルナリ。

侯爵　拜謝ス。

（以上都筑氏獨逸語ニテ通譯）

皇帝　乍併閣下ハ少々英語ヲ語ラルヽニアラズヤ。

侯爵　然リ少々、

皇帝　然ラバ英語ニテ語ラン、英語ノ方朕ニモ便宜ナリ（是ヨリ陛下ハ直接侯爵ニ向ハレ）朕ノ日本ニ遊ビシ時、卿ニ會セシコトアリシヤ、何ノ地ニ於テナリシヤ。

侯爵　京都ニテ拜謁シ、同地ヨリ神戸迄供奉致シタリ。

皇帝　然リ〳〵想ヒ起シタリ、明ニ記臆シ居レリ。日本漫遊ノ事ニ關シテハ快キ紀念ノミナリ。從來貴國ト我邦ハ其交誼最モ暖カナルハ朕ノ最モ喜ブ所ニシテ、將來益々其親密ナランコトヲ希望ス。朕ノ信ズル所ニ依レバ、兩國ノ協和ハ決シテ出來得ベカラザルコトニ非ズ、兩國互ニ協和スルハ單ニ兩者ノ爲メニ最モ得策ナルノミナラズ、依テ以テ東洋ノ平和ヲ維持スルヲ得ベク、或ハ依テ以テ更ニ大ナル目的ヲ達シ得ベケン。

侯爵　自分ニ於テモ常ニ叡旨ノ如ク信ズルハ勿論、我ガ　皇帝陛下ニ於カセラレテモ亦常ニ貴國トノ交誼ヲ重ンゼラレ、將來益々親密ナランコトヲ希望セラルヽモノナリト確信ス。

皇帝　朕ハ卿ノ言ヲ聞キ深ク滿足ス。

侯爵　歸朝ノ上ハ直チニ陛下ノ勅語ヲ我ガ　皇帝陛下ニ奏聞致スベシ。我ガ　主君ニ於カセラレテモ定メテ御滿足ナラント信ズ。

皇帝　先キニ陳ベタル所ハ單ニ朕ノ語ニ止マラズ、朕ノ信ズル所ナリ。單ニ朕一人ノ確信ニアラズ、又當國上下一般ノ感覺ナリ。此事ハ必ズ貴國皇帝ニ言上セラレヨ。

侯爵　拜承セリ。

皇帝　卿ノ出發前　皇帝陛下ニ謁見セラレシカ（皇帝ハ御健勝ナリヤノ意ヲ含メリ）

侯爵　然リ、出發前　皇帝皇后兩陛下竝ニ皇太子殿下ニ御暇乞ノ爲メ謁見致セリ。

皇帝　皇太子殿下ニハ先般御結婚アリシニアラズヤ。

侯爵　然リ而シテ各殿下悉ク御健勝ニ在ラセラレタリ。

皇帝　夫ハ朕ノ聞クヲ喜ブ所ナリ、閣下ハ歸路西伯利亞ヲ通過セラルヽヤ。

侯爵　西伯利亞旅行ハ自分ニ於テ最モ望ム所ナレドモ、暫ク適當ノ時候ヲ待合スニアラザレバ、之ヲ爲シ能ハザルヲ遺憾トス。

皇帝　然リ數ケ月待タルヽノ必要アラン、何ノ途ヨリ當地ニ來ラレシカ。

侯爵　米國ヨリ直チニ佛國ブーロンニ渡リ、巴里ニ止リ、佛國ヨリ獨逸ニ入リ、伯林ニ兩三日休息シテ後チ直ニ當地ニ來レリ。

茲ニ於テ侯爵ハ暇ヲ乞フテ室外ニ出デ、將ニ次室ヲモ去ラントスル際、皇帝ハ更ニ侯爵ヲ先キノ謁見室ニ招カレ、其胸間ニ懸レル露國勳章（聖歴山ネヴスキー）ヲ指サレ。

皇帝　朕ハ卿ニ金剛石入リノ方ヲ呈スベシ。

侯爵　深ク謝シ奉ル。

皇帝ハ室ノ一隅ニ赴カレ、自ラ勳章二箱ヲ携ヘ來ラレ、一ヲ侯爵ニ、他ヲ都筑氏ニ親授セラル。兩人更ニ敬禮シテ室外ニ出ヅレバ、プランス、プーチヤチンハ再ビ侯爵ヲ導キテ先キノ休憩室ニ入

リ、侯爵ノ爲メニ祝意ヲ表スト稱シ、杯ヲ擧ゲテ飲ミ、更ニ侯爵ノ舊勳章ヲ取リ去リ、新勳章ヲ附シテ曰ク「閣下ノ胸間ニ始メテ此ノ勳章ヲ飾ルノ榮譽ヲ有セシモノハ自分ナリシヲ記臆セラレンコトヲ望ム」ト、其レヨリ更ニ喫茶暫ク談笑ノ後、三時三十分王宮ヲ辭シ去リ停車場ニ至ル。停車場ニハプーチヤチン氏來リ、彼得斯堡迄同伴セリ。午後五時歸館、因ニ記ス本日都筑氏ニ賜ハリタル勳章ハ聖安那一等ナリキ。

（拾四）井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十一月二十八日於聖彼得斯堡接電

日英同盟ニ關スル貴下ト林董氏ノ談話及其際表白セラレタル貴見、竝ニ外務大臣ニ轉送シタル林董氏宛貴電ノ趣旨、即チ貴下ガ同盟商議ヲ繼續スルノ必要ヲ承認セラレタルコトヲ內閣總理大臣ヨリ傳聞セリ。然レドモ第一、古來ノ舊慣ニ反シテ同盟ヲ提議スル英國ノ意志ハ頗ル了解シ難シ。英國ハ日本ノ勢力ヲ利用シテ其ノ困厄ヲ免レント欲スルノ意ニアラザルカ、第二、獨逸ハ恐ラク該同盟ニ加入セザルベシ。第三、日英同盟ノ締結ハ必ズ露佛獨ヲシテ三國同盟ヲ作ルノ決心ヲ起サシムルナラン、故ニ我等ハ如斯キ將來起リ得ベキ事實ノ結果ニ就キ充分攻究ヲ盡サヾル可カラズ。余ノ意見ニ依レバ、朝鮮問題ニ關シテ露西亞ガ如何ナル程度マデニ讓步セントスルカ、又如何ナル範圍內ニ於テ商工業上ノ便宜ヲ吾ニ與フルカヲ貴下ニ於テ確メラレタル後、英政府トノ商議ヲ進ムルノ手段ヲ執ル方得策ナルベシ。余ハ貴下ガ前記四ケ國內外ノ情勢ヲ熟察シテ判斷ヲ下サレンコトヲ望ム。

（拾五）伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報

明治三十四年十一月二十八日於聖彼得斯堡發電

余ハ貴電ノ大要ニ全然贊同ス。特ニ獨逸政府萬一ノ態度ニ關シテハ再度迄內閣總理大臣ノ注意ヲ促シタレドモ何等ノ返答ヲ得ズ。而シテ一方ニ於テハ內閣總理大臣ハ伯林宛ノ電報ニ依リ、日本政府ノ決意英國ト同盟ヲ結ブニ在リト報ジ來リ、他ノ一方ニ於テハ林男爵ヨリ同ジク伯林ニ宛テタル書翰ヲ以テ、露西亞ト協和ヲ謀ルハ單ニ之ヲ試ムルノミニテモ係屬商議ヲ攪亂スルノ恐アルニ仍リ、一切之ヲ避クベキ旨最モ熱心ニ請求シ來レリ。玆ニ於テカ余ハ改メテ日本政府ノ明白ナル訓令ヲ請ヘリ。而シテ政府ハ昨日余ニ答フルニ林男爵ノ希望ト同一徹ノ趣旨ヲ以テセリ。事情如右ナルヲ以テ、當地來遊ノ當初ノ目的ニ全然違反スル所アルニ拘ハラズ、政府ノ希望ニ副ハントスルノ外他ニ途アルヲ見ズ。當地ノ意嚮ハ日本ト協和セント欲スルモノ、如シ。本日謁見ノ際皇帝ハ余ニ語ルニ、日露兩國相互ノ利益及東洋ノ平和ノ爲メ協和ノ望マシキコトヲ以テセリ。故ニ余ハ日本政府ガ日英

ノ係屬商議ニ關シ確定ノ決意ヲ爲スニ先チ、如何ナル程度マデ露西亞ガ讓歩セントスルカヲ探索スルヲ以テ賢策トナスノ貴說ニ同意ス。本電報ヲ桂子ニ示サレヨ、而シテ余ハ貴下ガ同氏ト再議セラレンコトヲ要求ス。時機ヲ失セザラント欲セバ速ニ返電ニ接スルノ必要アリ。

（拾六）伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報

明治三十四年十一月三十日於聖彼得斯堡發電

速ニ最後ノ決定ヲ聞クノ必要甚ダ切ナリ。

（拾七）露國外相ラムスドルフ伯ト會見ノ記（其一）

明治三十四年十二月二日外相官邸ニ於テ

明治三十四年十二月二日午後四時約ニ從ヒ伊藤侯爵都筑氏ヲ隨ヘ露國外務大臣ラムスドルフ伯ヲ其官邸ニ訪フ。談ハ先ヅ寒暖ノ挨拶ヲ以テ始マリ、侯爵ハ過日侯爵ノ爲メニ催サレタル宴會ノ謝辭ヲ述ベラレタル後、進ンデ東洋問題ヲ論ゼラル。

侯爵　自分ハ決シテ政府ノ使命ヲ帶ビタル次第ニ非ズ、單ニ一個人ノ資格ヲ以テ東洋問題ニ關シ閣下ト意見ヲ戰ハスヲ得バ幸甚ナリ。勿論自分モ胸襟ヲ開キテ談ズル故ニ、閣下ニ於テモ亦眞意ノ在ル所ヲ吐露セラレンコトヲ望ム。

外相　至極御同意ナリ。

侯爵　從來自分ハ貴國ニ對シテ親密ナル友誼ヲ以テ交際スルノ必要ヲ感ジ居タルニ、過日際見ノ際、貴國皇帝陛下ヨリ日露兩國ハ隣邦ニシテ最モ親密ナル交際ヲ爲スノ必要アルハ勿論ナレバ、互ニ協和ノ出來得可カラザルコトナキ筈ナリ。兩國ノ協和スルハ單ニ東洋ノ平和ヲ維持スル所以ナルノミナラズ、或ハ更ニ大ナル目的ヲ達シ得ベシトノ勅語アリ。其際自分ハ我ガ　聖上陛下ニ於カセラレテモ同一樣ニ感ゼラル、ニ付キ陛下ノ勅語ヲ奏聞セバ定メテ御滿足アルベシト奉答シタルニ、陛下ハ更ニ右ハ單ニ朕ノ語ニ止マラズ、朕ノ確信スル所ナリ、獨リ朕一人ノミナラズ、當國上下一般如斯ク感ジ居ルナリ云々ノ勅語アリ。右ノ勅語ハ自分ニ於テ深ク感佩シ、平常ノ所信ヲ一層强メタル次第ナリ。

外相　右ノ事情ハ昨日皇帝陛下ヨリ親シク承リタル所ニシテ自分モ至極同感ナリ。

侯爵　閣下ヨリ夫ヲ承リテ自分ハ更ニ一層滿足ニ感ズ。然リ而シテ兩國間ニ於テ交際ノ益々親密ナランコトヲ望マバ其間ニ蟠リテ一種誤解ノ原因トナルノ恐アルモノヲ除カザル可ラズ。卽チ他ナシ、朝鮮問題之レナリト信ズ、閣下ノ考慮如何ニヤ。

外相　貴意至極御尤ト存ズレドモ、該問題ニ關シテハ先年既ニ露政府ヨリ一ノ解釋案ヲ提出シタル

ニ（局外中立ノ件）其際日本政府ハ現存協定ノ成功至テ滿足ナルヲ以テ、更ニ他ノ協定ヲ設クルノ必要ヲ認メズトノ理由ヲ以テ之ヲ拒絶セラレタリ。之レヲ以テ是ヲ見ルモ、當方ニ於ケル意向ハ明カナレドモ、右ノ如キ行キ掛リナルヲ以テ、此上ハ日本ノ方ニテ何カ成案アルヲ俟ツノ地位ニ立テリ、若シ之レアラバ承リ度シ。

侯爵　彼ノ中立談ハ其當時北清事件モアリ、且又貴我兩國間ニ第三國ヲ挾ムノ必要無シト認メタルガ故ニ、不完全ナガラモ從來ノ協定ヲ以テ寧ロ勝レリト爲シタリ。

外相　大ニ然リ、第三國ヲ挾ム必要ナキハ至極御同感ナリ、然ラバ如何ナル案アリヤ。

侯爵　抑モ朝鮮問題ハ自分ノ吸々スル迄モ無ク日本ノ獨立上殆ンド死活ノ問題ナリトス。我ガ國民ハ常ニ朝鮮ハ貴國ヨリ併呑セラル、ノ恐アリトノ疑惑ヲ抱キ居レリ。勿論日露兩國間ニハ朝鮮ニ關スル協定ハ現存シ居レドモ、之ヲ目シテ最終ノモノト認ムルコトヲ得ズ。更ニ明確ナル協商ヲ設クルニアラザレバ兩國ニ於テ絶ヘズ誤解ヲ生ズル恐アリ。元來朝鮮ニ於ケル日本ノ利害關係ノ主優ナルハ貴政府ノ承認スル所ナリ。而シテ朝鮮ノ國タルヤ、尙ホ幼稚ニシテ啻ニ我國民ノ正統ナル利益及權利ヲ保護スルノ實力ナキノミナラズ、往々ニシテ領土內ニ騷亂等起ルモ、自ラ之ヲ鎭定スルノ力ヲ缺クコトアリ。故ニ朝鮮ニ與フルニ助言及援助ヲ以テスルニ非ザレバ、主優ナル利害關係モ有名無實ナリ。然リ而シテ貴我兩國ヨリ交々此ノ助言及援助ヲ與フルコトトセバ、終ニ貴我兩國間ニ衝突ヲ生ズルノ恐無シトセズ。

外相　自分ノ考フル所ニ依レバ、露日兩政府間ダニ協和整ヒ、兩國常ニ一致シテ朝鮮政府ニ迫ラバ、朝鮮政府ハ其勸告ヲ容レザル筈ナシト信ズ。朝鮮ニ事件起ル每ニ貴國ハ白ト云ヒ、我國ハ黑ト云フハ、之レ卽チ朝鮮ヲシテ兩國ヲ利用スルコトヲ得セシムル所以ニシテ、恰モ波斯土耳古其他之レニ類スル諸國ガ、自己ノ實力無クシテ而カモ尙ホ當今一ノ勢力タルコトヲ得ル所以ニ異ナラズ。故ニ今日ニ於テ兩國政府間ニ細密ナル協定ヲ設ケ置キ、他日兩國ノ意見異ルガ如キコトヲ豫防スルニ於テハ、朝鮮ヲシテ獨立國ノ義務ヲ果サシムルコトヲ得ンカ。

侯爵　卑見ニ依レバ、閣下ノ御考案ハ恰モ兩國間ニ衝突ヲ招クノ恐アリト信ズ。如何ニ兩國ノ中央政府ニ於テ相協和スルモ、出先キノ人物間ニ於ケル意見ノ相違ヨリ誤解ヲ生ズルノ恐無シトセズ。協定ノ精密ナレバ精密ナル丈ケ、益々解釋ヲ異ニシ得ベキ點モ增加スルニ至ルベシ。試ニ朝鮮ニ一騷亂起リタルモノト假定セラレヨ、貴我兩國ヨリ出兵シテ之ヲ鎭定スルモノトセバ、兩國ノ兵士間ニ衝突ノ恐アルハ論ヲ待タズ。故ニ朝鮮ニ與フルノ援助ハ貴我兩國ノ內孰レカ其一方ノミニ於テスルヲ便ナリト信ズ。然リ而シテ御熟知ノ如ク朝鮮ノ獨立タルト否トハ實ニ日本ノ死活問題ナリ。隨テ之ヲ貴國ニ一任スルハ日本國民ノ決シテ安ンゼザル所ナリ。

外相　助言及援助ト言ハル、モ、援助トハ如何ナル事ヲ指シテ言ハル、ヤ。

侯爵　生命財産ノ保護ハ勿論國内ノ秩序スラ往々自力ヲ以テ維持スルコト能ハズ、隨テ之レニ與フルニ其目的ヲ達セシムルニ必要ナル援助ヲ以テスルノ謂ナリ。

外相　然ラバ軍事的援助ヲモ含ムモノナルカ。

侯爵　無論ナリ。騒亂等ノ場合ニ於テハ出兵シテ之ヲ鎮定スルニ非ザレバ他ニ途ナシト信ズ。

外相　元來露國ハ朝鮮ニ對シテ毫モ他意ナシト雖モ、其領土ヲ他國ガ軍略的目的ノ爲メニ用ユルコト丈ハ飽クマデ拒マザル可カラズ。

侯爵　夫ハ御尤ノ次第ニテ、我邦ト雖モ朝鮮ノ獨立ヲ傷クルノ希望ハ更ニ無シ。又朝鮮ヲ利用シテ貴國ニ對シ軍略上ノ用ニ供スルノ目的モ有セズ。只國内秩序ノ紊亂シタル時ニ際シテハ、其回復ニ必要ナル範圍内ニ於テ出兵スルナリ。常ニ軍隊ヲ置キテ朝鮮ヲ占領スルノ意ニアラザルナリ。

外相　既存ノ露日協定ハ對等的ノモノニシテ、貴國若シ朝鮮ニ百人ノ出兵ヲ爲サバ吾モ亦百人出シ、千人ナラバ吾モ千人ト云フ次第ナルモ、今朝鮮ノ事ヲ擧ゲテ貴國ニ一任シ、出兵ノ權ヲモ承認スルニ於テハ、貴國ガ朝鮮ノ領土ヲ軍略的ニ利用セズトノ保證モ必要ナルベク、又貴國若シ朝鮮沿岸ニ砲臺ヲ建築スルガ如キコトアラバ、浦鹽斯德旅順間ノ交通ヲ絶タルヽヲ以テ、露國ハ自衞上之ヲ默視スル能ハズ。故ニ軍略上ニ之ヲ使用セザルコトヽ、前陳交通ヲ遮斷セザルコトニ關シ、確實ナル保證ヲ得バ、露國ハ朝鮮ヲ貴國ニ一任スルモ異存ナカルベシト信ズ。唯確實ナル保證ノ那邊ニ在ルカヲ定ムルハ困難ナリ。

侯爵　其一點ハ貴國ノ利害上御尤ト存ズルニ就キ、朝鮮ヲ一任セラルヽニ於テハ、我ガ國ハ其保證ヲ拒マザルベシ。然レドモ露西亞若シ朝鮮國境附近ニ軍略的設備ヲ爲シ、朝鮮ノ獨立ヲ危ウスルガ如キコトアラバ日本ハ之ヲ坐視スル能ハズ。

外相　如何ナル保證ヲ與ヘラルヽカ。

侯爵　如何ナル保證ト云ハルヽモ夫ヲ約束スルノ外別ニ保證ノ差上ゲ樣モナシ。

外相　單ニ約束ニ止マルカ。

侯爵　他ニ何等ノ手段モ見ズ。

外相　朝鮮南岸ニ一小地ヲ露國ニ一任シ、其他ノ朝鮮全部ヲ貴國ノ自由ニスルコトヽシテハ困難ナルヤ。

侯爵　貴國軍人中ニハ或ハ根據地トシテ、或ハ交通防護トシテ朝鮮南岸ニ一地ヲ占ムル說モアル由ナレドモ、夫ハ日本國民ノ決シテ肯ゼザル所ナリ。朝鮮南岸コソ我邦獨立ノ爲メニ最モ重要ナル場所ナルガ故ニ、其ノ他國ノ手中ニ陷ルヲ見バ、日本人ハ我ガ獨立ヲ傷損シタルガ如ク感ズベシ。故ニ朝鮮南岸ノ一地ヲ貴國ニ一任スルハ、單ニ貴我兩國間ニ協和ヲ見ル所以ニ非ザルノミナラズ、反テ衝突ヲ促ス所以ナリト信ズ。

外相　自分ハ屢々斷リタル如ク、單ニ一個人ノ私說ヲ陳ベ居ルノミニテ、皇帝ノ御說如何ナルベキカ、海軍大臣其他同僚中ニ如何ナル希望アルカ未ダ知ラザル所ナリ。然レドモ試ニ位置ヲ轉ジテ我ガ國民ノ身トナリテ御一考アリタシ。朝鮮全土ヲ擧ゲテ貴國ニ一任セバ、我ガ國民ハ果シテ秋毫モ不安ノ念ヲ抱カザルベキカ、之ニ反シテ全國ニ比スレバ至極狹少ナル南岸一地ヲ吾レニ一任セラレタレバトテ、貴國民不安ノ念慮ハ尠少ニシテ朝鮮全體ヲ日本ニ一任シタル露國民不安ノ念慮トハ其差同日ノ論ニ非ズト信ズ。

侯爵　必ズシモ然ラズ、ジブラルタルハ一小區域ナレドモ全海ヲ支配スルノ力アリ。加之朝鮮ヲ吾レニ一任シテ貴我兩國ノ協和ト日本國民ノ安心ヲ得ラルヽハ、決シテ貴國ノ爲メニ不得策ナリト信ゼズ。假令最近ノ北淸事件ハ幸ニシテ圓滿ナル局ヲ結ビタレドモ、元來支那ハ何時如何ナル事變ヲ生ズルカ、殆ンド豫測スベカラザルモノアリ。將來萬一昨年ノ如キ事件ヲ再演スルコトアラバ、其際貴國ハ背後ニ日本ノ感情如何ヲ顧慮スルコト無ク前進シ得ルト、然ラザルトハ大ナル相違アルベシ。

外相　或ハ然ラン。

侯爵　自分ノ吸々ヲ要セズ、貴國ハ大國ナリ、絕ヘズ四方ニ膨脹スルノ國ナリ。之レニ反シ日本ハ四面海ニ依リテ制限セラルヽ國ナレバ、朝鮮ノ一事ヲ委ネラレタレバトテ左程ニ憂慮セラルヽ事モアルマジ。

（譯者憂慮ノ字ヲ譯スルニ心配ト恐懼ノ意ヲ含メル語ヲ以テシタル爲メ）

外相　心配ハ致サズ、我等ハ何人ヲモ恐レズ。云々……兎モ角モ閣下ノ朝鮮問題ニ關スル成案ヲ箇條書（スケツチ）ニ認メ賜ハズヤ、然スレバ自分モ同僚ト熟議スルコトヲ得、又祕密ニ皇帝ノ御意見ヲモ承ルヲ得ベシ。加之一ノ成案ダニアラバ或ハ不同意ノ點ヲ修正スルコトモ得ベク、或ハ當方ヨリ反對案ヲ提出スルコトモ得ベシ。

侯爵　承知セリ。

夫ヨリ雜談ニ移リ侯爵ハ三國干涉當時ニ於ケル露國ノ行爲ヲ諷セラレ、日淸戰爭ニ依リ最モ多ク利益ヲ得タルモノハ露西亞ナリナド多少偶意的文字ヲ竝ベテ其ノ日ノ談話ヲ終ラレタリ。

別ニ臨ンデ外相ハ何日頃迄滯留セラルヽヤト問ヒタルニ對シ、侯爵ハ成ル可ク明後四日ニ出發セント欲スル旨答ヘラレタル時ハ、ラムスドルフ伯ハ大ニ失望シタル體ナリキ。

右ノ會見ハ四時ヨリ殆ンド六時ニ及ベリ。

（拾八）　露國藏相ウヰツテー氏ト會見ノ記

明治三十四年十二月三日藏相官邸ニ於テ

明治三十四年十二月三日伊藤侯爵都筑氏ヲ隨ヘ、露國藏相ウキツテー氏ヲ其官邸ニ訪フ。寒暖ノ挨拶終リテ談東洋問題ニ入ル。

藏相　ラムスドルフト會見セラレシカ。

侯爵　昨日會見シタリ。伯モ貴我兩國ノ友誼ヲ厚クスルコトニ關シテハ自分ト同感ナリシハ自分ノ最モ滿足スル所ナリ。閣下モ自然伯ヨリ其話ヲ聞カレタルナラン。

藏相　未ダ會談セズ、昨日ハ自分ノ皇帝ニ謁見シタル日ナリ。今日ハラムスドルフ伯ノ皇帝ニ謁見スルノ日ナリ。故ニ未ダ面會ノ暇ヲ得ズ、今夕ハ五時半ヨリ彼ト會談スルノ約アリ。

侯爵　過日皇帝陛下ニ謁見ノ際、勅語中ニ日露兩國ハ隣邦ノコトナレバ、互ニ親密ナル交際ヲ爲スノ必要最モ切ニシテ、兩國間ニ協和ノ出來ザル筈ナク、兩國協和セバ單ニ東洋ノ平和ヲ維持シ得ルノミナラズ、或ハ依リテ以テ更ニ一層大ナル目的ヲ達シ得ベケン云々ノ句アリ。右ハ自分ニ於テモ平素ヨリ至極同感ノコトナレバ、ラムスドルフ伯ニ對シ、勅語ノ目的ヲ達セント欲セバ朝鮮問題ニ關シ今日ニ比シテ一層明確ナル協定ヲ要スベキ旨ヲ以テシタリ。抑モ朝鮮ノ日本ニ於ケル、古來歷史上ノ關係ハ最モ密接ニシテ、兩國間ニ於ケル實利上ノ關係ノ如キ、既ニ貴國ノ認識スル所ナリトス。就中地形上ノ關係ヨリ見ルトキハ、日本國民ハ朝鮮ヲ以テ自國ノ死活問題ト爲シ居レリ。之レガ爲メニ日清戰爭モ起リタルガ如キ始末ナリ。此問題ヲ除キテハ目下貴國ト我ガ國ノ間ニ利害ノ衝突スベキ點ナシト信ズ。隨テ此問題ニ關シテサヘ兩國ニ協和相整フモノトセバ、兩國ノ和親ハ益々鞏固ナルベキコト疑ナシ。勿論今日ニ於テモ既ニ協定ハ存シ居レドモ、之ヲ以テ未ダ最終ノモノトハ認メ難シ。尙ホ明瞭ヲ缺クノ點尠カラズ。故ニ一層明確ニ協定ヲ設クルノ必要アリト信ズ。

藏相　自分ハ外交家ニ非ザレバ毫モ修飾スル所ナク卑見ヲ開陳セン。元ヨリ自分ハ當局者ニ非ズ、然レドモ東洋問題ニ關シテハ皇帝竝ニラムスドルフ伯ト自分トノ間ニ毫モ意見ノ異ナル所無ク、彼ノ意見ハ卽チ自分ノ意見ニシテ、自分ノ意見ハ卽チ彼ノ意見ト云フモ過言ニアラズ。元來朝鮮ニ於テハ貴國ハ大ナル利害ノ關係ヲ有シ、我ガ國ハ毫モ利害ノ關係無シ。故ニ貴國民ガ移住ニ依リテ其領土內ニ膨張スルモ、或ハ又商業上ノ利益ヲ圖ルモ當方ニ於テハ更ニ異存ナシ。然レバ當國ニ於テハ朝鮮ヲ占領スルノ必要ハ更ニ無ケレドモ、貴國ノ之ヲ占領スルハ當國ノ袖手傍觀スル能ハザル所ナリ。今日貴國ト萬一變アルニ際セバ、双方ノ軍事的ノ優劣ハ先ヅ相半スト云ハザル可カラズ。然ルニ貴國ノ朝鮮ヲ占領スルニ於テハ、當國ニ取リテ非常ニ不利ナルハ論ヲ俟タズ。故ニ朝鮮ハ双方共ニ之ヲ占領セザルト共ニ、双方トモ他ノ一方ガ之ヲ占領スルナラントノ疑惑ヲ去ラザル可カラズ。兩國ノ中央政府ダニ互ニ胸襟ヲ開キテ意見ヲ闘ハシ、兩國上下ノ人民互ニ交際ヲ厚フスル、當今佛國ト我國ノ如キニ至ラバ、豈兩國ノ協和スル能ハザル理アランヤ。獨逸ト

當國トノ關係ノ如キモ亦然リ。兩國ハ拾年間互ニ相反目嫉視シ、互ニ他ノ一方ヨリ挑戰スルナラントノ疑惑ヲ抱キ居タリシニ、爾來善意ヲ以テ交際ヲ爲スニ隨ヒ、互ニ實情ヲ知リ、所謂意志疎通シテ今日ニ於テハ共ニ安堵シ居ルガ如キ姿ナリ。勿論露日兩國和親ノ必要ハ甚ダ切ナリ。兩國協和セザレバ世界ノ人心ハ東洋ノ風雲ヲ掛念スルガ故ニ、兩國共ニ自國ノ信用ヲ傷ケ、益スル所毫モ無クシテ損スル所甚ダ多シ。然リ而シテ今朝鮮ニ關シ貴我兩國間ニ現存スル協定ヲ見ルニ、日本ノ實利關係ノ深キヲ認ムルト共ニ、出兵ノ件ニ關シテハ對等ノ規定ヲ設ケ、貴國ニシテ五百人出兵セバ我國モ五百人、貴國千人ナラバ吾レモ亦千人ト云フ如キ協定ナレバ、此公平ナル基礎ヲ失ハズシテ、更ニ細密ナル協定ヲ設クルニ至ラバ、或ハ公平ニシテ而モ尙ホ互ニ誤解ノ生ズルヲ豫防スルコトヲ得ンカ。

侯爵　貴說一應有理ナルガ如キモ、日本ガ其實利上ノ關係ヲ實際享有スルニ當テ、朝鮮ノ幼稚ナル、往々生命財產ノ保護其他文明獨立國政府ノ盡スベキ義務ヲ、自力ヲ以テ盡ス能ハザル場合少シトセズ。如斯場合ニ於テハ到底他國ヨリ相當ノ助言若クハ援助ヲ與ヘザル可カラズ。又朝鮮政府ノ基礎鞏固ナラザルヨリ、往々內亂ノ起ルコトアリ、如斯場合ニ於テ貴我兩國ヨリ出兵セバ、派遣隊ノ誤解ヨリ兩國間ノ大事ヲ惹起スルナキヲ保セズ。故ニ凡テ朝鮮ニ與フ可キ助言及援助ハ利害關係最モ密接ナル日本ニ一任セラルヽニアラザレバ、到底永遠ニ東洋ノ平和ヲ保持スルハ困難ナラン。

藏相　朝鮮問題ハ暫ク措キ、東洋全體ヨリ觀察セバ、我國ハ決シテ東洋ニ於テ領土ノ擴張ヲ望ムモノニアラズ。我ガ領土ハ既ニ廣キニ失スルノ嫌ナキニ非ズ。又一言以テ當國現時ノ形勢ヲ說明セバ、政府ノ財政上ニハ甚ダ富裕ナレドモ、社會ノ經濟上ニハ頗ル幼稚ナルガ故ニ、當今ハ大ニ內部ヲ整頓シテ其發達ヲ圖ルノ最モ必要ナル時期ナリ。滿洲ノ如キモ必ズ撤兵スベシトハ世界ニ對シテ公約シタル所ニシテ、永ク之ヲ占領スルガ如キハ決シテ當國政府ノ意旨ニ非ザルナリ。勿論當國ニ於テモ貴國ニ於ケルガ如ク、否寧ロ世界何レノ國ニモ在ル如ク、全世界ヲ以テ自國ノ有ト爲サント欲スル論者無キニ非ズ。就中陸海軍人中ニハ如斯希望ヲ有スルモノ多シ。然レドモ政府及皇帝ノ論ハ決シテ然ラズ、又當路者中ニ萬一右ノ如キ議論ノ出ルコトアルモ、自分ハ大藏大臣トシテ如斯行爲ハ露國ノ負擔ニ堪ヘザル所ニシテ、支那人ニ其地方ノ行政ヲ負擔セシメ、吾レハ其利益ノミヲ享有スルニ比シテ劣ルコト萬々ナリト信ズ。然レドモ玆ニ一ノ熟慮ヲ煩ハシ度キコトアリ、卽チ當國ハ彼ノ方面ニ於テ三億萬ルーブルヲモ費シタル一大鐵道ヲ有ス。該鐵道ヨリ生ズル利益ハ西歐羅巴ノ文明諸國、竝ニ極東諸國就中日本ノ第一着ニ享有スベキモノナリ。當國ハ該鐵道ヲ保護スル爲メニ必要ナル措置ハ力ヲ盡シテ之ヲ爲サヾル可カラズ。此點ハ御記臆ニ止メラレタシ。

侯爵　鐵道保護ノ爲メニ必要ナル措置ハ適當ナル事ト存ズルニ就キ同意ヲ表ス。其レト同時ニ朝鮮ニ關シテ日本ハ貴國ガ鐵道ニ於ケル利害關係ヨリモ一層深キ關係ヲ有シ居ルガ故ニ、昨日ラムスドルフ伯ニ對シ左ノ希望ヲ陳述シ置キタリ。卽チ朝鮮ニ於テハ商工業上ノ事ハ勿論、政治上ニモ又軍事上ニモ吾レニ一任セラレタシ。勿論軍事上ト稱スルモ決シテ貴國ニ對シ朝鮮ノ領土ヲ軍略的ニ利用スルノ意ニ非ズ。單ニ同國內ノ騷亂其他之ニ類スル事件ニシテ、日韓兩國間ノ平和的交際竝ニ東洋ノ平和ヲ危ウセントスル行爲ヲ鎭壓スルガ爲メニ必要ナル範圍ニ止マル次第ナリ。元ヨリ我ガ邦ハ今日平和ノ時ニ當リ、朝鮮ニ若干ノ兵ヲ駐屯セシメ居レドモ、是ハ單ニ國內ニ於ケル秩序維持ノ目的ニ止マリ、軍事的ト云ハンヨリモ寧ロ警察的ノ目的ヲ有スルモノナリ。若シ貴國ガ民心安堵ノ爲メ必要トアラバ、朝鮮ノ獨立ハ之ヲ毀損セズ、其領土ハ貴國ニ對シ軍略上ノ目的ノ爲メニ使用セズ、且又朝鮮海峽ノ交通ヲ遮斷スルガ如キ軍事上ノ設備ヲ朝鮮海岸ニ爲サヾル可キノ工事ハ當方ヨリ之ヲ保證スルモ妨ナシ。

藏相　其三事ヲ保證セラル、ナラバ、他ハ如何樣ニ朝鮮ヲ處分セラルヽモ異存無シ、存分ニ處分セラレヨ（Vous pourz foire tors G gre vous vorlcz）又保證モ當方ヨリモ之ヲ與ヘテ双方約束ノ形式ト爲スモ妨ナシ。

通譯者（都筑氏）　通譯ノ念ノ爲メ伺ヒ置キ度シ、右ハ勿論軍事上ノ援助ヲモ含ム儀ト心得可然乎。

藏相（通譯者ニ對シ）　然リ何ナリトモ。

侯爵竝ニ通譯者共ニ藏相ノ說一變シタルヲ感ジタレドモ、故ラニ追究セザリキ。蓋シ滿洲鐵道保護ニ關シ、侯爵ノ同意ヲ表セラレタルニ基キシナラン藏相ハ更ニ語ヲ次ギ、

藏相　貴慮ノ如クンバ兩國間ノ協和ハ充分整フナラント信ズ。

侯爵　此協和成立スルモノトセバ、貴國ニ於テモ大ニ利益セラル、ナラント信ズ。清國當今ノ形勢タル、昨年ノ北清事件ノミハ幸ニシテ無事終局シタリト雖モ、將來何時如何ナル變體ヲ生ズルコト無キヤハ何人ト雖モ豫測シ能ハザル所ナリ。萬一右ノ如キ事變ニ遭遇センカ、其ノ始末ハ今回ニ比シテ更ニ一層困難ナラン。清國ハ今回四億五千ノ償金ヲ負ヒタリ。先年日清戰爭ニ依リ三億ヲ負ヒ、其以前既ニ已ニ一億餘ノ外國債ヲ有シタルガ故ニ、今日清國ノ外債ハ無慮八億五千內外ナルベシ。此ノ以上ノ負擔ハ彼國ニ於テ到底之レニ堪ユル能ハザル所ナリトセバ、其始末ニ就キ方策ヲ講ズルニ當リ、平素ヨリシテ日露間ニ充分ナル協和存在スルトキハ、貴國ニ於テモ大ニ安堵スル所アラン。萬一止ムヲ得ズ貴我兩國間ニ干戈相視ノ不幸ニ際セバ、其火焰ハ立ロニ支那ニ波及スル論ヲ俟タズ。

藏相　忽チ……實ニ御尤千萬ナリ。清國ニ事アラバ他國ノ蒙ル影響ハ貴我兩國ニ比シテ甚ダ僅少ナルノミナラズ、萬一如斯場合ニ際シ兩國間ニ協和ノ整ハザル事アラバ、之ニ依リテ損

害ヲ蒙ムルモノハ卽チ兩國ニシテ、他ノ諸國ハ寧ロ大ニ益スル所アラン。他ノ諸國ハ實ニ貴我兩國ノ間ニ釁ヲ生ゼンコトヲ望ミ、中ニハ金圓ヲ費シテ兩國臣民ヲ刺激シ、依テ以テ兩國間ノ平和ヲ破ランコトヲ勉ムルモノスラアリ。貴我兩國共ニ深ク戒心セザル可カラズ。過刻以來種々互ニ意見ノ交換ニ依リテ、閣下モ自分モ其目的トスル所同一ニシテ、其方法ニ關スル意見モ亦大體上異ナル所無キヲ發見シタルハ大ニ滿足スル次第ニテ、兩國ノ爲メニ好結果ヲ生ズルナランコトヲ希望ス。

侯爵　自分ニ於テモ深ク滿足シタリ。

茲ニ於テ談話ハ一段落ヲ告ゲタリ。

藏相　貴國財政ハ近年稍々平均ヲ失シタルガ如キ形跡アリ、侯爵ノ御意見如何。

侯爵　多少平均ヲ失シタル所アリタレドモ、甚ダシキ事ニテモ無ク、漸ヲ追フテ回復ノ途ニ向ヒツツアリ。

藏相　然ルカ、勿論何レノ國ト雖モ貴國ノ如ク大事業ヲ餘リ急速ニ遂行セント欲セバ、其財政平均ヲ失ハザルヲ得ズ。然レドモ貴國ニ大財政家サヘアラバ、之レ甚ダシク憂フベキコトニアラズ、反テ將來再ビ爲サヾルノ戒トナリテ、國家ノ爲メ利益ナルベシト信ズ。

侯爵　自分モ左樣希望シ居レリ。

藏相　貴國ハ金貨本位ヲ採用セラレタルモ、其効果ハ如何、此ノ本位ヲ維持スルノ見込充分ナリヤ。

侯爵　元來貨幣制度ハ今日ヨリ三十年前、日本政府ガ自分ヲ米國ニ派遣シテ調査セシメタル結果、自分ノ報告スル所ニ基キ、米國ノ制ニ鑒ミ、金ヲ本位トシテ制定シタルモノナレドモ、其後種々ノ原因ニ依リテ之ヲ維持スルコト能ハザルニ至リタリ。先年又々金貨本位ニ復シタレドモ、比隣就中通商的關係ノ最モ密接ナル清國ノ銀貨本位制タル間ニ立チテ、獨リ金貨本位ヲ維持スルノ手段ニ就キテハ自分ハ多少困難ヲ感ゼザル能ハズ。

藏相　或ハ然ラン、清國ト貴國トハ地形上密接ノ關係アルヲ以テ、將來ハ必ズ貴國ガ第一ノ利害關係者トナルベキハ自分ノ疑ハザル所ナリ。

侯爵　今日ニ於テハ未ダ其點迄ハ進歩シ居ラザルモ、通商上ノ關係益々發達スルハ自分モ希望シ居ル所ナリ。

藏相　然リ、拾年貳拾年後ノ事ニアラズ、歷史的ニ五拾年百年後ヲ想像セラレヨ。今日ニテハ英國ノ利害關係最モ深キガ如クナレドモ、地形上必ズ日本ガ第一ノ關係者トナルベシ。

時既ニ五時半ナリ、藏相ハラムスドルフ伯ト先約アルヲ以テ侯爵ヘ暇ヲ告ゲラル。

藏相　侯爵ハ何日頃御出發乎。

侯爵　願クハ明日出發セントス。

藏相　單ニ先日西伯利亞鐵道旅行ヲ御案内申上ゲ置キタルガ故ニ、夫等ノ都合モアリ旁々承リタル迄ナリ。自分ハ切ニ侯爵ノ歸路此線路ヲ使用セラレンコトヲ希望ス。第一侯爵ノ如キ有名ナル政治家ヲ乘スルハ線路ノ名譽ニモアリ、第二ニハ將來日本人ノ該線路ヲ利用スルノ奬勵トモナリ、自分ハ侯爵ノ搭乘セラレンコトヲ深ク希望スルモノナリ。

侯爵　厚意深謝ノ至リニ堪ヘズ、或ハ御願スルヤモ圖ラレズ。當目下少々自分ノ都合モアリ確答シ兼ヌルナリ。

（夫ヨリ侯爵ハ握手ノ禮ヲセラル、ニ際シ）

侯爵　閣下ト意見ノ交換ヲ爲シタルハ實ニ滿足スル所ナリ。

藏相　自分ニ於テモ閣下ト相知ルヲ得タルハ最モ喜ブ所ニシテ、之ヲ好機會トシテ將來時々私信ヲ往復シ、意見ヲ交換スルノ許可ヲ豫メ得置キタシ。

侯爵　夫ハ恰モ自分ヨリ願ハント欲シ居タル所ナリ。

藏相　自分モ時々書翰ヲ呈スベキ故、閣下モ亦如何ナル事ニテモ私信ヲ賜ハレ、直チニ返書ヲ差出シ出來ルコトハ出來ル、出來ザル事ハ出來ズト正直ニ申上グベシ。

侯爵　拜謝ス。

去ルニ臨ミウキツテ―氏ハ侯爵ニ壁間ニ懸レル先帝其他ノ寫眞ヲ指示ス。侯爵ハウキツテ―氏ノ寫眞ヲ請ハレタルニ同氏ハ快諾セリ。

（拾九）桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月三日聖彼得斯堡ニ於テ松井在英公使館書記官持參傳達

内閣ハ英政府ニ對シ、係屬商議ヲ進行スルコトニ決シ、同政府提出協約草案ニ對スル修正ヲ　陛下ニ奏聞シタリ。　陛下ハ當時修正草案ニ關シテ元老ニ御諮詢中ナリ。　陛下ハ同案ニ就キ貴見ヲ問フベキコトヲ本官ニ命ジ賜ヘリ。就テハ漏洩ヲ防ガンガ爲メ、特ニ一人ノ公使館員ヲ派遣シテ修正草案ヲ携帶セシムベキ旨在英公使ニ訓令シタリ。成ルベク至急ニ貴意ヲ電報セラレンコトヲ希望ス。

修正草案

偏ニ極東ニ於テ現狀及ビ全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ、且他國ノ朝鮮ヲ併呑シ、又ハ其ノ領土ノ一部ヲ占領スルヲ防遏スルコト、及ビ支那ノ獨立ト領土保全トヲ維持シ、該國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ、特ニ利益關係ヲ有スル各自ノ政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケタル下名ハ玆ニ左ノ如ク約定セリ。

第一條　日本國又ハ大不列顛國ノ一方ガ上記ノ利益ヲ防護スル上ニ於テ、別國ト戰端ヲ開クニ至リ

タルトキハ、他ノ一方ノ締約國ハ嚴正中立ヲ守リ、併セテ其ノ同盟國ニ對シテ他國交戰ニ加ハルヲ妨グルコトニ努ムベシ。

第二條　上記ノ場合ニ於テ、若シ他ノ一國ガ該同盟國ニ對シテ交戰ニ加ハル時ハ、他ノ締約國ハ來リテ援助ヲ與ヘ、協同戰鬪ニ當ルベシ。講和モ亦該同盟國ト相互合意ノ上ニ於テ之ヲ爲スベシ。

第三條　兩締約國ハ孰レモ他ノ一方ト協議ヲ經ズシテ他國ト上記ノ利益ヲ害スベキ別約ヲ爲サヾルベキコトヲ約定ス。

第四條　日本國若クハ大不列顛國ニ於テ上記ノ利益ガ危殆ニ迫レリト認ムル時ハ、彼等ハ相互ニ充分ニ且隔意ナク通告スベシ。

第五條　此ノ同盟ハ本協約調印ノ日ヨリ五箇年間効力ヲ有シ、兩締約國ノ意向ニ從ヒ再ビ其効力ヲ新ニスルコトヲ得。然レドモ右終了期日ニ至リ同盟國ノ一方ガ現ニ交戰中ナル時ハ、本同盟ハ講和結了ニ至ル迄當然繼續スルモノトス。

別條

兩締約國ノ間ニハ尙ホ左ノ通約定ス。

第一　兩國ノ海軍ハ成ルベク平時ニ於テ行動ヲ共ニシ、一方ノ軍艦ノ他ノ一方ノ港灣內ニ於ケル修繕、石炭積入其他各自ノ海軍ノ隆盛及實力ニ影響スベキ便宜ハ相互ニ之ヲ與フベキコト。

第二　各締約國ハ常ニ極東ニ於テ別國ノ最大東洋海軍ニ比シテ實力上優勢ナル海軍ヲ維持スルコトヲ努ムベキコト。

第三　大不列顛國ハ日本國ガ其朝鮮ニ於テ現ニ有スル主優ノ利益ヲ防護增進スル爲メニ必要ナリト認ムル適切ノ措置ヲ執リ得ベキコトヲ承認ス。

左記ノ電報ハ林在英公使ヨリ參考ノ爲メ送附シタルモノニシテ明治三十四年十二月三日聖彼得斯堡ニ於テ松井在英公使館書記官ヨリ接受

（貳拾）　小村外務大臣ヨリ林在英公使宛

明治三十四年十一月三十日午後八時三十五分東京發電
同日午後四時四十分倫敦著電

本官ハ十一月三十日ヲ以テ在日本英國公使ニ語ルニ、內閣ハ終ニ多少ノ修正ヲ加ヘテ英政府提出ノ協約草案ヲ承諾スルコトニ決シ、且其ノ修正タル、余ノ見ル所ニ依レバ決シテ英政府ノ强硬ナル反對ヲ招クガ如キ性質ノモノニアラズ、而シテ內閣ハ既ニ修正草案ヲ　天皇陛下ニ奏聞シテ當時勅裁ヲ待チツヽアル旨ヲ以テシタリ。

右ハ貴官ノ參考ニ供スルニ止マル。

左記二通ノ電報ハ明治三十四年十二月末倫敦滞在中參考ノ爲メ林在英公使ヨリ接受シタルモノナレドモ便宜上此處ニ挿入ス

（貳拾壹）(1) 小村外務大臣ヨリ林在英公使宛

帝國政府ハ同盟問題ニ關シテ深思熟慮ヲ遂ゲタリ。茲ニ此ノ修正草案ヲ英國皇帝陛下ノ政府ニ送達スルコトヲ貴官ニ委任ス。帝國政府ノ確信スル所ニ依レバ、此ノ修正草案ハ完全ニ本同盟眞實ノ目的ヲ達スルノ効力アルベシ。

該修正ニシテ若シ英國皇帝陛下ノ政府ノ承諾シ得ベキ所ナリトセバ、更ニ貴官ニ與フルニ條約調印ノ委任ヲ以テスベシ。

修正及追加ノ趣旨ハ頗ル明白ニシテ、説明ヲ要スルコト甚ダ少シ。其ノ幾分ハ單ニ文句又ハ形式上ノ問題タルニ過ギズ。然レドモ貴官ハ左ノ諸點ニ關シテランスダウン侯ノ特別ナル注意ヲ促スベシ。

一、清帝國及朝鮮國ノ領土保全

極東ニ於ケル現狀ヲ維持セント欲セバ、清帝國及朝鮮ノ保全ヲ謀ルコト最モ必要ナリ。故ニ朝鮮ノ一部ヲ占領スルコトスラ防遏セントスル文句ヲ序文中ニ加ヘタリ。

二、同盟ノ期間

帝國政府ハ同盟ノ期間ヲ定メ、之ニ關スル一ケ條ヲ協約中ニ加ヘンコトヲ希望ス。然レドモ英國皇帝陛下ノ政府ニシテ若シ該條ヲ別條中ニ移サント欲セバ、帝國政府ハ夫ニテモ異存ナシ。

三、同盟國軍艦ノ石炭積入ニ關スル便宜

千八百九十六年ノ日佛通商航海條約ニ左ノ如キ規定アリ。

兩締盟國ノ一方ノ軍艦ハ最惠國ノ軍艦ニシテ出入スルヲ得ル所ノ他ノ一方ノ諸港ニ出入シ碇泊シ、又ハ修繕ヲ加フルヲ得ベシ。但最惠國軍艦ト同一ノ規則ヲ遵守シ、又同一ノ名譽利益特典及免除ヲ享有スベシ。

故ニ帝國政府ハ石炭蓄積所設置ノ權ヲ與フルヲ困難トス。而シテ別條第一ノ如ク修正シタル文句ニテモ實際ニ不都合ナカルベシト信ズ。

四、優勢ナル海軍ノ維持

英國皇帝陛下ノ政府ハ定メテ同盟國ハ同盟ニ關スル地方ニ於テ優勢ナル海軍ヲ維持セザルベカラズトナス帝國政府ノ意見ニ同意ナルベシ。故ニ英政府ガ別條第二ノ明文ニ異存ヲ唱フルナカランコトヲ希望ス。

五、日本ト朝鮮

日本ト朝鮮ハ其ノ地理上ノ位置ヨリシテ、且其歴史及商工業ノ點ヨリシテ絶對ナル關係ヲ有スレバ、帝國政府ハ或ル程度マデ該半島ニ於ケル行動ノ自由ヲ保留スルヲ以テ甚ダ必要ナリト思惟ス。帝國政府ハ別條第三ノ規定ハ今日ノ情勢ニ照シテ實際的ノ必要ニ超過シタルモノト思惟セズ。

同盟ヲ擴張シテ印度邏羅ノ如キ他國ヲ包含セシメテハ如何トノランスダウン侯ノ起案ニ關シテハ、帝國政府ハ如斯キ擴張ハ種々ノ利益關係ニ亘リ、同盟ノ範圍ヲシテ帝國政府ノ豫想ニ比シテ甚タ廣キニ失セシムルニ至ルヲ恐ル。故ニ帝國政府ハ同盟ヲ單ニ支那朝鮮ニ限ランコトヲ欲ス。

同盟ノ發表ニ關シテハ帝國政府ハ此ノ種ノ協約ヲ公表スルハ慣習ニ背クモノナルコトヲ知ル。然レドモ此場合ニ於テハ慣習ト異リタル方法ヲ以テ適當ナリトナスノ事情アリ。一般ノ同盟ハ特別ナル一國又ハ數國ニ對シテ之ヲ組織スレドモ、本同盟ノ目的ハ支那ニ利益ヲ有スル諸國ノ聲明シタル政策ト一致スルモノナリ。加之公式ヲ以テ發表セザルトキハ、其ノ目的及範圍ニ關スル誇大惡意ノ風説傳播シテ同盟國ノ害ヲ釀スニ至ラン。此等ノ理由ニ依リ帝國政府ハ英國皇帝陛下ノ政府ガ、本協約調印ノ上ハ其ノ條文ヲ公式ニテ發表スルニ同意センコトヲ望ム。然レドモ別條ニ關シテハ絶對的秘密ヲ嚴守セザルベカラズ。

(2) 小村外務大臣ヨリ林在英公使宛

帝國政府ハ貴官トランスダウン侯トノ最後會見ノ際ニ於ケル貴官ノ所説全部ヲ是認ス。而シテ貴官ノ説明ヲ確ムル爲メ下ノ如キ解説ヲ爲シ、以テ内閣會議ノ時機ヲ失ハザル樣ランスダウン侯ノ注意ヲ喚起スルノ用ニ供ス。

第一　新ニ提議シタル別條第二ハ從來常ニ大不列顛國ト日本國トガ各々極東ニ於テ其海軍力ヲ他國ニ比シテ優勢ニ維持センコトヲ勉メタル政策ヲ聲明スルニ外ナラズ。故ニ帝國政府ハ英國皇帝陛下ノ政府ガ直ニ此提議ニ同意ヲ表センコトヲ豫望ス。加之此政策ヲ實施スル上ニ於テモ、亦大不列顛國ハ豫備海軍ニ賴ルコトヲ得ベキモ、日本國ハ豫備ヲ有セズ、從テ大不列顛國ノ負擔ヲ感ズルノ度ハ日本國ニ比シテ輕カルベシ。然レドモ日本國ハ該政策ヲ繼續スルヲ以テ甚ダ重要ナリトシ、敢テ此負擔ヲ甘受セントスルノ心算ナリ。

第二　別條第三ニ關シテ貴官ハ下ノ如ク云フベシ。卽チ朝鮮ニ於ケル騷亂ハ突然ニ起リ、之ヲ鎭定スルニハ迅速ナル措置ヲ必要トス。隨テ大不列顛國ト協議スルハ多クノ場合ニ於テ出來得ベカラザルコトナリ。日本ハ朝鮮ニ於ケル自己ノ責任ヲ正當ニ解釋スルモノト自信ス。隨テ該半島ニ於テ日本ノ執ルベキ措置ハ、常ニ千八百九十八年ノ西ローゼン協約ノ精神ヲ嚴守スルモノ

ナルベシ。要スルニ朝鮮ニ於ケル日本ノ政策ハ平和的ノモノナリ。而シテ此別條ハ該協約ト趣旨ヲ一ニスルモノナリ。英國皇帝陛下ノ政府ハ日本ニ承認スルニ、朝鮮ニ於ケル自由行動ヲ以テスルモ、決シテ之ガ爲メニ該地方ニ於テ侵略的傾向ヲ發生スルナラントノ杞憂ヲ抱クノ必要ナカルベシ。

第三　同盟ノ範圍ニ關シテハ本官ハ先キニ與ヘタル訓令ヲ維持ス。楊子江岸ノ形勢ハ現時ニ於テハ平穩ナレドモ、最モ緻妙ナルノ性質ヲ有シ、將來ニ於テハ恐ラク容易ナラザル困難ヲ惹起スルニ至ルベシ。故ニ同盟ノ利益ノ平均ハ必ズシモ日本ノ一方ニ偏スト云フヲ得ズ。

第四　獨逸若シ同盟ニ加入セバ、帝國政府ハ滿足ナリ。然レドモ此問題ハ寧ロ大不列顛國ニ關係スル所多シ、如何トナレバ日獨ノ關係ヨリモ英獨ハ世界各地ニ於テ多々重要ナル關係ヲ有スレバナリ。故ニ帝國政府ハ此問題ニ關シテハ全然英國皇帝陛下ノ政府ノ希望ニ一任スベシ。然レドモ商議ノ現程度ニ於テハ、最モ嚴重ナル秘密ヲ保ツコト絶對的ニ必要ナルヲ以テ、日本政府ハ同盟ノ調印セラルヽカ、又ハ些クモ條件ノ確定スル迄獨逸ニ對スル通知ヲ延期スルヲ以テ得策ナリト思惟ス。

（貳拾貳）　露國外相ラムスドルフ伯ト會見ノ記（其二）

明治三十四年十二月四日露國外務省ニ於テ

明治三十四年十二月四日豫メ約スル所アリ、伊藤侯爵都筑氏ヲ伴ヒ露國外務大臣ラムスドルフ伯ヲ外務省ニ訪問ス。

外相　今日ハ當方ヨリ訪問スル心算ナリシモ、御來駕ノ通知ニ接セルヲ以テ在省待望致シタリ。（夫ヨリ寒暖ノ挨拶終リタル後）

侯爵　本日ハ先日ノ約束ニ隨ヒ自分ノ見ル所ヲ以テ箇條書ヲ作リ持參致シタリ。（玆ニ於テ侯爵ハラ伯ニ書類ヲ渡サル）

外相　勿論精讀熟慮ヲ遂ゲタル上ニアラザレバ確然タルコトハ申兼ヌレドモ、一見シタル所ニテハ餘リ一方ニ偏シ、到底之ヲ目シテ一ノ協商（arrangement）ト稱スル能ハザルガ如シ。（外相ハ「アランジマン」ナル語ノ意ヲ誤解シタルカ、又ハ特ニ之ヲ曲解シタルカノ如ク見ヘタレドモ、當方ニ於テハ故ラニ追究セザリキ）

侯爵　過日ノ高話ノ模樣ニテハ、我國ニ於テ朝鮮ノ獨立及其領土ヲ戰略的ノ目的ノ爲メニ使用セザルコト、竝ニ朝鮮海岸ニ海峽ノ交通ヲ危ウスルガ如キ設備ヲ爲サヾルニ於テハ、貴國ハ朝鮮ニ於ケル商業上工業上政治上及軍事上自由處分ノ專權ヲ我邦ニ對シテ承認セラルヽガ如キ感ヲ得タルガ故ニ右ノ如キ書面ヲ差出シタルナリ。

外相　然リト雖モ、凡ソ一ノ協商ト云ヘバ双方ノ利益ヲ互ニ讓歩的ニ規定シタルモノヲ指スガ如シ。而シテ此書面ニ依レバ、貴國ノ利益ノミヲ規定シ、我ガ爲メニハ凡テ讓歩ノミナリ。朝鮮ニ關スル現在ノ日露協商ハ對等相互的ノモノナリ。卽チ一方ニテ五百人ノ出兵ヲ爲セバ、他ノ一方モ亦五百人出兵スト云フガ如キ協定ナリ。然ルニ今日出兵ノ專權竝ニ政治的專權ヲ委スルハ、露國ハ卽チ讓歩ヲ爲スナリ貴國ハ利益ノミナルニ反シ、露國ハ損失ノミニテ隨分困難ナリ。

侯爵　乍併先日モ語リタル如ク、朝鮮ノ事ハ擧ゲテ之ヲ我國ニ一任セラル、ニアラザレバ、日本人ハ到底安堵セザルナリ。又朝鮮ノ獨立其他ノ保證等ハ吾レヨリ求メタルニハアラザルナリ。

外相　仰ノ通ナリ、然レドモ我ガ地位ニモ成リテ見ラレヨ。此案ヲ基礎トシテ記名調印ヲ爲ストキハ、露國人民ハ如何ナル感ヲ起スベキヤ。露國ハ何ノ利益若クハ必要アリテ故ラニ對等的ノ協商ヲ放棄シテ、日本ノ甘心ヲ買フコトヲ勉メタルカトノ論囂シキニ至ルベシ。加之朝鮮ノ獨立ハ之ヲ保證スト云ハルレドモ、政治上ニモ軍事上ニモ干涉スルコトヲ得ベキ獨立ハ、明白ニ云ヘバ有名無實ノ獨立ナリ。既ニ如斯キ利益ヲ日本ノ爲メニ承認スル上ハ、露國ノ爲メニモ何カ利益トナルベキ事無カル可カラズ。凡ソ協商ト云ヘバ双方ヨリ互ニ讓歩スル所アルカ、又ハ双方共ニ利益スル所無ケレバ到底實用的永續的ノ性質ヲ有スル能ハザルモノナリ。此案ニテハ所謂協商ト云フヲ得ザルガ如シ。

通譯者(都筑氏)　通譯ノ爲メニ御言葉ノ趣旨ヲ念ヲ押シテ伺ヒ度シ。然ラバ閣下ノ言ハント欲セラル、所ニテハ、此案ニテハ到底協定ノ基礎トナルベキ見込無シトノ意ナルヤ。

外相(通譯者ニ對シ)　決シテ然ラズ、皇帝及同僚ノ意見等ヲ確メタル後ニアラザレバ見込アリトモ無シトモ云ヒ難シ。

(右ノ問答ヲ侯爵ノ爲メニ通譯シタルニ)

侯爵　然ラバ貴國ハ是レニ對シテ如何ナル利益ヲ要求セラル、カ。

外相　夫モ皇帝ノ意見及同僚諸氏ノ各專門的觀察ヲ聞キタル後ニアラザレバ確答シ難シ。然レドモ何カ得ル所無ケレバ異ナモノナリ。過日ノ御話ニ依ルモ、朝鮮ノ事サヘ貴國ニ一任スルニ於テハ、將來萬一清國ニ事アルニ際シ我國ニ對シ支那方面ニ向テハ自由ノ處置ヲ爲スコトヲ認メルト云ハレタルガ如キ感アリキ。

通譯者(都筑氏)若シ閣下ニ於テ右ノ如キ感覺ヲ抱カレタレバ、夫ハ通譯者ノ語ノ足ラザリシニ基クナリ。其當時侯爵ノ云ハレタル所ハ、朝鮮ヲ貴國ガ吾レニ一任シ、依テ以テ日露互ニ協和スルコトヲ得ルニ至ラバ、將來清國ニ再ビ事起ルニ當リ、貴國ハ背後ニ我ガ國ノ疑惑若クハ國民ノ敵愾心ヲ顧ルノ必要無クシテ清國ニ對スル態度ヲ定ムルコトヲ得ベケントノ意ニ過ギザリシナリ。

外相　然ルカ、乍併我ガ邦ノ北清ニ於ケル利害ノ關係ハ、恰モ貴國ノ朝鮮ニ於ケルガ如キ關係アル

ガ故ニ、之レニテモ承認スルガ如キ高案ハ無キヤ。

侯爵　北清ト云フモ如何ナル部分ヲ指サル、ヤ、其如何ニモ依ル事ナリ。清國人ノ如キハ黃河以北ヲ擧ゲテ北清ト名クルモノ、如シ。

外相　單ニ國境ニ接シタル部分ニ限ルナリ。

侯爵　國境ニ接シタル部分ト申シテモ隨分漠然ナリ、勿論如何ナル部分ヲ指シテ北清ト爲スカノ定義ヲ今日承ル必要ナシ、兎ニ角貴國ノ要求セラル、所ヲ吾レニ於テ豫知スル謂無キニ就キ、試ニ其要求セラル、所ヲ記入セラレテハ如何。

外相　御尤千萬ナリ、無論左樣ニ願度シ、然レドモ侯爵ハ今日午後出發セラル、ニアラズヤ、左スレバ此協商ハ東京ニ於テ當國ノ代表者ト貴國政府トノ間ニ於テ之ヲ爲サシムルノ御考ナルヤ。

侯爵　大體ノ基礎ニシテ協定ノ見込アリト認メバ、本國政府ニ電報シテ其事ヲ勸告スベケレドモ、其見込モ無キニ如斯キ處置ニ出ルコト能ハズ、自分ガ政府ニ勸告スル所ハ政府ニ於テモ多少顧ミル、事ト信ズルナリ。

外相　然リト雖モ閣下ニシテ今日御出發トアラバ到底御滯在中ノ間ニ合ハズ。

侯爵　歸路伯林ニ立寄リ、十日乃至二週間ハ滯在スベキニ付キ、彼地ニ御通知下サレテハ如何。

外相　夫モ出來ルヤ否ヤ甚ダ疑フナリ。如斯キ問題ハ熟慮ト周匝ナル調査ヲ要スルコト論ヲ俟タズ、我等ノ皇帝ニ謁見スルノ日ハ一週一度ニ限ラレ、自分ハ火曜日ヲ除クノ外皇帝ニ接近スルコトヲ得ズ。故ニ伯林御滯在中ノ間ニ合スルヲ得ルヤ否ヤ約束スルヲ得ザルナリ。

侯爵　決シテ約束ヲ求ムルニ非ズ、互ニ一個人ノ資格ヲ以テ談合シタル事トテ、此案モ協定ノ成立スル見込アル場合ヲ除クノ外、一ノ反古ト認メラレンコトヲ希望ス。或ハ又閣下ニ於テ此基礎ニテハ協定ノ見込無シト感ゼラルレバ只今之ヲ持歸ルベキカ。

外相　實ハ見込ナシト云フコトモ出來ヌナリ。貴我兩國共ニ目的トスル所ハ同一ナルガ故ニ、之ヲ達スルノ方法モアルベシ。啻ダ餘リ一方ニ偏セザル樣注意セザル可カラズ。曾テ小村氏ガ公使タリシ際、互ニ無責任ニ東洋問題ヲ論ジタルコトモアリタリ。單純ニ攻究的ノ問題トシテ朝鮮ヲ貴國ニ一任スルニ就テハ、滿洲ハ我ガ國ニ一任スベシナド論ジタルコトモアリタリ。

侯爵　左樣ナリシカ。

外相　勿論滿洲ハ永久ニ占領スルノ意ハ毫モ無シト雖モ、我ガ兵ヲ撤退スルニ就キテハ幾分カ規定ヲ要スルコトモアルベシ。夫ハ扨置キ此案ニ對シ伯林ニ宛テ閣下ニ答ヘ、閣下ニ於テ御不同意ノ點ヲ更ニ當地ニ申越サレ、又々當方ヨリ返答スルノ手續トナリテハ、伯林ト彼得斯堡ノ間ニ協議ヲ開ク次第ニシテ頗ル手數煩雜ナレバ、此談判ヲ東京ニ移シタル方得策ナルベシト信ズ。

侯爵　東京ニ移ストナスモ、其基礎ニシテ協定ノ成立スル見込確然タル後ニアラザレバ、到底徒勞

ニ過ギズト信ズルガ故ニ右ノ如ク申セシナリ。

外相　侯爵ハ後日再ビ巴里ニ赴カル、御豫定ノ樣承リタレバ、彼地ニ於テ談判ヲ開始シテハ如何。

侯爵　巴里ヘハ再ビ參ルベケレドモ、其時ニテハ餘リ晩カルベシ。

外相　此事タル左樣ニ急ガル、カ。

侯爵　別ニ急グト云フ次第ニテハ無ケレドモ、過日皇帝ノ勅語モアリ、幸ニ自分モ來遊シタレバ、一日モ速カニ協和ノ成ルモノトセバ兩國々民ノ爲メニ最モ幸福ナルベシト信ジタルニ過ギズ。

時ニ正午十二時ナリ、當日ハ皇太后陛下ガツチナ宮ニ還啓セラルヽ爲メ、各大臣ハ午後同宮ニ伺候セザル可カラザルガ故ニ、外相トノ會見ハ十時半ヨリ十二時迄ノ約ナリシヲ以テ告別シテ去ル。別ルヽニ臨ミ、侯爵ハ當地來遊ニ就キテハ皇帝陛下各大臣其他ヨリ優遇ヲ受ケタレバ、深謝ノ意ヲ外相ヨリ其向ヘ御通知アリ度シト依賴セラレタルニ、ラムスドルフ伯ハ「必ズ貴命ノ如クスベシ、閣下ノ來遊ハ當地ニ於テ好キ記念ノミヲ殘シテ去ラルヽコトハ自分ノ保證スル所ナリ云々」ト語レリ。

伊藤侯爵ヨリ露國外相ニ渡セシ書面

明治三十四年十二月四日聖彼得斯堡ニ於テ

第一　朝鮮ノ獨立ノ相互保證

第二　朝鮮ノ領土ハ其ノ如何ナル部分ト雖モ互ニ軍略上ノ目的ヲ以テ之ヲ使用セザルベキ旨ノ相互保證

第三　朝鮮海峽ノ自由交通ヲ危クスルガ如キ軍事的設備ハ朝鮮沿岸ニ一切之ヲ爲サヾルベキ旨ノ相互保證

第四　政治上工業上及ビ商業上ノ關係ニ就テハ露西亞ハ日本ニ承認スルニ朝鮮ニ於ケル自由行動竝ビニ朝鮮ヲシテ善良ナル政府ノ義務ヲ盡サシムル爲メニ助言及ビ援助ニ依リ朝鮮ヲ助クルノ專權ヲ以テスルコト、但シ右ハ內亂其他之ニ類シテ朝鮮ト日本トノ平和的關係ヲ亂スノ恐アル事變ヲ鎭定スル爲メニ必要ナル範圍內ノ軍事的援助ヲモ包含スルモノトス

第五　從來ノ協定ハ此ノ協和ニ依リテ凡テ消滅スルコト

（貳拾參）　井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報

在露日本公使館ヨリ轉送
明治三十四年十二月五日於伯林接電

余ノ電報ニ對スル貴下ノ返電、竝ニ最後決定ノ急報ヲ要求セラルヽ、貴電孰レモ落掌セリ。

日英同盟ト日露協商

貴下ハ總理大臣ヨリ在英公使ヲ經由シテ通牒ヲ受取ラレタルコト、信ズ。元老會議ハ十二月七日ニ開カルベキ豫定ナリ。第一余ハ所信ニ隨ヒ帝國將來ノ利害ヲ熟慮スベキコトヲ提議スル覺悟ナリ。他ノ元老ハ既ニ內閣大臣ト共ニ同盟計畫ヲ贊助スルニ決意シ居レリ。第二假令多數ニ於テ同盟ヲ贊成スルコトアルトモ、余ニ於テハ該修正案ヲ以テ明瞭ヲ缺クモノト認メ、頗ル杞憂ニ堪ヘザルナリ。尤モ問題甚ダ重要ナルヲ以テ、其ノ審査ハ尙ホ一週間ヲ要スベシ。貴下ハ何日頃何處ニ向テ聖彼得斯堡ニ出發セラルヽヤ。

（貳拾四）　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月六日於伯林發電

露西亞皇帝ニ謁見シ、且ラムスドルフ伯竝ニウイツテ氏ト長時間ニ亘リテ會見シタル結果ニ依レバ、勿論右ハ一個人ノ資格ニテ爲シタルモノナリト雖モ、余ヲシテ彼等ハ眞面目ニ日本ト協和センコトヲ希望スルモノナリトノ感ヲ抱カシメタリ。余ハ彼等ヲシテ左ノ事項ヲ承諾セシメタリ。卽チ若シ日露兩國互ニ朝鮮ノ獨立ヲ保證シ、朝鮮領土ノ如何ナル部分ト雖モ、互ニ軍略的目的ヲ以テ之ヲ使用セザルコト、竝ニ朝鮮海峽ノ自由交通ヲ危クスルガ如キ砲臺等ヲ該國沿岸ニ建築セザルコトヲ、互ニ約束スルニ於テハ、露國ハ工業的事項商業的事項政治的事項及內亂其他之ニ類スル事變ヲ鎭壓スル爲メニ必要ナル現度ニ於ケル軍事的事項ニ就テスラ、朝鮮ニ於ケル日本專有ノ自由行動ヲ承認スルコト是ナリ。

勿論實際ノ商議ニ着手セバ彼等ハ右ニ對シ反對讓步ヲ要求スル所アルベシ。彼等ガ余ト談話中寧ロ明白ニ諷刺シタル所ニ依リテ察スルニ、彼等ノ要求セントスル反對讓步ハ其ノ範圍ノ大小ハ暫ク置キ、兎ニ角滿洲地方ニ於ケル露西亞ノ自由行動ニ關スルモノナルベシ。余ハ序ニ一言スベシ。露國政府ニシテ若シ露西亞ト協商ヲ試ムルノ政策ヲ執ルニ決セバ、余ハラムスドルフ伯及ウキツテー氏ト私信ヲ往復シ居ルガ故ニ、彼等ノ要求セントスル反對讓步ノ如何ナルモノナルカヲ確知スルヲ得ベシト豫期ス。

余ノ見ル所ニ依レバ、朝鮮ニ對シテ利害關係ヲ有スル唯一ノ國ト協和ヲナスニハ、今日ヲ以テ最モ適當ナル時機トナスナリ。余ハ親交的協和ヲ試ミンコトヲ熱心ニ帝國政府ニ勸告ス。而シテ此ノ協和タル日英同盟締結以後ニ在テハ終ニ之ヲ爲シ能ハザルニ至ラン。

（貳拾五）　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月六日於伯林發電

同盟草案ニ關シ余ハ下ノ如キ觀察ヲ貴下ノ參考ニ供ス。

序文中「現狀」ヲ以テ同盟ノ目的ノ一トナスガ如クニ記シアリ。此點ニ關シテ一言シ得ベキハ、卽チ現存ノ日露協商ニ聲明シタル「現狀」ナルモノハ、恰モ我等ノ出來得ベクンバ之ヲ變更セント欲スルモノナリ。別條第三ハ稍々漠然ト右ノ意ヲ含ムモノヽ如シ。約言スレバ該條ノ趣旨及將來更ニ歩ヲ進メテ締結シ得ベキ日露協商ニ照顧シテ之ニ考フル時ハ、所謂「現狀」ノ解釋ニシテ疑義ヲ生ズルニ至ルノ恐ナキヲ得ルカ。

次ニ支那ニ關シテ記スル所アリ、而シテ支那トハ清帝國全體ヲ指スカ、或ハ支那本部ヲ意味スルカ、將來滿洲ニ關シテ起リ得ベキ解釋ニ鑑ミテ、條約適用ノ範圍ヲ一層明確ニ規定スル方良策ニアラザルカ。

朝鮮領土ノ占領ニ關シ「他國」ノ字句アリ、右ハ「締約國以外ノ他國」ヲ意味スルモノト信ズ。然ルニ余ノ考フル所ニ依レバ、英國ニ承認スルニ朝鮮領土ヲ占領スルノ權利ヲ以テスルノ必要更ニ無シ。此ノ事タルヤ第三國ヲシテ本協約ニ加入セシムルノ意アラバ頗ル難問トナルヲ免レズ。故ニ「日本以外ノ他國」ナル字句ヲ用ユル方得策ニアラザルカ。

次ニ別條ニ就キテ云ヘバ、其第一ニ所謂海軍ノ行動ヲ共ニスルノ義務ナルモノハ、戰時ニ於テハ最モ必要ナルベシト雖モ、平時ニ在テハ反テ往々我邦ニ取リテ大ナル不便ノ原因トナルベシ。況ンヤ何等束縛的規約ナクモ行動ヲ共ニセント欲セバ實際之ヲ自由ニ爲シ得ルニ於テオヤ。

別條第二ニ關シテハ重大ナル異論ヲ唱ヘ得ベキモノト思惟ス。此同盟ニシテ諸外國ノ知ル所トナルヤ、彼等ノ內其ノ國力ヲ集注シテ東洋ニ於ケル海軍力增加ニ努ムルモノアルニ至ルハ、殆ント必然ノ事實トシテ我等ノ豫メ覺悟セザルベカラザル所ナリトス。玆ニ於テカ我邦ノ經濟的富源ハ果シテ如斯期未ダ到ラザルニ先チテ經費大增加ノ必要ニ應ズルニ足ルヤ否ヤノ問題モ亦必然起ルベシ。加之此一條ハ他ノ諸國ヲシテ到底同盟ニ加入スルコト能ハザラシムルニ至ルノ障礙ニハアラザル乎。

全般ニ亘リ余ノ貴下ニ要求スル所ハ、將來露西亞ト協和ヲ爲シ得ベキ場合ト、獨逸將來ノ態度如何トニ顧ミテ、頗ル愼重ニ各條ヲ熟慮セラレンコトニアリ。本電報ハ之ヲ　天覽ニ供セラレンコトヲ請フ。

（貳拾六）　伊藤侯爵ヨリ井上伯爵宛電報

明治三十四年十二月六日於伯林發電

元老會議ニ關スル貴電ハ伯林ニ轉電シ來リ昨夜落掌セリ。余ハ直接桂子ニ電報ヲ發セシヲ以テ一讀セラレンコトヲ乞フ。

（貳拾七）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月八日於伯林接電

小官ハ外務大臣ヨリ參考ノ爲トシテ左ノ電報ヲ受取レリ。

元老諸公ハ十二月七日祕密會議ヲ開キ、內閣總理大臣及本官之ニ列席セリ。同盟問題ハ充分討議シタル後、全會一致ヲ以テ直ニ其締結ヲ可決セリ。伊藤侯ヨリノ返電伯林ヨリ來ルヲ待望シツヽアリ。

（貳拾八）　井上伯爵ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月八日於伯林接電

元老內閣總理大臣及外務大臣ハ十二月七日ヲ以テ會議ヲ開キタリ。余ハ貴下ノ在獨中林董氏ニ宛テ發送セラレタル電報及桂內閣總理大臣ト貴下ト協議ノ末、八月八日林氏ニ宛テ發送シタル電報ヲ熟讀セリ。余ハ帝國ノ側ヨリ英政府ニ交涉ヲ開始シタルノ形跡ヲ發見シタリ。右ノ事情ニ依リ會議ノ席ニ於テ余ハ多數元老ノ說ニ同意スルノ外他ニ途アルヲ見ズト陳述シタリ。其ノ結果トシテ同盟ハ直ニ之ヲ締結スルコトニ確定シタリ。

（貳拾九）　伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報

明治三十四年十二月九日於伯林發電

協約草案ニ關シ余ハ數多ノ修正ヲ日本政府ノ參考ニ供シタリ。然レドモ余ノ電報ハ元老會議ノ間ニ合ハザリシナランガ故ニ、貴下ハ或ハ其ノ間ニ確定ノ訓令ヲ受クルコトナキヲ保セズ。然ルニ前陳ノ修正ハ甚ダ重要ナルモノナリト愚考スルヲ以テ、余ハ貴下ガ英國政府ニ通牒ヲ爲ス前ニ當リ余ニ報知センコトヲ要求ス。

（參拾）　伊藤侯爵ヨリ山縣侯爵井上伯爵宛電報

明治三十四年十二月十日於伯林發電

元老會議ハ余ガ伯林ヨリ送リタル最後ノ二通ノ電報ヲ熟讀シタル後、且當問題ノ過去ニ於ケル沿革ヨリモ、寧ロ將來ノ結果ニ就キテ充分熟慮ヲ遂ゲタル後ニ決議ヲ爲シタルヤ。

（參拾壹）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十二日於伯林接電

外務大臣ハ十二月十日附ヲ以テ小官ニ訓令スルニ全力ヲ盡シテ英政府ヲ勸誘シ、速ニ協約ヲ締結セシムルコトニ勉ムベキ旨ヲ以テセリ。而シテ其協約案ハ小官ヨリ嘗テ松井ニ托シテ貴下ニ送達シタル修正案中、僅々タル字句ノ變更ヲ爲シタルニ過ギザルモノトス。訓令ノ日附ニ依リテ察スルニ、

帝國政府ハ閣下ノ起案ヲ熟慮シタル後ニ此決定ヲ爲シタルモノナルベシ。

事情如斯ナルヲ以テ、帝國政府ヨリ速ニ前訓令ヲ取消シ來ルニアラザレバ、小官ハ義務トシテ之ニ從ハザルヲ得ズ。小官ハ外務大臣ニ宛テ左ノ如キ電報ヲ發シタリ。

伊藤侯ハ其ノ帝國政府ニ申遺リタル起案ノ或ハ最後ノ決議以前ニ到着セザリシナラント信ズベキ理由アルヲ以テ、若シ小官ニ於テ修正草案ヲ英政府ニ傳達スベキ最後ノ訓令ヲ受取リタラバ、侯ニ報知センコトヲ乞ハレタリ。侯ハ前陳ノ起案ヲ以テ最モ重要ナルモノナリト稱セラル。小官ハ侯ニ宛テ左ノ如キ電報ヲ發シタリ（林公使ハ此ノ電文ヲ記載セザルモ蓋シ本電報ノ前文ニ同ジキモノナルベシ）

小官ハ貴官ノ訓令ニ從ヒテ行動シ得ルヤ否ヤ、直ニ返電アランコトヲ待望ス。

（參拾貳）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十二日於伯林接電

小官ハ外務大臣ヨリノ左記緊急訓令ヲ熟讀シテ本日ランスダウン侯ニ修正草案ヲ傳達シタリ。

先電ノ訓令ハ內閣及元老ニ於テ伊藤侯ノ二通ノ電報ニ關シテ熟慮ヲ遂ゲタル後、且　勅裁ヲ經タル後ニ貴官ニ送附シタルモノナリ。故ニ貴官ハ先キノ訓令ニ從ヒ直ニ行動スベシ。

（參拾參）　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月十二日於伯林接電

在英公使ヨリ間接ニ、且一個人トシテ聞ク所ニ依レバ、余ノ建議ハ日本政府ノ採用スル所トナラザリシ由、余ハ切ニ之ヲ遺憾トスレドモ、余ノ最モ熱心ニ希望スル所ハ卽チ些クトモ朝鮮問題ニ關シ、將來好機ニ乘ジ露西亞ト協約ヲ結ブコトニ就キ、特ニ日本ノ獨立行爲ノ自由ヲ保留スルコトヲ等閑ニ附シ去ルコトナキニアリトス。

加之余ハ協約ヲ以テ嚴重ニ兩締約國間ノ祕密トナサンコトヲ希望ス。現今ノ場合之ヲ發表スルハ假令半公的方法ニ依ルモ、猶ホ大陸諸國ノ態度ニ重大ナル影響ヲ及ボスヲ免レザルナリ。

（參拾四）　伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報

明治三十四年十二月十二日於伯林發電

貴下ノ參考ノ爲メ余ガ日本政府ニ宛テ發シタル左ノ電報ヲ送ル。

（電文、前號ニ同ジ）

（參拾五）　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十三日於伯林接電

本官ハ伯林發ノ貴電二通ヲ受領シ、之ニ對シテ熟慮ヲ遂ゲタリ。貴電ハ二通共ニ十二月九日ヲ以テ其飜譯ヲ　天覽ニ供シ奉レリ。　陛下ハ貴下ノ論旨ヲ了セラレタルモ、内閣ノ決議及ビ井上伯ヨリ貴下ニ報ジタル元老會議ノ結果ヲ考慮アラセラレ、且又現今ノ狀勢最早ヤ我邦ノ遲延ヲ許サヾルノ事情ヲ察セラレ、終ニ英政府ト商議ヲ爲スコトヲ御決定アラセラレタリ。

我ガ修正草案ニ關スル貴下ノ觀察ニ對シ本官ノ意見ハ下ノ如シ。

一、序文中ニ記載セル「現狀」ナルモノハ朝鮮ニ於ケル我邦將來ノ行動ニ照顧シテ不利ナルベシトノ貴見ニ關シテハ、特ニ我ガ利益ヲ防護スルノ目的ヲ以テ別條第三ノ規定アルガ故ニ不利ナルコトナカルベシ。卽チ別條第三ハ序文ノ明文ニ對シ一ノ除外例ノ如キモノヲ設ケタルナリ。

二、序文ニ所謂「支那」ナル字ハ「支那帝國」ト讀ムベキモノニシテ、勿論淸帝國全體ヲ指シタルナリ。

三、「他國」ノ語ニ關スル貴見ハ其論旨ハ御尤ナレドモ、之レ亦別條第三ニテ其ノ意ヲ盡スベシ。卽チ大不列顛國ハ同條ヲ以テ明カニ朝鮮ニ於ケル我ガ主優ノ利益及該利益ヲ防護スルノ權利ヲ承認シタルガ故ニ、同國ハ朝鮮ノ併呑又ハ占領ヲ放棄シタルモノト云フヲ得ベシ。貴下ノ起案セラレタル「日本以外ノ他國」ナル語ハ穩當ヲ缺クノ感アリテ、協約中之ヲ用ユルハ殆ンド難シトス。

四、別條第一ニ所謂平時ニ於ケル共同行動ノ目的ハ、兩國海軍ヲシテ戰時ニ於ケル行動ヲ共ニスルコトヲ得シムル爲メノ準備ナレバ、當然ノ用心ニ外ナラズト考フ。石炭積入及ビ修繕ニ關シテハ凡テ條約國ノ軍艦ニ對シテ如斯キ便宜ヲ現ニ與ヘツヽアリ、故ニ何等ノ不都合ヲ生ズル筈ナシ。

五、極東ノ平和ヲ維持セント欲セバ我邦ハ常ニ適當ナル軍備ヲ有セザルベカラズ。他國ノ海軍力ニ顧ミテ我ガ海軍力ヲ增スノ必要アルハ既ニ疑ナキ所ニシテ、同盟ノ成否ニハ關セザルナリ。尤モ海軍擴張ノ計畫ヲ實施スルニ當リ、形勢ノ緩急及帝國ノ經濟的事情ヲ考慮セザルベカラザルハ勿論ナリトス。

（參拾六）　桂内閣總理大臣ヨリ伊藤公爵宛電報

明治三十四年十二月十三日於伯林接電

本日附ノ先電中ニ記シタル如ク、問題全部ニ關シ御熟慮ヲ遂ゲサセラレタル後終ニ英政府ト商議

日英同盟ト日露協商

スベキ　勅裁アラセラレタリ。元老竝ニ内閣大臣ハ單ニ條約文ニ關シテノミナラズ、併セテ其現在及將來ノ利害ニ關シ最モ周匝ナル攻究考慮ヲ遂ゲタリ。

閣下ヨリ二通ノ電報到達スルヤ、内閣大臣ハ熟讀審考ヲ遂ゲタル後貴電ヲ　陛下ニ奏聞シタリ。　陛下ハ再ビ本問題ニ就キ元老ニ御諮詢アラセラレタリ。元老ハ貴電ノ趣旨ヲ充分審査討究シタリ。然レドモ日露同盟ノ成否未ダ判然ナラザルヲ思ヒ、且此時ニ當リテ遲延セバ英政府ヲシテ其ノ提議ヲ撤回スルニ至ラシメンコトヲ慮リ、元老ハ或ハ日本ノ終ニ英露兩國ノ同情ヲ失ヒ、孤立ノ姿ニ陷ルコトナキヤニ就キ疑ヲ抱ケリ。

如右キ考慮ハ終ニ元老ヲシテ英國ト同盟ヲ結フニ決スルノ可ナルヲ確信セシムルニ至リタリ。本問題ニ關シ獨逸ヲ誘引セザル理由ハ、早計ニ獨逸ト協議ヲ爲スハ他ノ方面ニ於テ此形勢ヲ利用スルノ機會ヲ同國ニ與フルナラントノ杞憂、竝ニ獨逸ト交渉スルハ英國ノ希望ニ協ハザルナラントノ推慮ニ基クモノナリ。

加之獨逸現在ノ狀勢ヨリ察スルニ、同國ハ決シテ本同盟ニ加ハラザルベシト信ズベキ理由アリ。日英同盟ノ締結セラレタル場合ニ於テ、獨逸ハ露佛ニ加ハルノ恐ナキニアラザレドモ、日本政府ハ豫メ如斯キ場合ニ對シテ警戒スルノ外他ニ選擇スベキ方策アルヲ見ズ。

凡テ前陳ノ事情ニ關シ特ニ御考察アランコトヲ望ム。

貴下ハ何處ニ向テ行カントスルヤヲ直ニ電報アリタシ。若シ貴下ノ意向ニシテ直接倫敦ニ赴カルヽニアラバ、願クハ更ニ當方ヨリノ報知ニ接スル迄出發ヲ延期セラレタシ。山縣侯及井上伯ニ宛テタル十二月九日附ノ貴電ハ侯伯ニ傳達セリ。然レドモ本電報ニテ詳カナレバ別ニ返電ヲ發セラレズ。

（參拾七）　杉村在露臨時代理公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十三日於伯林接電

先方ノ請求ニ依リ、小官ハ十二月十二日ラムスドルフ伯ト會見セシニ、伯ハ小官ニ請求スルニ左ノ趣旨ヲ閣下ニ通センコトヲ以テセリ。

朝鮮問題ニ就キ露日間ニ一ノ協和ヲ締結スルコトニ關シ、最後ノ會見ノ際ニ貴下ノ提出セラレタル案ニ對スル返答在中ノ書翰一通ヲ、一使者ニ托シテ送附致スベキニ付キ、貴下ハ右ノ書翰ヲ在伯林ノ露國大使館ヨリ受取ラレ度シ。右ノ使者ハ十二月十四日夕刻當地ヲ發シテ伯林ニ向ハルベキ露國皇大弟ニ隨從スル者ナリ。余ハ該書翰到着迄貴下ノ伯林ニ滯在セラレンコトヲ望ム。又若シ其ノ以前ニ出發セラル、ナラバ、行先キヲ同地大使館ニ告ケ置カレンコトヲ乞フ。皇大弟ハ十二月十七日夕伯林ヲ發シテ歸途ニ就カルルノ豫定ナリ。而シテ出來得ベクンバ同一

使者ヲシテ貴下ノ返翰ヲ持チ歸ラシメンコトヲ希望スルガ故ニ、適當ナル時期ニ於テ其ノ返翰ヲ御渡シアランコトヲ乞フ。然レドモ其ノ運ニ至ラザレバ木曜日迄ニ御渡シアリタシ。同日更ニ他ノ一使者同大使館ヨリ聖彼得斯堡ニ向テ出發スルノ豫定ナリ。

ラムスドルフ伯ハ小官ニ告ゲテ曰ク、露西亞政府ハ貴下ノ當地來遊ヲ利用シテ、日本ト永續的且鞏固ナル協和ヲ設ケンコトヲ切望セリト。且又伯ハ今日ニ至ル迄貴下ノ起業ニ對シ返答ヲ爲ス能ハザリシヲ遺憾トスル旨ヲ表白セリ。伯ハ尚ホ語テ曰ク、貴下提起ノ諸項ハ今回起稿シタル草案中ニモ其儘保存シ置キ、唯之ニ附加スルニ露西亞側ノ着眼點ヨリ新ニ二點ヲ以テシタルニ過ギズト。伯ハ本問題ノ無關係者ニ漏ルヽ恐アルヲ以テ、電報ニ依リ前陳ノ趣旨ヲ獨逸駐劄露國大使ニ通知スルヲ欲セザリシナリト附言セリ。

（參拾八）伊藤侯爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月十三日於伯林發電

十二月十二日附ノ貴電ニ關シ左ノ諸點ヲ貴下ノ參考ニ供ス。

一、貴我ノ間ニハ重大ナル誤解アリ、余ハ決シテ露日同盟ヲ建議スルノ意志ヲ有セザリキ、協和ヨリ同盟ニ至ルハ其距離尚ホ遠シ、余ハ英國ト條件附防禦的ノ性質ヲ有スル一ノ同盟ヲ爲スモヽ同時ニ朝鮮ニ關シテ露西亞ト一ノ協和ヲ爲スノ餘地アリト信ズ。之レ卽チ余ガ十二月十二日附ノ電報ヲ以テ貴下ニ要求スルニ、將來朝鮮問題ニ就キ假令滿洲ニ於テ多少ノ讓歩ヲ爲スハ或ハ免レザル所ナルニモセヨ、露西亞ト協和ヲ結ブコトニ關シテ獨立行動ノ自由ヲ保留セラレンコトヲ以テシタル所以ナリ。

二、日英同盟ノ締結ハ或ハ大陸諸政府ノ感情ヲ害シ、從テ日露間ニ協商ヲ遂グルコト益々困難ナルニ至ルベシ。故ニ余ハ今日ノ場合尚ホ其餘地アラバ、遷延的手段ヲ以テ其締結ヲ延サンコトヲ貴下ニ請求シ、若シ其餘地ナクンバ少クトモ之ヲ祕密ニ付センコトヲ要求ス。但英國ノ諸新聞紙就中「タイムス」ノ如キハ、遺憾ナガラ既ニ已ニ日英ノ親交的接近ニ關シテ消息ヲ漏スノ事情アルニ拘ハラズ、該協約ヲ祕密ニ付センコトヲ要求スルナリ。且又英國ハ大陸諸國ニ於テ甚ダシク其威嚴ト右諸國ノ同情トヲ失ヒ、此時ニ際シテ英國ト一層親交ナル提携ヲ畫スルハ或ハ反テ我邦ノ威嚴ニ影響スルコトナキヲ保セザルヲ記憶セラレヨ。

三、貴電中日本ノ孤立ヲ憂慮セラルヽノ形跡アリ。然ルニ現今日本ガ歐洲ノ外交場裏ニ博シ得タル地位名聲ニ照顧シテ觀察ヲ下ストキハ、反テ一方ニ於テ我等ト接觸スルノ慮アル諸國ト親密ナル協和ヲ有シナガラノ孤立ハ決シテ望マシカラザル狀態ニ非ザルコトヲ記憶セラレンコトヲ希望ス。

四、余ハ恰モ露國外務大臣ヨリ露國ノ希望ヲ確報シ來ルベキ旨ノ通知ニ接シタリ。故ニ晩クモ十二月十六日ニハ如何ナル基礎ヲ以テ露日協和ヲ成立セシメ得ベキヤニ關シ正確ニ報知シ得ベシ。露西亞ガ吾レニ承認スルニ朝鮮ニ於ケル自由行動ヲ以テスルコトハ、既ニ今日ト雖モ之ヲ報知シ得ルナリ。露國外相ガ前記日附ヲ以テ余ニ通牒セントスル所ハ右ニ對スル露國ノ交換的希望ヲ指スニ過ギザルナリ。

本電報ハ山縣侯及井上伯ニ示サレヨ。

（參拾九）獨逸皇帝ウヰリアム二世陛下ニ謁見ノ記

明治三十四年十二月十四日ポツダム離宮ニ於テ

明治三十四年十二月十四日午前十一時、豫メ宮內省ヨリ通知セル所ニ從ヒ、伊藤侯爵都筑馨六氏ヲ伴ヒ、獨逸皇帝陛下ニ謁見ノ爲メ伯林ポツダム停車場ニ赴カル。當日ハ謁見ノ數甚ダ多ク井上特命全權公使モ侯爵ト共ニ謁見セラルベキ豫定ナルノミナラズ、清國公使コロンビヤ國公使モ亦謁見ノ爲メ同時刻ニ同停車場ニ來レリ。午前十一時五分發車、同行者ハ前記諸氏ノ外ニ外務大臣リヒトホーヘン男、式部次長兼外交官紹介官フォン、デム、クネーゼベック氏ナリキ。車輛ハ宮中ヨリ特ニ差遣ハサレタルモノニシテ、侯爵ノ爲メニ一臺、他ノ公使等ノ爲メニ更ニ一臺ノ準備アリ。外務大臣以下他ノ諸公使ハ初メ第二ノ車輛ニ投乘セルモ、恐ラクハ外務大臣ノ都合ニ依リシモノカ後ニ來リテ侯爵ト同乘セリ。十一時四十五分ウヰルトバルク停車場ニ下車セルニ、宮中ヨリ差遣ハサレタル馬車五臺アリ、侯爵ト外務大臣トハ第一ノ馬車ニ同乘シテ宮中ニ向ハル。宮中ニ至リ待ツコト暫クニシテ謁見ノ間ニ至ル。侯爵以下遠方ヨリ敬禮ヲ行ヒシニ皇帝ハ徐ロニ前進シ來ラレ、

皇帝　閣下ハ先年朕ガ祖父ノ治世中ニ當國ニ遊バレシ趣ナレドモ、當時朕ハ幼沖ニシテ專心軍事ノ修業中ナリシヲ以テ、閣下ト相見ルヲ得ザリシハ遺憾トセシ所ナリ。爾來朕ハ閣下ノ如ク有名且有識ナル大政治家ト會見スルヲ得タルハ朕ノ最モ喜ビ且誇ル所ナリ。閣下ハ實ニ國家ノ再興者ナルガ如シ。閣下ノ國家ニ對スル地位ハ恰モ當國ニ於ケルビスマークノ如ク、又日本國民ノ閣下ヲ敬慕スルモ亦當國民ノビスマークニ於ケルガ如キモノアルヲ以テ、朕ハ本日閣下ヲ日本ノビスマークトシテ茲ニ歡迎ノ意ヲ表スルヲ得タルハ朕ノ深ク喜ブ所ナリ。

トテ皇帝ハ親シク侯爵ニ坐ヲ賜ヒ、相對シテ種々ナル談話アリ、侯爵ノ旅行北清事件日本海陸軍ノ精鋭士官ノ俊秀等ニ關スルコト、ワルデルゼー將軍ノ日本ニ厚遇ヲ受ケタルコト、及ビ之ニ對シテ陛下ノ大ニ滿足セラルヽコトヲ　日本皇帝陛下ニ奏上スベキコトヲ語ラレタリ。侯爵ハ日本軍隊ノ規律竝ニ組織ハ獨逸ニ則リタルモノニシテ、我士官ノ常ニ當國ニ於テ懇切ナル待遇ヲ受ケ、又文

武百官並ニ學生等ノ當國ニ在リテ周匝ナル教育ヲ受ケ學ブ所甚ダ多キコトニ關シテ謝辭ヲ述ベラレタルニ、皇帝ハ順良嚴正ナル教育ヲ受ケ得ルノ能力無キモノハ、如何ニ之ヲ教育スルモ到底其目的ヲ達スル能ハズ。天然ノ性質サヘアラバ良ク戰鬪スル者ハ決シテ得難キニアラザレドモ、良ク軍隊ヲ爲スノ能力ニ至リテハ自ラ其素養無カル可カラザル旨ヲ語ラレ、北里博士ノ醫術ニ於ケル、田中正平氏ノ音理學ニ於ケル例ヲ引照シテ日本人ノ性質卓絕シタルヲ稱揚セラレタリ。

其レヨリ皇帝ハ極東ヨリ歸來セル獨逸士官ノ悉ク日本ヲ賞讃スルコト、日本婦人ノ婉麗ナルコト、ワルデルゼー將軍ガ日本ノ茶屋女ヨリ靴ヲ脫ガセラルヽ寫眞ヲ皇帝ヨリ將軍ノ夫人ニ送リタルコト、有栖川宮殿下及同御息所ノ溫厚婉麗ニシテ、皇帝ハ其賞讃者ノ一人ナルコト、閑院宮殿下ノ御勇壯ナルコト、及皇太子殿下ノ御婚儀ノ事等ヲ語ラレタリ。茲ニ於テ侯爵ハ皇孫御出產ノ旨ヲ述ベラレタルニ、皇帝ハ日本　皇室ノ爲メニ最モ賀スベキコトナリト祝セラレ、且又皇弟（ハインリッヒ親王）二度迄モ日本ニ遊ビタルコト、及皇帝自身モ切ニ日本ニ遊ビ度キ念アリト雖モ、現今ノ地位之ヲ許サヾルヲ遺憾トスル旨ヲ侯爵歸國ノ上ハ日本國民ニ知ラシメラレ度シト語ラレタリ。

終ニ臨ンデ皇帝ハ侯爵ニ對シ「朕ハ祖父ガ閣下ニ呈シタル勳章ニ添フルニ金剛石ヲ以テシ、閣下ノ紀念ニ供セント欲ス」ト云ハレテ勳章ヲ親授セラレ、次ギニ都筑氏ニ向ハレ「貴君ニハ赤鷲二等ノ勳章ヲ呈セント欲ス」トテ、之レ亦手ヅカラ渡サレタリ。茲ニ於テ外務大臣ハ都筑氏ハ獨逸語ヲ良クスル旨上奏シタルニ、陛下ハ「然ラバ當地ニ於テ勉强シタルカ」ト問ハレ、都筑氏ハ「單ニ勉强セシノミナラズ、既ニ再度迄拜謁ノ榮ヲ有セリ」ト答ヘタルニ、陛下ハ「夫故ナレバコソ先刻ヨリ見タル樣ナル顏ナリト思ヒ居タリ」ト述ベラレ、一二談話ノ末「貴下ノ同國民一般ニ告グルニ朕ハ日本　皇帝ノ侯爵ノ如キ良臣ヲ有セラルヽコトニ關シ　陛下ヲ羨ミ居ル旨ヲ以テセヨ」ト語ラレタレバ、都筑氏ハ「勅語ノ趣獨リ侯爵ノ爲メニ無上ノ名譽ナルノミナラズ、國家ノ爲メ名譽ナルガ故ニ必ズ御下命ノ如ク致スベシ」ト奉答シタリ。茲ニ至リ一同御前ヲ退ク謁見時間凡ソ三十五分間。

（四拾）　珍田外務總務長官ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十五日於伯林接電

內閣總理大臣外務大臣共ニ葉山ニ在リ、小官ハ十二月十四日附閣下ノ電報ヲ總理大臣ニ送附センコトス。不取敢小官ニ於テ左ノ說明ヲ爲スヲ許サレタシ、十二月十三日附總理大臣ノ電報中ニ用ヒタル「露日同盟」ハ飜譯ノ誤ナリ、日本語ノ原文ハ「露日協和」ノ意ナリ。

（四拾壹）　露國外務大臣ヨリ伊藤侯爵宛書翰

明治三十四年十二月十七日伯林ニ於テ露國大使ヨリ侯爵ニ手渡

拜啓、陳者閣下ノ聖彼得斯堡滯在中、貴我談話ノ要領ハ速ニ之ヲ我ガ主君ニ奏聞シ、且又閣下ガ露日間ニ於ケル新協定ノ基礎トナリ得ベキモノトシテ摘要セラレタル四點ヲモ均シク皇帝陛下ニ奏上スルヲ怠ラザリシ儀ニ御座候。次テ勅命ニ隨ヒ本官ハ本問題ニ關シ主務諸大臣ト協議シ、本日ヲ以テ審議ノ結果ヲ閣下ニ報道スルヲ得ルニ至リタルハ本官ノ幸福トスル所ニ御座候。右ハ閣下モ本官モ均シク貴我兩國ノ幸福ノ爲メニ其ノ成立ヲ祈リ居ル協商ヲ容易ナラシムルコト、希望仕候。

本書ニ添ヘタル草案中、初メノ三點ハ第二點ノ終リニ於ケル「互ニ」ノ數字ヲ刪除シタル外閣下ノ提案ニ對シテ毫モ修正ヲ加ヘタル處無之、原案ノ儘ニ致置候。右數字ハ寧ロ刪除シタル方便宜カトモ被存候。若シ閣下ニシテ第二點及第三點ノ劈頭ニ於テ「日本ハ何々ヲ約ス」ノ代リニ其原案即チ「相互保證」ノ語ヲ用ヒ度シトノ御希望ナラバ、本官等ハ之ニ對シ別ニ異存無之候。

第四點中「工業上及商業上」ノ前ニ在ル「政治上」ノ一語ヲ刪除スルハ望敷コトニ御座候。該語ハ露日兩國ガ互ニ約定シテ保證セントスル朝鮮獨立ノ原則ヲ毀傷スルノ恐有之候。

加之日本ハ朝鮮ニ於テ助言ニ依リ、且臨機必要ノ場合ニ於テハ軍事的干渉ニ依リ、其主優ナル勢力ヲ行使セントスルニ當リ、豫メ之ニ關シテ露西亞ト協議スベキコトヲ規定シテ以テ此ノ條文ノ不備ヲ補フタル方穩當ト被存候。

本條約ニ依リテ日本ノ取得スベキ朝鮮ニ於ケル軍事的干渉ノ權利ニ關シテハ、閣下ノ本官ニ對シテ御明言被下候條件ヲ明記セザル可カラズト存候。卽チ朝鮮ニ派遣スベキ日本ノ兵數ハ常ニ嚴正ニ形勢ノ必要ニ比例スベキコト竝ニ該軍隊ハ其ノ使命ヲ果シタル後直ニ之ヲ召還スベキコトニ御座候。加之凡テ將來ニ於ケル紛擾ヲ避ケント欲セバ、露西亞ノ國境ニ沿ヒテ豫メ決定シ置クベキ地帶ノ境界ハ、日本軍隊ニ於テ之ヲ踰ヘザルベキコトヲ約定セザル可カラズト存候。此等ノ考案ハ悉ク本書附添ノ草案第五條ニ規定致置候。

第六條ニ關シテハ露西亞ガ朝鮮ニ於テ日本ニ承認セントスル重大ノ權利ニ對スル些少ノ報酬ヲ示スニ過ギ不申候。畢竟千八百九十八年西男爵ヨリローゼン男爵ニ交付シタル覺書及千九百年聖彼得斯堡ニ於テ小村氏ノ提議シタル所ニ依リテ、既ニ承認セラレタル原則ヲ再演シタルニ過ギ不申候。

日本政府ニ對シテ表示シタル露國政府ノ眞實ノ好意ハ、閣下ニ於テ適當ニ御推慮アランコトヲ希望致候。蓋シ上記ノ基礎ニ從テ永續ノ見込アル協定ヲ商議スルニ同意シ、以テ兩帝國間ニ起ルベキ誤解ノ原因ヲ排除シ、且以テ兩國ノ最モ明白ナル利益關係ニ適スベキ誠實和親ノ關係ヲ確立セシメントスルハ、日本政府ニ對シ眞實ニ好意ヲ示サント欲スルニ外ナラズト信ジ申候。

本官ハ先ズ閣下ノ返翰ヲ待テイスボルスキー氏ニ必要ノ訓令ヲ與フルコトニ致度ト存居候。同氏ハ本官ノ訓令次第直ニ東京ニ於テ協定ノ大綱ニ基キ商議ヲ開始シ得ベキコト、存候。終リニ臨ンデ本官ハ侯爵ニ對シテ敬意ヲ表シ申候。謹言

千九百一年十二月一日（西歷同月十四日）

聖彼得斯堡ニ於テ

伯爵　ラムスドルフ

伊藤侯爵殿

朱字（ゴヂック）伊藤侯爵ノ摘要書

黑字（明　朝）ラムスドルフ伯爵ノ草案

第一　朝鮮ノ獨立ノ相互保證

第一　朝鮮ノ獨立ノ相互保證

第二　朝鮮ノ領土ハ其ノ如何ナル部分ト雖モ互ニ軍略上ノ目的ヲ以テ之ヲ使用セザルベキ旨ノ相互保證

第二　朝鮮ノ領土ハ其ノ如何ナル部分ト雖モ軍略上ノ目的ヲ以テ之ヲ使用セサルベキ旨ノ相互協約（又ハ日本ハ朝鮮領土ノ如何ナル部分ト雖モ軍略上ノ目的ヲ以テ之ヲ使用セザルコトヲ約ス）

第三　朝鮮海峽ノ自由交通ヲ危クスルガ如キ軍事的設備ハ朝鮮沿岸ニ一切之ヲ爲サザルベキ旨ノ相互保證

第三　朝鮮海峽交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ爲サヾルベキ旨ノ相互協約（又ハ日本ハ朝鮮海峽交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ爲サヾルコトヲ約ス）

第四　政治上工業上及商業上ノ關係ニ就テハ露西亞ハ日本ニ承認スルニ朝鮮ニ於ケル自由行動竝ニ朝鮮ヲシテ善良ナル政府ノ義務ヲ盡サシムル爲メニ助言及援助ニ依リ朝鮮ヲ助クルノ專權ヲ以テスルコト但シ右ハ內亂其他之ニ類シテ朝鮮ト日本トノ平和的關係ヲ亂スノ恐アル事變ヲ鎭定スル爲メニ必要ナル範圍內ノ軍事的援助ヲモ包含スルモノトス

第四　露西亞ハ日本ニ承認スルニ左ノ事項ヲ以テス卽チ工業上及商業上ノ關係ニ就テハ日本ハ朝鮮ニ於テ行動ノ自由ヲ有スルコト且又日本ハ豫メ露西亞ト協議シタル後單獨ニ助言ヲ以テ朝鮮ヲ助ケ以テ凡ソ善良ナル政府ニ屬スル義務ヲ盡サシムルコトニ就キ主優ナル權利ヲ有スルコト但シ右ハ內亂其他凡テ朝鮮ト日本トノ平和的關係ヲ亂スノ恐アル事變ヲ鎭定スル爲メニ必要ノ限度ニ於ケル軍事的援助ヲ包含スルモノトス

第五　從來ノ協定ハ此ノ協和ニ依リテ凡テ消滅スルコト

第五　日本ハ前條（第四條）ニ規定シタル場合ニ際シ必要缺クベカラザル兵數ノ外ハ之ヲ派遣セザルコト且又派遣隊ニ於テ使命ヲ果シタルトキハ直ニ之ヲ召還スベキコトヲ約ス

又露西亞ノ國境ニ沿ヒテ之ニ接近シタル地帶ノ區域ヲ豫メ明確ニ議定シ置キ日本軍隊ニ於テハ決シテ其ノ境界ヲ踰ヘザルベキコトヲ約定ス

第六　日本ハ支那帝國ノ領土中露西亞ノ國境ニ接スル部分ニ於テハ露西亞ノ主優ナル權利ヲ承認シ且該地方ニ於テハ一切露西亞ノ行動ノ自由ヲ妨害セザルコトヲ約ス

第七　從來ノ協定ハ本協定ニ依リテ凡ソ消滅スルコト

（四拾貳）　伊藤公爵ヨリ桂内閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月十七日於伯林發電

只今ラムスドルフ伯約束ノ書翰ニ接セリ。聖彼得斯堡出發ニ先チ余ハ彼我私人的對談ノ結果ト認メ得ベキモノヽ摘要書ヲ伯ニ渡シ、彼ノ承認ヲ促シ置ケリ。其ノ摘要書ハ如左、

（摘要書全文略之）

右摘要書ニ對シ露西亞ノ着眼點ヨリシテ提議シタル修正案ヲ佛文ヨリ直譯的ニ英譯スレバ左ノ如シ。

(イ) 第一點ニハ變更ナシ。

(ロ) 第二點　ラムスドルフ伯ハ「相互保證」ノ後ニ括弧ヲ設ケテ「又ハ日本ハ云々ヲ約ス」ノ一句ヲ挿入セリ、伯ハ又「互ニ」ノ一句ヲ削除セリ。

(ハ) 第三點　朝鮮海峽交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ爲サヾルベキ旨ノ相互協約（又ハ日本ハ朝鮮海峽交通ノ完全ナル自由ヲ危クスルノ性質ヲ有スル軍事的措置ハ朝鮮沿岸ニ於テ一切之ヲ爲サヾルコトヲ約ス）。

(ニ) 第四點　露西亞ハ日本ニ承認スルニ左ノ事項ヲ以テス、卽チ工業上及商業上ノ關係ニ就テハ日本ハ朝鮮ニ於テ行動ノ自由ヲ有スルコト且又日本ハ豫メ露西亞ト協議シタル後單獨ニ助言ヲ以テ朝鮮ヲ助ケ以テ凡ソ善良ナル政府ニ屬スル義務ヲ盡サシムルコトニ就キ主優ナル權利ヲ有スルコト、但シ右ハ內亂其ノ他凡テ朝鮮ト日本トノ平和的關係ヲ亂スノ恐アル事變ヲ鎭定スル爲メニ必要ノ限度ニ於ケル軍事的援助ヲ包含スルモノトス。

右ノ外ラムスドルフ伯ハ新ニ左ノ二點ヲ加ヘタリ。

(ホ) 第五點　日本ハ前條ニ規定シタル場合ニ際シ必要缺クヘカラサル兵數ノ外ハ之ヲ派遣セサルコト、且又派遣隊ニ於テ使命ヲ果シタルトキハ直ニ之ヲ召還スヘキコトヲ約ス。

(ヘ) 第六點　日本ハ支那帝國ノ領土中露西亞ノ國境ニ接スル部分ニ於テハ露西亞ノ主優ナル權利ヲ承認シテ其ノ境界ヲ踰ヘサルヘキコトヲ約定ス。

ヲ承認シ且該地方ニ於テハ一切露西亞ノ行動ノ自由ヲ妨害セサルコトヲ約ス。

(ト)　原案第五點ニハ變更ナク露西亞案ノ第七點トナリテ存ス。

ラムスドルフ伯ハ曰ク、初メノ三點ハ毫モ變更スル所ナシト、第四點中伯ハ獨立ノ原則ヲ毀傷スルノ恐アリトシテ「政治上」ノ一語ヲ刪除シタリ伯ハ又豫メ露西亞ト協議スヘキ旨ノ原則ヲ提議シタリ、第六條ニ關シテハ彼ハ之ヲ以テ千八百九十八年西男爵ヨリローゼン男爵ニ交付シタル覺書及千九百年聖彼得斯堡ニ於テ小村氏ノ提議シタル所ニ依リテ承認セラレタル原則ニ外ナラズト論ズ。

余ノ意見ニ依レバ、第四條ニ豫メ露國ト協議スルノ原則ヲ加フルコトハ不同意ナリ。第五條ノ末文ハ相互的ノモノトナサヾル可カラズ。即チ他國ノ軍隊モ亦朝鮮國境附近ニ來ラザルコトヲ以テ該條ニ同意スルノ必要條件トナスベキ旨ヲ附加セザルベカラズ。又第六條ハ茫漠ニシテ廣義ニ失ス、然レドモ余ノ見ル所ニ依レバ、日本政府ニシテ營商議ニ着手セバ、是等ノ細目ハ凡テ日本ニ滿足ナル樣協定シ得ベシト確信ス。ラムスドルフ伯ハ余ノ意見次第ニテ該草案ヲ基礎トシテ東京ニ於テ兩政府間ノ正式商議ヲ開クベキコトヲ申込タリ。彼ハ又該案ハ皇帝ノ裁可ト內閣ノ同意ヲ經タリト云ヘリ。右ニ對シ余ハ第四條ノ修正第六條ノ文意其他細目ニ關シ多少ノ時日ヲ費シテ熟慮スルニアラザレバ余ノ私見ヲ明カニ表白スルコト能ハザル旨返信セントス。

其ノ間ニ貴下ノ熟慮ヲ切望スルモノアリ、卽チ今回ノ機會ヲ逸シ、余ノ今日マデ往復シタル音信ヲ遮斷セバ、或ハ恐ル好機ノ再來近キニアラザルベキコト之レナリ。若シ之ニ反シ余ニ望ムニ右音信ヲ繼續スルコトヲ以テスルトナラバ、貴下ハ他ノ方面ニ於テ之ガ爲メニ必要ナル保留ヲ爲サザル可カラズ。余ハ貴下ノ返電ヲ待望ス、本電報ヲ元老ニ示サレヨ、余ハ十二月十七日ブラツセルスニ向テ出發ス。

(四拾參)　伊藤侯爵ヨリ杉村在露臨時代理公使宛電報

明治三十四年十二月十七日於伯林發電

余ハ只今ラムスドルフ伯ノ書翰ヲ受取リタレドモ、今夕ブラツセルスニ向テ出發スルニ付キ、當地ヨリ伯ニ返翰ヲ送ル能ハズ。

(四拾四)　伊藤侯爵ヨリ林在英公使宛電報

明治三十四年十二月十七日於伯林發電

英政府ト商議ノ現狀ヲブラツセルスニ宛テ余ニ報知セラレヨ。

（四拾五）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月十七日午後一時倫敦發電
同日午後七時五分ブラッセルス着電
十二月十八日ブラッセルス到着ノ際松方代理公使ヨリ接受

該問題ハ十二月十九日ノ閣議ニ上ルベシ、十二月二十日返答ニ接スルヲ豫期ス。

（四拾六）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十一日ブラッセルスニ於テ接電

內閣會議ノ後、ランスダウン侯ハ別條第一ハ外交文書ノ交換ニ依リテ之ヲ規定シタル方得策ナルベキコト、並ニ別條第三ハ協議ノ上多少文字ヲ改メ、協約ノ序文中ニ之ヲ挿入スベキコトヲ提議シタリ。如斯キ事項ニ關シテハ英國政府ハ斷然別條第二ニ反對ナリ。

小官ハ日本政府ニ右ノ提議ヲ電報シタリ。

（四拾七）　桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十一日ブラッセルスニ於テ接電

（本電報ハ暗號ニ不明ノ箇所在リ譯譯隨テ不完全タルヲ免レズ　譯者誌）

十二月十七日伯林發貴電ヲ受領セリ（此處不明）利害衝突ノ恐アル點ニ就キ、露西亞ト現在ノ協商ニ比シテ一層好良ナル協和ヲ來サンガ爲メニ、貴下ガ敏腕ヲ以テ盡力サレタルコトニ對シ、本官ハ最モ眞誠ナル感佩ノ意ヲ表スルモノナリ。本官ハ本問題ニ關スル貴下ノ希望ニ對シテ切ニ同情ヲ寄セ、力ノ及ブ限リ貴下ノ斡旋ノ進行ヲ助クルコトニ勉ムベシ。乍去他ノ一方ニ於テ本官ノ記臆セザルベカラザルモノアルハ、卽チ滿洲問題ノ危機ニ迫リシ以來、我ガ政策ノ方針ニ依リテ、帝國ハ終ニ諸外國ニ對シテ責務ヲ負フニ至リタルコト之レナリ。而シテ此責務タルヤ、帝國ノ信義ヲ重ンズル上ニ於テ全然無視スルコト能ハザルナリ。該政策ハ閣下ノ內閣ノ時ニ始マリ、本官ノ誠實ニ其ノ方針ヲ繼グハ卽チ以テ明カニ本官モ亦其良策ナルコトヲ確信スルノ證タルニ過ギズ。全然時局ノ現狀ヲ明カニシ、且本官ノ難シトスル點ヲ詳ニセント欲セバ、先ヅ本問題ノ沿革ニ就テ閣下ノ注意ヲ乞フノ必要アリ。閣下ハ記臆セラルヽナラン、本年二月當時係屬中ノ滿洲商議ニ關シ、日本政府ハ嚴然支那ニ警告シ、若シ彼ニ於テ各列國ト別約ヲ締結シ、以テ各國ニ與フルニ專有的若ハ特別的ノ領土上若ハ經濟上ノ便益ヲ以テスルコトアラバ、是レ卽チ淸國領土ノ保全ニ大ナル危害ヲ加フルモノナリト論ジタリ。然リ而シテ日本政府ノ起案ニ基キ、大不列顛獨逸北米合衆國伊太利及墺地利匈牙利ノ諸國モ亦支那ニ對シテ同樣ノ警告ヲナシ、而シテ如斯キ聯合行動ノ結果トシテ當時考案中ノ

滿洲條約ハ終ニ失敗ニ歸シタリ。本官モ亦此政策ヲ追行シテ現時ノ滿洲商議ニ關シ（此ノ所不明）支那ニ忠告スルニ、他國ト共同シテ動作スル場合ハ兎ニ角、然ラザレバ決シテ他國條約上ノ權利ヲ傷ケ、又ハ清國ノ主權ヲ毀傷スルノ恐アル協定ヲ爲スベカラザルコトヲ以テセリ。然リ而シテ英米兩國政府モ亦帝國ノ建言ニ基キテ同樣ノ忠告ヲ爲シタリ。此聯合忠告モ亦現商議ノ進行ニ大ナル影響ヲ及ボセリ。加之日本政府ハ屢々明白ニ且無條件ニ斷言シテ曰ク、支那領土ノ保全及同帝國ニ於ケル均等ノ機會ハ帝國ノ原則的主義ナリト、而シテ此主義タルヤ、帝國ノ加盟シタル英獨協商ノ基礎ヲ成スモノナリ。獨逸ハ牽强ノ解釋ニ基キ、滿洲ヲ以テ該協商ノ範圍外ニ置キタレドモ、日本ハ彼ト同一轍ニ出ル能ハザルナリ。蓋シ帝國政府ハ其見ル所ニ依レバ、滿洲ハ該協商ノ範圍內ニ在リト明言シタレバナリ。故ニ假リニ同盟問題ヲ全然度外ニ置テ論ゼンニ、若シ帝國ニシテ朝鮮ニ於ケル露國ノ讓步ニ報センガ爲メ、彼ト締結スルニ滿洲ニ關シテ帝國過去ノ態度ト一致セザル協定ヲ以テスルコトアラバ、之レ卽チ帝國ノ威嚴ヲ損シ、支那ノ信用ヲ失ヒ、併セテ從來帝國ノ主唱シタル主義ヲ忠實ニ維持スル諸外國ニ信用ヲ失フ所以ナリトス。露西亞ノ反對提案第六條ハ、帝國過去ノ態度ト一致セザルハ勿論、ラムスドルフ伯ハ該條ヲ以テ千八百九十八年ノ西男ノ覺書及千九百年ノ小村壽太郎氏ノ提議ヲ以テ承認シタル原則ト調和スト主張スト雖モ、爾來形勢ハ一變セリ、而シテ日本ノ政策ハ單ニ事局ノ進行ト伴ヒタルニ過ギズ。且又本官ノ以上說明セント努メタルガ如ク、日本ノ諸外國ニ對シテ多少ノ責ヲ負フニ至リシモ亦其ノ以後ニアリトス。加之西男ノ覺書及小村壽太郎氏ノ提議（此處暗號拾壹字不明）前者ハ閣下ノ首相奉職中、後者ハ山縣侯內閣ノ時ニ爲シタルモノニシテ、兩者共ニ交互的基礎ヲ以テ起案セルモノナリ。換言セバ滿洲ニ於ケル露西亞ノ位置ハ朝鮮ニ於ケル日本ノ位地ト同等ナルベキコトヲ要求セリ。然ルニ今回ノ草案ハ全然右基礎ヲ無視セリ。右諸觀察點ニ關シテハラムスドルフ伯ニ於テハ毫モ誤解シ居ルベキノ筈ナシ。本官ハ本問題ノ前陳ノ狀態ニ關シ、成ルベク速ニ且詳細ニ閣下ノ意見ヲ本官ニ通報セラレンコトヲ望ム。如何トナレバ本官ハ本問題ニ關シ右ノ如キ所信ヲ持シ居ルヲ以テ、前陳貴下ノ意見ヲ附セズシテ單ニ十二月十七日附ノ貴電ノミヲ　陛下ニ奏聞シ、內閣若クハ元老ニ交付スルハ貴下ノ爲メ不得策ニシテ、折角我邦ノ爲メニ斡旋セラレタル勞ニ對シ心外ナリト感ズレバナリ。故ニ本官ハ貴電ヲ本官ノ手元ニ差止メ置キテ、傍ラ速ニ貴答ニ接センコトヲ希望ス。本官ハ露西亞ト協和スルコトニ反對スル者ニアラザルコトハ貴下モ亦了知セラルヽナラン。本官ハ却テ如斯キ協和ノ成立ヲ眞實ニ贊成ス。然レドモ本官ノ考フル所ニ依レバ、該協和ハ帝國ノ他國ニ對シテ負フ所ノモノト調和セザルヘカラズ。上陳請求ノ貴答ニ接シタル上ニテ、本官ハ露西亞ノ反對提案ノ條件ニ關シ多少意見ヲ陳述スルコトアルベシ。

（四拾八）　伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月二十二日ブラツセルスニ於テ發電

十二月二十一日ノ貴電ニ依リテ察スルニ、貴下ハ余ヲ誤解セルノ恐少カラズ。貴下ニシテ若シ九月十一日貴邸ニ於ケル我等ノ會話ヲ追想セバ、朝鮮ニ關スル余ノ目的ハ其ノ現狀ヲ變ジテ帝國ノ利益ヲ進メ、且吾レニ取得スルニ同國政治ニ干與スル行動ノ自由及專權ヲ以テスルニアルコトハ貴下モ記臆セラルベシ。露西亞ヲシテ前陳我目的ヲ承認セシメントセバ、吾モ亦幾分カ滿洲ニ於ケル後ノ行動ノ自由ヲ承認スル覺悟ナカルベカラズ。露西亞ハ其ノ占領以前ニ享有セシ行動ノ自由ヲ以テ滿足スルモノナルカ、將タ又撤兵後ハ從前ニ比シテ一層多キヲ要求スルモノナルカハ、實際商議ヲ開始スルニアラザレバ之ヲ確知スルコト能ハズ。余ノ目的トスル所ハ、卽チ占領以前ニ露西亞ガ該地方ニ於テ實際享有シタル自由行動、竝ニ撤兵後ニ至リ鐵道保護ノ處置等ノ如ク、帝國ノ諾否如何ニ拘ハラズ實際露西亞ノ享有スルニ至ルベキ自由行動ニ限リ、之ヲ同國ニ讓歩的ニ承認セントスルニアリシナリ。約言スレバ余ノ目的ハ交互的基礎ノ協商ニ比シテ一層日本ノ爲メ利益トナルベキ狀勢ヲ作成セントスルニアリテ、萬已ムヲ得ザル場合ニ至テ卽チ最下策トシテ交互的基礎マデ讓歩スルノ覺悟ナリキ。貴下或ハ今回露西亞提出ノ草案ヲ見テ、前陳余ノ目的トスル所ト大差アルガ如ク感ゼラレタルナキヲ保セザレドモ、歐洲ニ於ケル露西亞政治上ノ必要、其ノ財政ノ情況、其他種々ノ事情ニ依リテ余ハ露西亞政府ヲシテ愚見ノ如ク讓歩セシムルコトヲ得ベシト信ズルニ至レリ。然リ而シテ將來此ノ目的ヲ遂行スルコトニ就テハ余ノ大ニ重キヲ置ク所ナリトス。如何トナレバ假リニ一方ニ於テ朝鮮ノ現狀ヲ變更シ、又ハ之ヲ維持スルコトニ關シ英國ト協和ヲ締結スルモ、他ノ一方ニ於テ同一問題ニ關スル日露協商ノ里程標ヲ進ムルニアラザレバ、毫モ帝國ニ益スル所ナカルベケレバナリ。余ハ最早倫敦行ヲ延期スル能ハザルヲ以テ、明後日同地ニ向テ出發スベシ。

（四拾九）　伊藤侯爵ヨリ露國外務大臣宛返翰

明治三十四年十二月廿三日ブラツセルスニ於テ發電

拜復、十二月一日（西曆同月十四日）附尊翰ハ漸ク同十七日午後伯林ニ於テ落掌仕候處、前以テ同日ヲ以テ同市出發ノ期日ト定メ置候次第ニテ、終ニ今日迄返翰ヲ遲延スルノ已ムヲ得ザルニ至リ候ハ拙者ノ遺憾トスル處ニ御座候。尤モ其間ニ於テ急速ノ遊歷中惚忙之際、事情ノ許ス限リ可成綿密ニ貴案ヲ攻究致候處、豫テ差上置候摘要書ニ對シテ、閣下ノ加ヘラレタル修正ハ頗ル重大ナルモノニシテ、充分ニ其影響スル所ヲ考察セントセバ先ヅ深ク立入テ研究スルノ必要アルコトヲ御通知致サヾルヲ得ザルハ遺憾ノ至ニ存候。乍去右文書ヲ拜讀シテ得タル未悉ノ感ヲ不取敢閣下ニ報導致候。且又貴國當路者ノ調和的意志ニ關シテハ、毫モ疑ヲ挾ム處無之候得共、該草案ノ條文ニテハ未ダ容易ニ兩國間ニ永續スベキ實際的協商ヲ締結スルノ見込ノ立タザルコトヲ告白致候。閣下ノ草案

第六條ニ包含シタル露西亞ノ反對要求ハ遠大茫漠且廣義ニ失シ、拙者ヲシテ第一ニハ露政府ノ確然タル眞意該地方ニ於テ如何ナル方策及ビ措置ヲ執ラントスルニアルカヲ知悉スルニ苦マシメ、又第二ニハ露西亞ノ勢力ヲ行使セント欲スル領土ノ確然タル區域ニ關シ、確乎タル考案ヲ抱クコト能ハザラシメ候。而已ナラズ、先般會談ノ際、拙者ガ明瞭ニ考慮ヲ煩ハシテ閣下ノ確信ヲ招キ、從テ閣下ト拙者トノ間ニハ既決ノ問題ナリト存居候點モ、亦第四條ニ對スル閣下提出ノ修正ニ依リテ再ビ疑問ト成去申候。閣下ノ第四條ニ挿入セント欲セラル、豫メ協議若クハ共同ノ原則コソ、恰モ大ニ極東ノ强固ナル權衡ヲ危クスルモノナリトシテ拙者ノ熱心ニ排斥致シタル處ニ御座候。朝鮮ニ於ケル日本專有ノ自由行動ヲ措キテ、他ニ親密ナル協和ノ基礎アルヲ見ズト論ジタルハ閣下ノ御記憶ニ存スル事ト存候。然ルニ閣下ノ草案ヲ一讀シ、該案ハ恰モ我邦ヲシテ被委任者ノ地位ニ立タシメ、或ハ又兩國間ニ豫メ協議シタル合意ヲ執行スル者ノ地位ニ下ラシメントスルモノナリトノ初感ヲ抱キ候ハ、拙者ノ甚ダ遺憾トスル處ニ御座候。一見シタル處ニテハ、豫メ協議スルコト、專有ノ自由行動トハ互ニ相容レザル反對ノ思想ト被存候。從テ第六條ニ於テハ注意シテ此ノ自家撞着ヲ避ケンコトヲ勉メラレタルモノト認メラレ候。加之左ノ點ニ關シテモ亦閣下ノ注意ヲ促シ度ト存候。草案ニ依レバ露西亞ハ日本ノ自由行動ヲ特定ノ範圍ニ限リテ承認シ、而カモ之ニ關シテ第二條第三條第五條ニ列記シタル如キ嚴重ナル條件ヲ附セントスル次第ニ御座候。然ルニ飜テ其要求スル處ヲ見レバ、日本ヲシテ無條件ニ露西亞ニ承認スルニ何事ヲ問ハズ凡テ政治的權能ヲ其ノ極點マデ行使シ得ベキ自由行動ノ權ヲ以テセシメントスルニ有之候。啻ニ之ニ止マラズ、日本ノ活動範圍ノ領域ハ嚴格ニ之ヲ限定シ、而モ之ニ附スルニ第五條ニ明記スルガ如キ制限的ノ條件ヲ以テシタルニ拘ハラズ、露西亞ノ活動範圍ノ領域ニ關スル規定ヲ見レバ、將來伸縮自在ノ解釋ノ餘地ヲ存シタル字句ヲ用ヒテ起草被致居候。要スルニ前記ノ初感其他茲ニ列擧スルノ必要ナキ諸點ハ、拙者ヲシテ閣下ノ草案ヲ以テ協商締結ニ關スル將來ノ商議ノ基礎トシテ日本政府ニ建議スルノ適否ニ就キ頗ル疑惑ヲ抱カシメ申候。拙者ノ見ル所ニ依レバ、永續シ且公平ニシテ兩締約國ニ與フルニ殆ンド均等ノ利益ヲ以テスルモノタラザルベカラズト存候。事情如斯ニ御座候間、本草案ニ對シテ拙者ノ確說ヲ表白スルニ先チ、更ニ一層周匝綿密ナル攻究ヲ爲スヲ御許容被成下度候。又拙者ノ歸途ニ相就キ候期日モ段々切迫致候間、或ハ東京到着以前ニ再ビ閣下ニ書翰ヲ啓上スルノ暇モ無カルベキカト存候。此儀宜敷御含被下度候。不取敢閣下ニ御報道申上度儀ハ、卽チ貴國ノ有力家ハ日本ト和親協商ヲ結ビ、交誼ヲ厚クセントスルノ希望ヲ抱カル、コトヲ確信シテ歸途ニ上ルハ拙者ノ欣喜ニ堪ヘザル處ニ御座候。而シテ此希望タルヤ、勿論我邦ノ政治家ニ於テモ均シク抱キ候事ト信望致候次第ニ御座候。

拙者ハ此ノ機會ヲ利用シ、更ニ貴國ニ於テ受ケタル懇親優遇ニ對シテ深厚ナル謝意ヲ表シ、且又都合ニ依リ御親切ナル西伯利亞旅行ノ招待ニ應ズル能ハザルヲ頗ル遺憾トスル旨、閣下ヨリウキツ

テー閣下ニ御傳言被成下候樣御依賴申上候。謹言

終ニ臨ンデ拙者ハ伯爵ニ對シテ敬意ヲ表シ申上候。

千九百〇一年十二月二十三日

ブラツセルスニ於テ

侯爵　伊藤博文

ラムスドルフ伯爵殿

（五拾）桂内閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十八日於倫敦接電

十二月二十二日附ノ貴電ヲ見テ、本官ハ大ニ安心シタリ。本官ハ之ニ對シテ貴下ニ感謝ス。本官ハ先キニ貴下ノ着眼點ヲ充分了解セザリシヲ自認セザル可カラズ。朝鮮ニ關スル貴下ノ目的ハ本官之ヲ知悉スト雖モ、閣下ハ前電報中滿洲ニ付テ帝國ノ適度ニ爲シ得ベキ讓歩ニ關シ、毫モ說明セラル、所ナカリシヲ以テ、其邊ニ關シテハ朝鮮問題ノ如ク之ヲ知悉スルコト能ハザリシナリ。十二月十七日附貴電ニ依レバ、貴下ハ露西亞ノ反對提案ニ對スル批評攻擊ヲ三點ニ限ラレ、而シテ如斯キ細目ニ關シテハ帝國ニシテ唯商議ニ着手セバ滿足ナル結果ヲ得ベシト論ゼラレタリ。

故ニ本官ハ

第一　豫メ協議スルコトノ原則ヲ第四條ヨリ刪除シ

第二　第五條ノ末項ヲ相互的ニ規定シ

第三　貴下ノ茫漠ニシテ廣義ニ失スト評セラレタル第六條ヲ明確ニシ、且其ノ適用ノ範圍ヲ制限スルニ於テハ閣下ハ該反對提案ヲ以テ商議ノ基礎トナスコトヲ承諾セラル、ノ意ナラント推測シタリ

本官ハ帝國ヲシテ實著ナル政策ヲ遂行シ、諸外國ニ對シ信義ヲ保タシメント欲セバ、滿洲ニ關シテモ亦帝國ノ商議ヲシテ常ニ專有若クハ特有ノ領土上經濟上ノ利益ノ壟斷ハ之ヲ許サズ、且諸外國ノ條約上ノ權利ヲ侵害シ、或ハ支那ノ主權ヲ毀損スルノ條約ヲ許サズトノ大原則ニ從ハシムルコトヲ要スト信ジタリ。從テ本官ノ見ル所ニ依レバ、露西亞ノ反對提案中前記ノ三點ヲ變更スルモ、尙ホ結局帝國ノ承諾シ得ルモノニ比スレバ頗ル差異アリトナシ、該案ヲ以テ商議ノ基礎トナスコトヲ承諾スルノ責ニ任ズルハ、假令不愼ト云フ程ニアラズトナスモ、到底無益ナラント考慮シタリ。右ノ事情ナルヲ以テ、本官ガ十二月二十二日附ノ貴電ニ接シテ大ニ喜ビタル理由ヲ了解セラル、ナラン。該電報ニ依リ、本官ハ一方ニハ滿洲ニ就キ吾レノ露西亞ニ對シテ爲シ得ベキ讓歩ニ關スル貴見ヲ知悉シ、他方ニハ貴下ガ露西亞ヲシテ貴見ニ同意セシメ得ルノ自信ヲ抱カル、ヲ知悉シタリ。

本官ハ閣下ガ露西亞ヲ說服シ遂ゲラレンコトヲ切望ス。如何トナレバ露西亞ニ對シ帝國ガ爲シ得

ベキ適度ノ讓歩ニ關シテハ、貴見ト愚見ノ間毫モ異ナル所ナケレバナリ。貴下ノ斡旋其ノ功ヲ奏シタルトキハ、正式ノ商議ヲ開クベシ、朝鮮ニ於ケル帝國ノ要求トシテ貴下ヨリラムスドルフ伯ニ渡サレシ摘要書ニ記載シタル所ニ顧ミテ、交互ノ原則ヲ適用スルトキハ、卽チ露西亞ヲシテ滿洲ヨリ撤兵スルノ已ムヲ得ザラシメ、該領土ノ一部タリトモ之ヲ以テ軍略上ノ目的ノ爲メニ使用スルコト能ハザラシムルニ至ルベシ。約言スレバ、交互ノ原則ハ滿洲ニ於ケル露西亞ノ軍事的活動ヲ以テ內亂及暴動ノ鎭定及鐵道ノ防護等ニ限定スルニ至ルベシ。故ニ若シ朝鮮ニ關シテ帝國ノ承諾シ得ベキ點ヲ基礎トシテ滿洲問題ノ裁決ヲ爲スヲ得バ、諸外國（大不列顚國ヲ含ム）ハ帝國ニ對シテ感謝スベキモノナリ。（不完）

（五拾壹）桂內閣總理大臣ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十四年十二月二十九日於倫敦接電

（先電ノ續）

閣下トラムスドルフ伯ノ間ニ討究セラレタル辨妥案ニ關シ、貴下ノ注意ヲ促スベキ點ハ唯一アルノミ。卽チ貴下ニシテ第一條ヲ以テ朝鮮獨立ノ相互承認ニ止ムルコトヲナシ得ベカリシナラバ、本官ハ滿足シタルナラン。獨立ノ相互保證ハ當ニ連帶責任ヲ喚起スルノミナラズ、併セテ保證國ガ被保證國ノ國務ニ干涉スルノ特權ヲ含蓄スルモノナリ。然ルニ帝國ノ政策ハ就中軍略上政治上ノ事項ニ關シテ露西亞ヲ朝鮮ヨリ確然排除セントスルニアリ。

次ニ露西亞ノ反對提案ニ轉シテ論陳スベシ。ラムスドルフ伯ノ修正ハ之ヲ正當ニ解釋スルトキハ、頗ル巧慧ニシテ熟慮ヲ要スベキモノナリ。若シ我ガ想像ノ如ク第二條第三條ニ於テ「又ハ日本ハ云々ヲ約ス」ノ語ヲ以テ相互保證ニ代ユルノ意アリトセバ、其結果トシテ修正案ノ約束ハ全ク一方ニ偏シ、且自棄的性質ヲ帶ブルニ至リ、日本ノ取得スル所ト、露西亞ノ讓與スル所ハ、單ニ推測ニ依リテ定マルニ反シ、日本ノ讓與スル所ト露西亞ノ取得スル所ハ、總テ明記的トナルベシ。勿論第四條ニ依リ露西亞ハ工業上商業上日本ノ行動ノ自由ヲ承認スル所アリト雖モ、之レ必ズシモ同樣ナル行動ノ自由ヲ露西亞ニ禁ズルモノニアラザルベシ。加之同條ニ於テ「專權」ヲ「主優ナル權利」ト改メタル趣旨モ無視スル能ハズ。如何トナレバ所謂主優ナル權利ハ之ニ次グ同種ノ權利ノ存在ヲ指示スレバナリ。然リ而シテ日本ガ主優ナル權利ヲ行使スルニ當テハ、露西亞ノ承諾ヲ要シ、露西亞ガ其ノ輕キ權利ヲ行使スルニ當リテハ毫モ他國ノ承諾ヲ要セズトナスモノナリ。

又第五條第一項ノ趣旨ヲ以テ約束ヲ爲サヾルヲ得ザルニ至ラバ、多少ノ保留ヲ設ケ、公使館領事館護衞隊ノ外ニ我鐵道ノ利益保護ノ爲メニ朝鮮ニ駐兵シ得ルノ途ヲ講ジタル方得策ナルベシ。尙ホ出來得ベクンバ朝鮮鐵道ヲ東淸及山海關牛莊鐵道ト連絡スルノ目的ヲ以テ、南方滿洲ニ臨機延長ス

ルハ露西亞ニ於テ之ヲ妨礙セザルベキ旨約束ヲ爲サシムルコト望マシ。

最後ニ臨ミ本官ノ所見ニ依レバ、商議ヲ開始スルニ先チ露西亞ヲシテ其ノ大體ニ於テ我所見ニ同意セシメザルベカラズ。

兎ニ角本官ハ露西亞ト商議ヲ開クニ先チ、現ニ進行中ノ大不列顛國トノ商議ヲ成ルベク速ニ結了センコトヲ欲ス。

（五拾貳）伊藤侯爵ヨリ桂內閣總理大臣宛電報

明治三十四年十二月三十日於倫敦接電

十二月二十八日附貴電慥ニ受領セリ。余ハ其前既ニラムスドルフ伯ニ返答シタリ。伯ノ提議ニ係ル草案ノ要點ハ凡テ一方ニ偏シタルモノナルコトヲ余ノ所感トシテ寧ロ鋭ク指摘シタル後、余ハ伯ニ告グルニ將來ノ商議ノ基礎トシテ該草案ヲ日本政府ニ建議スルノ適否ニ就キ頗ル疑惑ヲ抱キ居ルヲ以テ、該案ニ就キ余ノ確說ヲ伯ニ通知スルニ先チ、一層細密ニ之ヲ攻究シ、其ノ爲メ尙ホ時日ヲ假スノ必要アル旨、竝ニ歸途ニ就ク期日切迫シタルヲ以テ、或ハ東京到着以前ニ再ビ伯ニ書翰ヲ認ムルノ機會ナキヲ保セザル旨ヲ以テシ、依テ將來更ニ音信ヲ繼續スルモ、或ハ又之ヲ斷絕スルモ我ガ意ノ如ク爲シ得ル樣處置シタリ。余ハ本問題ノ發展ニ甚ダ重キヲ置クト雖モ、歸朝後親シク說明スルニアラザレバ到底本問題ノ詳細ナル事情ヲ貴下ニ貫徹スル能ハズト信ズ。余ハ來月初旬倫敦出發蘇西ヲ經テ歸航ス。

（五拾參）英國外相ランスダウン侯ト會見ノ記（其一）

明治三十五年一月二日ランスダウン侯別墅ニ於テ

明治三十五年一月二日午前十時英國ボーウードランスダウン侯別墅ニ於テ都筑氏ノ通譯ニ依リ、

外相　今日英日兩國間ニ着手シツヽアル協商ノ件ニ關シテハ充分御承知ノ事ト信ズ。

侯爵　然リ、昨年八月迄ノ事ハ本國出發前ニ承知致シタリ。其後閣下ハ御旅行ノ由ニテ、八月以後ノ沿革ハ歐洲到着後ニ聞知セリ。而シテ自分ハ該協商ニ關シテハ決シテ異存ヲ挾ム譯ニテハ無ク、大體其ノ事ニ同意ナレドモ、唯自分ノ希望スル所ハ互ニ充分意思ノ疎通ヲ謀リ、事後ニ至リテ誤解無カランコトヲ豫メ勉メ置カシムルニ在リ。

外相　至極同感ナリ、協定ニ先チ胸襟ヲ開キテ意見ノ在ル所ヲ交換シ置クハ最モ必要ナリト信ズ。

侯爵　就テハ閣下ヨリ聞キ置キ度キ一事アリ、卽チ今日英國ノ支那ニ對スル方針、卽チ支那帝國領土ノ保全竝ニ開放主義ニ關シテハ自分ニ於テモ毫モ異存ナケレドモ、滿洲ニ於テ露國ハ既ニ鐵道

ヲ所有セリ。之レニ依テ生ズル自然ノ勢力擴張ニ就キ、閣下ハ如何ナル考慮ヲ抱持セラルヽヤ。

支那政府ノ弱キ、果シテ其擴張ニ抵抗シ得ルヤ否ヤハ疑ハシ。

外相　既ニ御聞及ニモ成リタルベシ、鐵道ノ件ニ關シテハ昨年當國ト露國ノ間ニ協商成立セリ。此協商ニ關シテ政府ハ屢々議會ノ攻擊ヲ受ケタレドモ、兎ニ角滿洲鐵道ハ露國ノ勢力範圍ナルコトハ當國ニ於テ既ニ承認シタル所ナリ。尤モ之ハ單ニ鐵道ニ關シテノミノ事ニテ、他ニ如何ナル權利ヲモ認メタルコト無シ。然レドモ貴我兩國ト異リ、何人ニモ露ノ國境ト滿洲トハ接觸(overlop)シ居ルコトナレバ、吾々ニ比スレバ露國ハ自然ニ多クノ利益ヲ享有シ居レリ。

侯爵　近來露國ハ清國ニ對シ撤兵條件ナル名義ノ下ニ滿洲ニ關シテ種々ノ權利ヲ要求シツヽアリ、之レニ對スル貴見如何。

外相　滿洲ノ條約中二ケ條ノ故障ヲ挾ムベキモノアリ。其一ハ他國ノ條約上ノ權利ニ關シ、他ハ清國ノ主權ヲ傷ケントスルモノナリ。故ニ此ノ二ケ條ニ關シテハ日本ト提携シテ充分反對ヲ爲シタリ。然レドモ滿洲ノ爲メニ露國ト開戰スルガ如キハ英國ノ爲サヾル所ニシテ、日本モ亦之レガ爲メニ戰フガ如キコト無カルベシト信ズ。乍併各國ノ條約上ノ權利ト、各國ノ當然享有スベキ利益ハ出來得ル限リ公平ニ維持シ度シ。

侯爵　至極御尤ナレドモ、清國政府ノ薄弱ニシテ、外部ノ勢力ニ抵抗スルノ力乏シキト、清露ノ境ヲ接スルノ事實ヨリシテ、假令表面ハ條約ヲ公平ニ施行スルトスルモ實際ニ於テ地方官等露國ニ對シテ偏頗ナル處置ヲ爲スコトアラバ如何ニセラルヽ御考ニヤ。

外相　夫ハ最早致方無シト覺悟スルノ外無カルベシ。乍併滿洲問題ニ關スル日本政府ノ考ハ如何ナルモノナルカ。

侯爵　自分ハ豫メ貴意ヲ得タル如ク、全ク一私人ノ資格ニテ卑見ヲ吐露シ居ル次第ナレバ、日本政府ノ意思ノ那邊ニ在ルヤハ答ヘ兼ヌレドモ、自分ノ本國出發前ノ模樣ニテハ一歩ニテモ露國ガ彼ノ方面ニ於テ利益ヲ占ムルコトニ對シテハ反對スルコトニ勉メ居リタルガ如ク承知セリ。

外相　爾來日本政府ノ之ニ關スル方針變更シタルガ如キコトアリシヤ。

侯爵　否、唯其後ノ事ハ本國出發後ニ屬スルヲ以テ委シクハ知ラザレドモ、蓋シ其方針ヲ繼續シ居ルコトヽ信ズ。

外相　元來今回ノ協定ハ英國ニ取リテ一新方針ノ端緒ヲ開ク次第ナリ。從來英國ハ自由行動ノ主義ヲ抱持シ、他國ヨリハ屢々孤立ノ嘲ヲ蒙リタルコトアリ。然リ而シテ新端緒ヲ開クニ就キテハ議會ノ議ニ上ルコトアルヲ覺悟セザル可カラズ。左スレバ隨分攻擊モ多カル可シト信ズ。而シテ其攻擊ノ如何ナル方面ニ向テ來ルヤト云ハヾ、此協定ニ依リ日本ガ滿洲ニ關スル英露ノ紛議ヨリ戰爭ニ引入レラルヽノ恐ヨリモ、英國ガ朝鮮ニ關スル日露ノ衝突ヨリ戰爭ニ引入レラルヽ恐多カル

ベク、從テ此ノ協定ハ日本ヲ益スル程英國ヲ益セズトノ論起ルベシ。故ニ自分ハ其ノ論鋒ヲ避クルノ目的ヲ以テ此ノ案ヲ修正セント目下考案中ナリ。

侯爵　朝鮮ノ事ニ關シテ閣下ノ意見ヲ確メ置キ度キ事アリ。卽チ朝鮮ニ關シテ日露協商ナルモノ現存シ、我ガ邦モ之レガ爲メニ束縛サレ居ルコトナレバ、今之ヲ度外視スル能ハザルハ論ヲ俟タズ。然ルニ此協商タルヤ、到底日本ノ永ク滿足シテ之ヲ持續シ能ハザル所ナルガ故ニ、日露兩國協商ノ上、其ノ協定ヲ我ガ利益ノ爲メニ變更スルコトニ關シテハ御不同意モ無カルベシト信ズレドモ如何ニヤ。

外相　充分貴意ヲ了解スルコトヲ得ザリシガ、日英協商ト共ニ日露協商ヲ設ケラルヽノ意ナルヤ。

侯爵　誤解ノ無カランコトヲ希望ス。自分ハ決シテ英露兩國ニ對シテ同時ニ權謀策（Double jew）ヲ講ゼントスルノ意ニモアラズ。又日露同盟ヲ主張スル次第ニモアラズ。唯朝鮮ニ關シテ我ガ利益ヲ擴張センガ爲メニ、日露協商ノ里程標ヲ更ニ一歩進ムルノ協商ヲ露國ト平和的ニ試ムルコトヲ云フノミ。而シテ卑見ニ依レバ、之レ卽チ益々東洋ノ平和ヲ安全ナラシムル所以ナリト信ズ。

外相　夫ハ聊カモ不同意無シ。但シ英國カ朝鮮ニ於テ日本ニ與ヘント欲スルモノヲ以テ、日本ハ却テ之ヲ露西亞ニ割愛スルガ如キ協商ヲ爲サヾルニ於テハ、英國ハ之ニ同意スル能ハズ。然ラザル限リハ毫モ異存ノアルベキ筈ナキノミナラズ、却テ英國ノ平和的目的ト符合スル次第ナリ。卽チ閣下ハ兩協定竝行セバ平和ヲ維持スル上ニ於テ便宜トセラルヽ如シ。之ハ當方ニ於テモ至極同意ニテ、英國ノ方針モ亦一ニ平和維持ノ目的ニアリトス。

侯爵　勿論右ハ自分一私人ノ考ナレドモ、將來或ハ如斯キ場合ノ生ズルコト無キヲ保セズト信ズルニ付キ其邊ハ御記臆ヲ乞フ。

外相　承知セリ。

侯爵　又今回ノ協定ニ關シテハ、米國ハ必ズ同意ナルベク、大統領ルーズウエルト氏ノ考モ亦此邊ニ在ルガ如シト雖モ、獨逸ノ之ニ對スル方針ハ如何アルベキカ。元來今回ノ件ニ關シテ獨逸ハ初メ多少吾々ニ勸メタルガ如キ形跡無キニアラザリシモ、其後ノ態度ハ如何、再ビ露佛ニ傾キテ千八百九拾五年ノ態度ヲ再演セバ、日本ハ頗ル困却スルナラント信ズ。

外相　米國ハ無論吾々ニ同意ナラン。獨逸ハ初メ貴國ヨリ或ル國ト衝突スル場合ニ於テハ、如何ナル態度ヲ取ルカトノ問ニ對シ、好意ノ中立ヲ守リテ一方ニ佛國ヲ掣肘スル旨返答シタル由ナレバ、如何ニモ不審ニ思ヒシ故、當方ヨリ直接ニ問合セタルニ、嚴正中立ヲ守ルベク、從テ一方ノ爲メニ他ノ一方ヲ押ユルガ如キコト無カルベキ旨ノ返答アリタリ。要スルニ獨逸ノ態度ハ明確ナラザレドモ、今日ノ歐羅巴ニ於ケル彼ノ地位ヨリ推測スレバ、必ズ自由行動ヲ希望スベキヲ以テ、到底此同盟ニ加入スル望ハ無キモノト信ズ。乍併日英間ニ調和的協定ノ成立スル事ニ關シテハ、

初メヨリ同情ヲ表シタル事故心配ハ無カルベシ。

侯爵　或ハ然ランカ。

外相　日英協商ノ條項中其日本政府ノ提出シタル第二條ニ關シテハ、當方ニ於テハ勿論東洋ニ於ケル英國ノ海軍力ヲ他國ニ比シテ劣ラシムルコト無キノ希望ハ充分抱キ居リ、且又其準備モ充分致シ居レドモ、海軍力ノ配置ニ關シテ他國ト束縛的協定ヲ爲スハ海軍部内ニ於テ絶對的反對スル所ナルヲ以テ今考案中ナリ。

侯爵　自分ニ於テモ東洋ニ於ケル英國ノ海軍力ヲ他國ニ比シテ減少スルガ如キハ英國ノ勢力維持上甚シキ不利益ナルヲ以テ、決シテ貴國ノ爲サヾル所ナルベキヲ信ジ居リ、且又閣下ノ言ヲ聞キテ平生ノ所信ヲ益々强クスル所ナルガ故ニ、右ノ個條ノ必要那邊ニアルヤハ充分了解セザレドモ、元來此ノ協商タルヤ、現時兩國政府間ニ係屬中ノ事柄ナルノミナラズ、此問題ノ如キハ自分ノ深ク了解セザル所ナレバ、卑見ヲ吐露スル能ハザルヲ遺憾トス。

外相　御尤ナリ、貴意ハ充分了解セリ。

侯爵　、今暫ク東洋ニ於ケル英國ノ地位ニ關シ愚説ヲ述ブベシ。是ハ攻擊ト感ゼラレザルコトヲ望ム。又他意アリテ申スニモアラズ、明白ニ自分ノ考ヲ閣下ニ陳ズレバ、英國ハ從前ニ比シ更ニ一層奮發シテ、力ヲ東洋ニ集注セラルヽニ非ザレバ、既往ニ於ケル威嚴ヲ維持スルコト困難ナルベシト信ズ。露國ノ漸進シテ東洋ニ於ケル威嚴ノ日一日ニ加ハルハ熟知セラルヽナラン。今日ノ狀況ヲ以テ往年ニ比スレバ如何、安政七年露國ガ對馬ニ兵ヲ上陸シタル時ノ如キ、英國ハ露ニ迫リテ二十四時間内ニ撤退ヲ命ジタルニアラズヤ。又千八百八十四年英國ハ巨文島ヲ占頗シタルニアラズヤ。而シテ如斯キ既往ノ威嚴ヲ將來ニ保持セント欲セバ、須ク今日ニ比シテ一層活潑ナル態度ヲ取リ、行動ヲ爲スノ必要アリト信ズ。

外相　御尤千萬ナリ、然レドモ現今ハ南亞戰爭ノ爲メニ掣肘セラレテ、該地方ニ勢力ヲ集中シ居レバ、他ノ方面ニハ成ル可ク他國ト衝突ヲ避ケントスルノ傾向アルモ亦已ムヲ得ザルナリ。

之レヨリ雜談ニ移ル、右ノ談論凡ソ一時間ニ及ベリ。

（五拾四）英國外相ランスダウン侯ト會見ノ記（其二）

明治三十五年一月六日英國外務省ニ於テ

明治三十五年一月六日午後三時半伊藤侯爵都筑馨六氏ヲ隨ヘ、英國外務大臣ランスダウン侯ヲ外務省ニ訪問セラル。本日ノ會見ハ外相ノ希望ニ基キタルモノニシテ、其旨林公使ヨリ通知アリタレバ、侯爵ハ自ラ外務省ニ赴カレ、都筑氏ノ通譯ニ依リ外相ト左ノ談話アリタリ。

外相　明日ハ愈々御出發ナルカ。

侯爵　然リ。

外相　御出發前ニ尙ホ何事カ御話有之度キ事ハ無キヤ。

都筑氏　伊藤侯ハ閣下ヨリ何カ御話有度樣感ジ居ラレタルガ如シ。

外相　自分ハ唯或ハ侯爵ガ先日ノ御話ニ就テ尙ホ委シク御話ノ必要ヲ感ゼラレザルヤト信ジタルノミナラズ、御出發ノ時日モ切迫シ居ル事ナレバ、御面會ノ上親シク袖別シ度カリシナリ。

侯爵　先日ノ談話ニ關シテハ更ニ委シク陳述スルコトモ無ケレドモ、念ノ爲メ尙ホ申セバ朝鮮ノ問題ナリ。朝鮮ニ關シテハ列國中日露兩國ノ如ク利害ノ關係ヲ直接ニ感ズルモノナシ。一ハ境ヲ接シ、一ハ狹少ナル海峽ヲ距テ隣ス。特ニ日本ノ如キハ數萬ノ人民モ移住シ、經濟上ノ關係モ亦最モ密接ナリ。然ルニ今日ハ日露兩國政治上對等ノ地位ヲ以テ之ニ對セザル可カラザルガ故ニ、場合ニ依リテハ衝突ノ恐少シトセズ。然レバ我邦ニ於テハ政治上今一歩ヲ進メ、我ガ權利ヲ伸張スルノ必要アリト信ズ。

外相　過日モ日露協商ナルモノアリテ、今日之ヲ度外視スル能ハザル趣ヲ拜受セリ。從テ閣下ノ御考ハ其協商ヲ政治上ニ於テ日本ノ利益ノ爲メニ變更スルコトヲ望マルヽモノヽ如シ。

侯爵　然リ、今日ニ於テハ日露兩國共ニ朝鮮ニ對シテハ政治上對等ノ勢力ヲ享有シ居ルガ故ニ、朝鮮ニシテ獨立文明國ノ義務ヲ果サヾル場合ニ於テハ、兩國競フテ助言若クハ援助ヲ與フルコトヲ得ルナリ。如斯キ狀態ニテハ兩助言若クハ援助等ハ專ラ日本ニ於テ之ヲ爲スコトヽ定メ度シ。

外相　露西亞ハ之ヲ承諾スルナラント信ゼラルヽカ。

侯爵　其ハ實際ニ協商ヲ試ムルニ非ザレバ確答致シ難シ、然レドモ露西亞モ日本ト衝突スルコトヲ望マザルハ自分ノ信ズル所ナリ。尤モ露政府ニ於テモ朝鮮海峽ニ關シテハ頗ル重キヲ置キ居ル樣ナレドモ、其交通ノ自由ヲ日本ガ認ムル以上ハ或ハ承諾スルナランカ。

外相　其ハ平時ノ場合ニ於ケル事ナルベシ、戰時ニ於テハ然ルコトヲ得ザルベシ。

侯爵　然リ、平時ニ於テ日本ガ海峽ノ自由交通ヲ承認スレバ、露國ハ已ニ既ニ朝鮮ニ於ケル日本ノ經濟的關係ノ主優ナルコトヲ認識セルガ故ニ、其當然ノ結果タル利益保護ノ爲メニ必要ナル處置ヲ承認セザルヲ得ザルベキカ、況ンヤ日本ハ露國ニ對シテ朝鮮ニ關スル政治上ノ特權ヲ得レバトテ、決シテ朝鮮ノ獨立ヲ毀傷スルガ如キ希望ヲ有セザルニ於テオヤ。

外相　右ノ問題ハ今回露京御滯在中ニ多少御談合アリシヤ。

侯爵　唯東洋一般ニ關スル事ハ談話ノ間ニ之ヲ語リタリ。然レドモ露國ガ朝鮮ニ於ケル日本ノ主優ヲ認メ、且我邦ト衝突セントスルノ意ハ、毫モ無シトノ證言ハ、今回ノミナラズ東京出發前ニモ屢々聞キ得タル所ナリ。

外相　果シテ眞ナラバ東洋ノ爲メ實ニ賀スベキコトナリ。

侯爵　然リ。

外相　今回ノ日英協商ノ件ニ付尙ホ一言シ度キ事アリ。朝鮮ニ於ケル日本ノ利益ノ主優ヲ明記スル以上ハ、之ニ對シ英國ノ利益ニ就テ何カ特ニ明記スル所無ケレバ協商ノ外見偏破ナルノ恐アリ。從テ當國輿論ノ攻擊モ些カラザルベシト信ズルガ故ニ、目下其攻擊豫防策ニ付キ頻リニ考案中ナリ。楊子江沿岸ニ對シ英國ノ主優ナル利益關係ヲ明記シテ其攻擊ヲ防ギテハ如何ト思ヒ居レリ。閣下ノ高見ハ如何。

侯爵　日本ノ朝鮮ニ對スル利害關係ノ最モ密接ナルハ一私人ノ自說トシテ之ヲ明言シタレドモ、現ニ兩國間ニ協議中ノ問題ニ關シテハ嘴ヲ挾ムノ意ニハアラズ。

外相　充分了解セリ、又一私人ノ御說ナル事モ承知シ居レリ。而シテ又自分ノ云ヒシ事モ亦全ク同性質ニテ、自分一個ノ說ナレドモ、サリスベリー侯其他ヨリ自分ト閣下ノ間ニ如何ナル談話アリシヤ等ノ質問出ル時ハ……

侯爵　其節ニハ御話セラレテ毫モ異存無キノミナラズ、却テ自分ノ望ム所ナリ。

外相　然リ。

侯爵　尙ホ申シ置キ度ハ滿洲ノ問題ナリ。今日ニ於テ日本ハ單ニ出來得ル限リ露國ヲ掣肘セント欲スルガ如キ傾向アレドモ、將來ニ於テハ或ハ干戈ニ訴フルニ非ザレバ牽制ヲ爲シ遂グル能ハザル場合生ズルヤモ知レズ。如斯キ場合ニ遭遇セバ如何ニスベキヤニ就テハ豫メ貴慮ヲ煩ハシ置カザル可カラズ。

外相　右ノ問題ハ何人モ考ヘ居ル所ナレドモ、過日閣下ノ御說ノ如ク、何分ニモ境ヲ接シ居ル事トテ、露國ガ漸次實力ヲ占ムルニ至レバ、止ムヲ得ザル所ナラン。

侯爵　加之露國ハ鐵道ヲ有シ居レリ。

外相　鐵道ノ事ニテ思ヒ出シタリ、過日貴見ヲ得タル露英ノ鐵道ニ關スル協商ハ既ニ之ヲ公ニシタリ。卽チ之レナリ。閣下ニ御渡シ致スベシ。

侯爵　牛莊山海關關ノ鐵道ハ除外例ナリシナラン。

外相　（答辯要領ヲ得ズ）

侯爵　今日皇帝陛下ハ自分ヲ「サンドリンガム」宮ニ御招キアルベキ旨林公使マデ通知アリタル趣ナルガ、閣下ハ御承知ナルカ。

外相　（意外ナルガ如キ風ニテ）否、然レドモ最早明日御出發故御迷惑ナラン。

侯爵　出發ノ準備ハ致セシモ、陛下ノ御命令ナレバ謹デ服從致スベシ。

外相　然ラバ些シモ閣下ノ名ヲ出サズシテ其旨自分ヨリ奏上シテハ如何、卽チ閣下ハ陛下ノ御命令

ハ飽クマデ奉ゼラル、存念ナレドモ、自分ノ聞ク所ニテハ、閣下モ既ニ明日出發ノ準備ヲ致サレタル事ナレバ、今日之ヲ變更セバ頗ル今後ノ計畫ニ關係ヲ及ボスベシ云々ト注意申上ゲテハ如何。

都筑氏　其返答ハ侯爵ヨリ致サレ難カルベシ。

外相　然リ。

其レヨリランスダウン侯ハ祕書官パーリントン氏ヲ呼ビ、種々內談ノ末「サンドリンガム」宮ニ宛テ發電ノ手續ニ及バレタルガ如シ。

外相　在日本英人ノ永借權ニ關シ一ノ問題起リ居リ、閣下モ御承知ナルベキカ、自分ハ仲裁ノ形式ニ依リテナリトモ之ヲ落着センコトヲ考案中ナリ。之ハ單ニ閣下ニ御話致スノミニテ、閣下ノ高見ヲ聞カント欲スルニ非ズ。

其レヨリ雜談ニ移リ午後五時辭シ去ラレタリ。

（五拾五）　林在英公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月十五日於羅馬接電

一月十五日附小官ヨリ外務大臣ニ宛テ發送シタル電報左ノ如シ。

先電ニ關シランスダウン侯ハ一月十四日小官ニ左ノ如キ協約案ヲ手渡セリ。

大不列顛國政府及日本國政府ハ偏ニ極東ニ於テ現狀及全局ノ平和ヲ維持スルコトヲ希望シ、且清帝國及韓王國ノ獨立ト領土保全トヲ維持スルコト、及該二國ニ於テ各國ノ商工業ヲシテ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關シ、特ニ利益關係ヲ有スルヲ以テ茲ニ左ノ如ク約定セリ。

第一條　兩締約國ハ相互ニ清國及韓國ノ獨立ヲ承認シタルヲ以テ、該二國孰レニ於テモ全然侵略的趨向ニ制セラル、コトナキヲ聲明ス。然レドモ日本國政府ハ韓國ニ於テ日本國ノ有スル政治上並ニ商業上ノ特別ナル利益ニ就キ、陛下ノ政府ノ注意ヲ喚起シ、陛下ノ政府モ清帝國ニ於ケル大不列顛國ノ特別ナル利益ニ就キ、同ジク注意ヲ喚起シ、兩國政府ハ若シ右等利益ニシテ別國ノ侵略的行動ニ因リ侵迫セラレタル場合ニハ、兩國孰レモ該利益ヲ擁護スル爲メ必要缺クベカラザル措置ヲ執リ得ベキコトヲ承認ス。

第二條　日本政府ノ提議シタル協約草案第一條ニ同ジ、但シ「上記ノ利益」ヲ「上記各自ノ利益」ニ改ム。

第三條　同上協約草案第二條ニ同シ。

第四條　同上協約草案第三條ニ同シ。

第五條　同上協約草案第四條ニ同シ。但シ「彼等ハ」ヲ「兩國政府ハ」ニ改ム。

第六條　本協約ハ調印ノ日ヨリ直ニ實施シ、該期日ヨリ五箇年間效力ヲ有スルモノトス。若シ上記

テ均等ノ機會ヲ得セシムルコトニ關スル序文ノ末段ヲ變更スルコト望マシキ感アリ。又第一條モ甚ダ異存ヲ挾ムベキモノヽ如シ。該條ハ清國ニ於ケル英國ノ地位ヲ、恰モ朝鮮ニ於テ我等ノ要求スルヲ得ベキモノト同樣ニ規定シタリ。若シ假リニ日本ガ其ノ解釋ニ基キ朝鮮ニ於テ專行的政策ヲ施サンコトヲ主張スルコトアリトセバ、支那ニ於テモ亦現ニ英國ト同樣最モ重大ニシテ且益々增進シツヽアル利益ヲ有スルニ拘ハラズ、英國ニ承認スルニ彼地ニ於テ吾レノ朝鮮ニ於ケルト同樣ナル政策ヲ主張スルノ權利ヲ以テセザルベカラズ。如斯キ事情ナレバ、貴下ガ何等カノ方法ニ依リ上記條文ヲ變更セシムル樣干與セラルヽコト甚緊要ナリト認ム。何等カノ措置ヲ執ルコトアラバ御一電ヲ乞フ。

（六拾）　栗野公使ヨリ伊藤侯爵宛電報

明治三十五年一月二十日巴里發電

（本電報ハ在羅馬日本公使館ニ於テ通譯ノ上ネープルスニ郵送シタルモノニテ一月二十二日同地ニ於テ接受ス、左記譯文ハ在羅馬日本公使館ノ通譯シタル儘ナリ）

本官ノ電信ニ對シ、外務大臣ヨリ只今接到セル返電ニ依レバ、同大臣竝ニ內閣總理大臣ハ朝鮮問題ニ關シ露國ト協商スルコトヲ冀望ス。但シ本官ノ覺書ニ記セル意見ヲ容認スルハ一ノ取極メヲ締結スル爲メ、最終ノ命令ヲ與フルノ義ニアラズ云々、而シテ本官ハ任地ニ赴キ約定ノ基礎ヲ見出ス爲メ盡力スベキ旨命ゼラレタリ。

本官ハ外務大臣ニ向ヒ、果シテ露國ト協商スルノ意望アラバ、假令日英條約ニシテ締結セラルヽニ至ルモ、其ノ發表ヲ遲延スルコト最モ必要ナリト電報シ置キタリ。

日清媾和記錄

中田敬義

一、張蔭桓邵友濂媾和使トシテ來朝

清國政府ハ在北京米國公使ニ依賴シ、帝國政府ニ於テ左ノ條件ヲ以テ媾和ノ談判ヲ開始スルコトヲ承諾スルヤ否ヤヲ十一月十二日北京發電信ヲ以テ問合セ來レリ。卽チ

清國政府ニ於テ朝鮮ノ獨立ヲ承認スルコト、相當ノ償金ヲ帝國政府ニ支拂フベキコト（別紙第一號）

然レドモ右ノ條件ノミニテハ帝國政府ニ於テ同意ヲ表スルコト能ハザルニ依リ、帝國政府ハ十一月二十七日在東京米國公使ヲ經テ清國政府ノ提議ハ平和ノ基礎トシテ日本政府ノ承諾スル能ハザル所ノモノナリ。現今ノ狀況ニテハ清國政府ハ滿足ナル媾和ノ基礎ニ同意セムト欲スルガ如キ眞情アリト思ハレズ。然レドモ若シ清國政府ニ於テ眞實ニ和睦ヲ願望シ、之ガ爲メ相當ノ資格ヲ備ヘタル全權委員ヲ任命スルニ於テハ、日本政府ハ兩國全權委員會合ノ上其ノ因テ以テ戰爭ヲ息ムルコトニ同意スベキ條件ヲ宣言スベシトノ旨ヲ回答セリ。（第二號）

然ルニ清國政府ハ同月三十日ニ至リ更ニ米國公使ヲ經テ、日本ヨリノ回答中ニハ如何ナル條件ヲ以テ平和ノ爲メニ滿足ナル基礎ト見做スベキヤヲ明言セザルニ依リ、此點ニ關シ帝國政府ノ意嚮ヲ承知シタキ旨問合セ來レリ（第三號）ト雖モ、清國ニ於テ相當ノ資格ヲ有スル全權委員ヲ任命シタル上ニアラザレバ、帝國政府ニ於テハ媾和ノ條件ヲ宣言スルノ限リニ在ラザルニ依リ、十二月二日ニ至リ、米國公使ヲ經テ此旨ヲ清國政府ニ通牒セリ。（第四號）因テ清國政府ハ帝國政府ノ要求ニ從ヒ、相當ノ全權委員ヲ任命スルニアラザレバ媾和談判ヲ開始スルコト能ハザルヲ知リ、遂ニ全權委員ヲ任命シ、上海ニ於テ平和ノ談判ヲ開始セムコトヲ提議セリ。（第五號）是ニ於テ帝國政府ハ清國政府ニ於テ相當ノ全權委員ヲ任命スル上ハ、日本政府ニ於テモ亦其ノ委員ヲ任命スルコト差支ナシ。但シ其ノ任命ニ先チ、清國政府ヨリ其ノ委員ノ氏名官位ヲ通知スルコトヲ要シ、又委員會合ノ地ハ必ズ日本國內タラザルヲ得ザル旨ヲ同月十八日附ヲ以テ回答セリ。（第六號）之ニ對シ清國政府ハ同月二十日附ヲ以テ米國公使ヲ經テ、和議ヲ商定スル爲メ總理衙門大臣張蔭桓、湖南巡撫邵友濂ヲ全權委員トシテ日本國ニ派遣スルニ依リ、日本ニ於テモ亦速ニ全權委員ヲ任命シ而シテ日本ニ於テ全權委員任命ノ日ヨリ休戰期日ヲ決定スベキコトヲ望ミ、且ツ長崎ヲ以テ委員會合ノ地ト爲

サムコトヲ提議セリ。（第七號）因テ帝國政府ハ清國ヨリ任命セラレタル全權委員ト和議ヲ結バシムル爲メニ全權委員ヲ任命スベク、又日本政府ハ廣島ヲ以テ全權委員會合ノ地ニ撰定シ、而シテ休戰ノ件ニ關シテハ兩國全權委員會合ノ上ニアラザレバ、日本政府ハ之ニ關スル條件ヲ明述セザルベキ旨ヲ同二十六日米國公使ヲ經テ清國政府ニ回答セリ。（第八號）然ルニ同二十九日ニ至リ在北京米國公使ヨリ、清國政府ニ於テハ日本政府ニ於テ任命スベキ全權委員ノ姓名及ビ官名竝ニ清國全權委員等ノ上陸スベキ場所ヲ明告セラシムコトヲ欲スル旨申シ來リタルヲ以テ、（第九號）帝國政府ハ之ニ對シ日本政府ハ其ノ全權委員ノ姓名官位ヲ豫メ清國政府ニ通知スルノ必要ヲ見ズ、又清國全權委員等ガ下ノ關ニ來着シタル上ハ同所ヨリ廣島ヘ旅行ノ便利ヲ與フル爲メ必要ノ準備ヲ取計フベキ旨回答シタリ。（第十號）而シテ二十八年一月五日ニ至リ、清國政府ハ更ニ在北京米國公使ヲ經テ、張蔭桓ハ七日ニ北京ヲ出發シ、山海關ヨリ上海ニ至リ、同地ニ於テ邵友濂ト會合ノ上、中立國船ニテ廣島ヘ向テ渡航スベク、又日本ノ港ニ入ルトキハ慣例ニ據リ清國國旗ヲ掲グベキ旨申來リタルニ依リ、（第十一號）日本政府ハ清國政府ヨリノ申出ノ取極ヲ承諾スト雖モ、清國全權委員ノ乘ル所ノ船下關ニ到着ノ上、日本官吏ニ於テ清國全權委員ノ乘船シ居ルコトヲ確認シタル上ニ非ザレバ、清國國旗ヲ掲グルコトヲ許サザル旨ヲ回答セリ。（第十二號）

斯クテ清國ヨリ派遣ノ講和使、張蔭桓、邵友濂ハ一月二十六日上海ヲ發シ、神戸字品ヲ經テ三十一日廣島ニ到着セルヲ以テ、同日全權辨理大臣ニ任命セラレタル伊藤內閣總理大臣及陸奥外務大臣ハ卽日直チニ其ノ任命ヲ受ケタルコトヲ清國使節ニ通告シ、（第十三號）且ツ同時ニ翌二月一日ヲ以テ廣島縣廳ニテ會晤スベキ旨ヲ通知セシニ（第十四號）清國使節ヨリ（第十五號）ノ通リ回答セリ。因テ翌一日帝國全權辨理大臣ハ會晤ノ上　天皇陛下ヨリ御授與ノ全權御委任狀（第十六號）ヲ示シ、該使節等ガ帶有スル所ノ全權委任狀ヲ査驗スルコトヲ要求シタルニ、清國使節ヨリ其携帶スル所ノ國書（第十七號）ヲ提出セリ。然ルニ右ハ全ク信任狀ノ體式ニシテ、全權委任狀ノ體式ヲ備ヘザルヲ以テ、帝國全權辨理大臣ハ斯クノ如キ書面ハ平和條約ヲ締結スル爲メニ必要ナル全權委任狀ト見做ス事能ハザル旨ヲ陳述シテ之ヲ返戻シ、且ツ他ニ適當ノ全權委任狀ヲ帶有スルヤ否ヤヲ質シタルニ、該使節等ハ更ニ（第十八號）ノ通リノ書面ヲ掲出セリ。因テ帝國全權辨理大臣ハ其ノ席ニ於テ更ニ（第十九條）ノ通リノ節略ヲ交付シ、右ノ外尙ホ何等ノ權限ヲ帶有スルヤ否ヤニ付其ノ確否ヲ徵シタリシニ、清國使節ハ翌二日ニ至リ（第二十號）ノ通リ回答セルヲ以テ、同日更ニ會晤ヲ促シ、其ノ席上ニ於テ伊藤辨理大臣ハ（第二十一號）ノ通リノ演說ヲ爲シタル後（第二十二號）ノ通リノ節略ヲ交付シ、其ノ帶有スル所ノ全權委任狀ノ不完全ナルハ清國政府ガ誠實ニ此ノ重要ナル問題ヲ妥結セムトスルノ意ナキモノト認メザルヲ得ザレバ、此上最早會議ヲ繼續スルコト能ハザル旨ヲ宣言シタリ。

右ノ如ク清國政府ハ其帶有スル所ノ全權委任狀不完全ナリシガ爲メ、媾和談判ヲ開始スルコト能ハズシテ終ニ歸國ノ途ニ就ケリ。而シテ其ノ長崎ニ至リ本國ヘノ便船ヲ待居ル際、清國政府ハ在北京米國公使ヲ經テ清國全權委員ノ信任狀ヲ一層明白ニ且ツ完全ニ改ムベキニ付、該委員ヲ當分長崎ニ滯留セシメタキ旨申出タリ（第二十三號）外務大臣ハ之ニ對シテ、日本政府ハ若シ清國政府ニシテ誠實ニ媾和ノ意アリテ、正當ナル全權ヲ有シタル名望官爵アル使節ヲ派シ來レバ、何時タリトモ再ビ媾和談判ヲ開クベシト雖モ、一度談判不調トナリタル所ノ使節ヲ其ノ儘留置キ、本國政府ノ訓令ヲ待タシムルコト能ハザル旨、同月八日附ヲ以テ在東京米國公使ヲ經テ回答シ（第二十四號）又帝國政府ハ斷然清國全權委員ノ帝國內ニ滯留スルコトヲ許サザル旨（第二十五號）同公使ヲ經テ清國政府ヘ通知セリ。是ニ於テ清國政府使節ハ同月十二日ヲ以テ佛國便船ニテ長崎ヲ發シ歸國セリ。

二、李鴻章媾和使トシテ來朝

帝國政府ニ於テ清國媾和使節張邵等トノ談判ヲ拒絕セシ以來、同國政府ハ更ニ媾和ノ爲メ全權委員ヲ派遣スルノ風說アリシヲ以テ、右全權委員ニシテ若シ完全ノ全權委任狀ヲ帶有セズ、又媾和ノ基礎ニ關シ十分ノ權限ヲ有セザルニ於テハ、其ノ本邦ヘ渡航スルモ徒勞ニ歸スベキニ依リ、帝國政府ヨリ要求スベキ條件ノ大意ヲ豫メ知ラシムルノ必要アルヲ認メ、在東京米國公使ヲ經テ二月十六日附ヲ以テ（第二十六號）ノ通リノ口上書ヲ清國政府ニ送致セリ。然ルニ同月十九日ニ至リ清國政府ハ在北京米國公使ヲ經テ（第二十七號）ノ通リノ平和條約締結ノ爲メ李鴻章ヲ全權委員ニ任命シタル旨通知アリタルニ依リ、帝國政府ハ之ニ對シ回答スルニ先チ、清國政府ニ於テ本月十七日附帝國政府ノ電信中ニ記載シタル條件ニ從ヒ、其ノ全權委員ヲ派遣スベシトノ確報ヲ得タキ旨同月十九日附口上書ヲ以テ在東京米國公使ヲ經テ（第廿八號）ノ通リ清國政府ヘ通知シ、且ツ同時ニ清國政府ヨリ李鴻章ニ交附スベキ全權委任狀ノ文言ヲ電信ニテ豫メ帝國政府ヘ知ラシメ置クコト極メテ便利ナル旨忠告シタルニ（第二十九號）在北京米國公使ハ同月二十三日附ヲ以テ、清國政府ヨリ同公使ヘ宛テタル我ヨリ要求ノ條件竝ニ暗號電信ニ關スル書翰二通竝ニ全權委任狀草案ノ漢文ヲ電送セリ。（第三十號）然レドモ其ノ意義明白ナラザル所アリシガ故ニ、其英譯文ヲ電送アリ度旨（第三十一號）同公使ヘ申送リタルニ、同公使ヨリ同二十六日北京發ノ電信ヲ以テ（第三十二號）ノ通リ回答アリタリ。然ルニ右全權委任狀譯文中稍〻不穩當ノ點アリシヲ以テ、更ニ修正ヲ加フベシトノコト、兩國全權委員會合ノ場所ハ下關ト定ムベキコト、及清國全權委員ノ委任狀完全ナルコトヲ認メタル上ニ於テハ、其ノ本國政府ト暗號電信ヲ往復スルコトヲ許スベシトノ事ヲ三月一日附ヲ以テ（三十三號）ノ通リ米國公使ヲ經テ清國政府ニ申送レリ。之ニ對シ清國政府ハ（三十四號）ノ通リ李鴻章ニ交附スベキ全權委任狀ヲ改メタレバ、最早清國全權委員ノ渡來ニ付毫モ異議ナキヲ以テ、

三月四日帝國政府ハ（第三十五號）ノ通リ米國公使ヲ經テ清國政府ヘ申送リタリ。其ノ後清國使節乘船旗章出發期限及其他ノコトニ關シ（第三十六號第三十七號第三十八號第三十九號第四十號第四十一號第四十二號）ノ通リ電信往復ノ末、李鴻章ハ愈〻隨員三十三人從僕九十人ヲ率ヒ、三月十四日天津ヲ發シ下關ニ向ヒ直行スベキ旨、同月十四日、北京發ノ電信ヲ以テ米國公使ヨリ申來レリ。（第四十三條）斯クテ李鴻章ハ清國欽差頸等全權大臣トシテ三月十四日中立國船禮裕公義ノ二雙ニテ天津ヲ發シ、同十九日馬關ニ來着シタルヲ以テ、外務大臣ハ同日附書翰ヲ以テ伊藤總理大臣及陸奥外務大臣帝國全權辨理大臣ニ任命セラレタル旨ヲ（第四十四號）ノ通リ通知セシニ、清國使節ハ之ニ對シ（第四十五號）ノ通リノ回答ヲ送リ、全權委任狀交換ノ上、平和條約締結ノ談判ヲ開始スル爲メ、成ル可ク速ニ會合ノ期日ヲ定ムルコトヲ請求セリ。因テ帝國全權辨理大臣ハ三月二十日午後三時豫テ撰定セシ場所ニテ第一回ノ會晤ヲ爲シ、其ノ時ニ於テ互ニ帶有スル所ノ全權委任狀ヲ交換スベキ旨ヲ同日附書翰ヲ以テ（第四十六號）ノ通リ通知シ、而シテ同日時ニ至リ兩國全權大臣會合ノ上（第四十七號第四十八號）ノ通リ全權委任狀ヲ交換セリ。

清國使節ハ同日會合ノ席ニ於テ直チニ（第四十九號）ノ通リノ覺書ヲ提出シテ、平和條約ノ談判ニ先チ兩國海陸軍隊ノ休戰ヲ請求シタリシヲ以テ、帝國全權辨理大臣ニ於テハ戰地ヲ距ルコト遼遠ナル此地ニ在テ、休戰ヲ約スルコトヲ以テ媾和談判ノ妥局ヲ結ブニ必須ノ要義ト見做スコト能ハズト雖モ、若シ兩國ニ向テ均等ノ利便ヲ擔保スルニ足ル條件ヲ付スルニ於テハ、休戰ヲ肯諾スベキ旨三月二十一日第二回會合ノ節（第五十號）ノ通リ回答シ、以テ其ノ條件ヲ示シタリ、其ノ大要左ノ如シ。

一、日本軍隊ハ大浩、天津、山海關竝ニ該處ニ在ル城壘ヲ占領スルコト。

二、前記各處ニ在ル清國軍隊ハ一切ノ軍器軍需品ヲ日本軍隊ヘ引渡スベキコト。

三、日本軍務官ニテ天津、山海關間ノ鐵道ヲ支配スルコト。

四、休戰期限間清國ハ日本國ノ軍事ノ費用ヲ負擔スルコト。

清國使節ハ之ニ對シ同二十四日第三回會合ノ節（第五十一號）ノ通リノ覺書ヲ差出シ、帝國全權辨理大臣ヨリ提出シタル休戰ノ條件ハ承諾スルコト能ハズト雖モ、尙ホ引續キ平和條約ヲ繼續シタキ旨申出タリ。

右廿四日會合ノ節、兩國全權大臣ハ翌二十五日午前十時ニ更ニ會晤スベキ旨ヲ約シテ散會シタルニ、李鴻章ガ會議所ヨリ其ノ旅館ニ歸ルノ途中、兇漢小山某ノ爲メニ狙擊セラレ重傷ヲ負ヘリ。因テ同氏ハ其ノ遭難ノ趣ヲ帝國全權辨理大臣ニ通知スルト同時ニ、之ガ爲メ豫定ノ日時ニ帝國全權辨理大臣ト會晤スルコト能ハザルニ依リ、媾和ノ條件ヲ記載シタル覺書ヲ李經方ニ交付セラレムコトヲ（第五十二號）ノ通リ請求セリ。帝國全權辨理大臣ハ之ニ對シ其ノ遭難ニ付痛悼ノ情ヲ表示スル

ト同時ニ、今日迄行懸ノ談判ニ付テハ李經方ヲ經由シテ之ヲ爲スベシト雖モ、右事實ニ關スル情況ヲ　陛下ニ奏報スベキ必要等モアレバ、談判ノ進行モ少シク遲緩ヲ招クヲ免カレ難キ旨翌日二十五日（第五十三號）ノ通リ回答セリ。

李氏遭難ノ報　叡聞ニ達スルヤ　天皇陛下ハ直ニ佐藤、石黑兩軍醫總監ヲ差遣ハサレ、又皇后陛下ヨリモ看護婦ヲ遣ハサレ、且ツ御手製ノ繃帶ヲ下賜セラレタルニ依リ、李鴻章ハ更ニ二十六日附書翰ヲ以テ（第五十四號）感謝ノ意ヲ致セリ。

此ノ兇變ニ付テハ　天皇陛下ハ深ク宸襟ヲ惱マセ給ヒ、廿五日ニ（第五十五號）ノ通リノ詔勅ヲ發シ給ヒ、又曩ニ允諾セザリシ所ノ休戰ヲ其ノ期限ヲ定メ、或區域ノ內ニ於テ承諾スベキコトヲ帝國全權辨理大臣ニ命ジ給ヒタルニ依リ、陸奧全權辨理大臣ハ二十八日親シク李鴻章ノ病床ニ就キ右ノ趣ヲ陳述シ、尙ホ念ノ爲メ（第五十六號）ノ通リノ覺書ヲ交付セリ。而シテ同日第四回會合ノ節、陸奧全權辨理大臣ヨリ（第五十七號）ノ通リノ休戰條約案ヲ李經方ニ交附シタルニ、彼ヨリ之ニ對シ（第五十八號）ノ通リノ修正案ヲ提出シタリ。廿九日ニ至リ陸奧全權辨理大臣ハ清國使節ノ修正案ニ對シ、更ニ（第五十九號）ノ通リノ再修正案ヲ調製シ、之ヲ李鴻章ニ示シ、遂ニ三十日ニ至リ奉天省、直隸省、山東省、地方ニ限リ、兩國海陸軍ノ休戰ヲ約スル爲メ（第六十號）ノ通リ兩國全權大臣ニ於テ休戰條約ヲ締結シタリ。

（伊藤全權辨理大臣ハ二十五日下關ヲ發シテ大本營ニ赴キ二十九日下關ニ歸レリ）

斯ク休戰條約締結セラレタルニ依リ、清國使節ハ一日モ速ニ媾和條約ノ談判ニ取掛ラムコトヲ望ミ、而シテ其ノ病中ノ身ナルヲ以テ、其ノ旅館ニ於テ會議ヲ開クカ、又ハ書面ヲ以テ媾和條件ヲ示スカ、孰レナリトモ帝國全權辨理大臣ノ擇ブ所ニ從フニ付、其ノ回答ヲ得度旨同三十日（第六十一號）申出デタリ。越テ四月一日陸奧全權辨理大臣ハ李經方ニ會晤シ、媾和條約案ヲ提出スルニ當リ、談判ノ順序ヲ定メ置度旨ヲ告ゲ、該條約案ニ付每條諾否如何ヲ聞キ、條ヲ逐テ決定スルノ方法ヲ執ルコトヲ主張シタリシニ、彼ハ條約案全體ヲ同時ニ提出スルコトヲ希望シ、反覆之ヲ求メタルニ依リ、終ニ其ノ需ニ應ジ、同日ヨリ四日ヲ限リ條約案全體ヲ承諾スルカ、又ハ或條項ニ付更ニ商酌シ度旨ヲ決答スベキコトヲ約定シ、其ノ末、彼ヨリ（第六十二號）ノ通リ申來リタルニ依リ、帝國全權辨理大臣ハ井上外務書記官中田外務大臣祕書官ヲ清國使節ノ旅館ヘ遣ハシ、媾和條約案（第六十三號）ヲ手交セシメ（第六十四號）ノ書面ヲ持歸レリ。玆ニ右約案ノ要點ヲ列擧スレバ左ノ如シ。

一、清國ニ於テ朝鮮ノ完全無缺ナル獨立國タルコトヲ確認スルコト。

一、清國ハ左記ノ土地ヲ日本國ニ割與スルコト。

一、奉天省南部ノ地、但シ鴨綠江口ヨリ三叉子ニ至リ三叉子ヨリ北ノ方楡樹底下ニ亘リ、同所ヨリ正西ニ遼河ニ達シ、該河流ニ沿フテ下リ北緯四十一度ノ線ニ達シ、北緯四十一度東經百二十

二度ノ點ヨリ同經度ニ從フテ遼東灣北岸ニ至ル遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島。

一、清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀三億兩ヲ日本國ヘ支拂フベキコト。

一、日清兩國間ノ條約ハ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ基礎トシ之ヲ締結シ、又清國ハ日本國政府及其ノ臣民ニ對シ最惠國待遇ヲ與フベキコト。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲スコト。

一、從來開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ左ノ市港ヲ日本臣民ノ商業住居工業及製造ノ爲メニ開クベシ。

北京、沙市、湘潭、重慶、梧洲、蘇州、杭州。

二、旅客及貨物運送ノ爲メ日本國汽船ノ航路ヲ左ノ場所ニ迄擴張スベシ。

（イ）楊子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル。

（ロ）楊子江ヨリ湖江ヲ溯テ湘潭ニ至ル。

（ハ）西江ノ下流廣東ヨリ梧洲ニ至ル。

（ニ）上海ヨリ吳淞江及運河ニ入リ蘇州、杭州ニ至ル。

三、日本國臣民ニシテ輸入ノ際又ハ其ノ後ニテ其ノ輸入品原價百分ノ二ノ抵代稅ヲ納メタル上ハ、清國內地ニ於ケル一切ノ稅金賦課金取立金ハ免除セラルベキモノトス。

日本臣民ガ清國ニ於テ購買シタル清國貨品及生產物ニシテ輸出ノ爲メナルコトヲ言明シタル上ハ總テ抵代稅ヲ納ムルコトナク、前記ノ場合ト同樣ニ一切ノ稅金、賦課金、取立金ヲ免除セラルベシ。又清國ノ內地消費ニ供スベキ清國貨品及生產物ヲ日本國船舶ニテ清國開港間ニ運送スルニハ一タビ現行沿海貿易稅ヲ納メタル上ハ、前記ノ場合ト同樣右運送中輸出入稅ハ勿論其ノ他一切ノ稅金ヲ免際セラルベシ。

四、日本國臣民ハ清國內地ニ於テ購入シタル貨品及產物又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ倉入スル爲メ何等ノ稅金取立金ヲモ納入スルコトナク倉庫ヲ借リ入ルル權利ヲ有スベシ。

五、日本國臣民ガ清國ニ於テ納ムル諸稅及手數料ハ庫平銀ヲ以テスヘシ、而シテ右諸稅及手數料ハ日本國本位銀貨ヲ以テ代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

六、日本國臣民ハ清國ニ於テ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又各種器械類ヲ輸入スルコトヲ得。

七、清國ハ黃浦河口ニ在ル吳淞淺瀨ヲ取除クコトニ着手スルコトヲ約スベシ。

一、清國ハ媾和條約ヲ誠實ニ施行スヘキ擔保トシテ日本軍隊ガ奉天府及威海衞ヲ一時占領スルコトヲ承諾スルコト。

此外尙ホ償金拂込ノ期限、割與地ノ經堺劃定、割與地方住民ノ處分、帝國軍隊撤回ノ期限、俘虜ノ還附等ニ關スル規定。

然ルニ同五日ニ至リ、清國使節ハ（第六十五號）ノ通リノ覺書ヲ送リ來リ、其ノ書面タルヤ終始清國々內ノ事情ヲ縷陳シ、更ニ我ガ酌察ヲ加フルコトヲ求ムルニ過ギズシテ、毫モ其ノ要領ヲ得ザルニ依リ、帝國全權辨理大臣ハ翌六日（第六十六號）ノ通リ其ノ提出セシ所ノ媾和條約案ニ向テ更ニ條項又ハ全體ニ付諾否如何ヲ明答アリ度キ旨ヲ要求セリ。

先是李鴻章遭難ノ爲メ媾和談判ニ遲緩ヲ來スルノ恐レアルヲ以テ、四月一日在東京米國公使ヲ經テ、談判ノ進行ニ便ナラシムル爲メ、李經方ヲ全權委員ニ任命スル樣清國政府ヘ申シ込ミタリシニ、清國政府ハ之ヲ納レ、在北京米國公使ヨリ四月六日發ノ電信ニテ李經方ヲ全權委員ニ任命セシ旨ヲ通知シ、又李鴻章ヨリモ同七日附ヲ以テ（第六十七號）ノ通リ、帝國全權辨理大臣ヘ通知シ來リタルニ依リ、我ヨリモ同日附ヲ以テ（第六十八號）ノ通リ右承知ノ旨ヲ回答セリ。

前述ノ如ク媾和條約案ニ對スル清國使節ノ答覆其ノ要領ヲ得ザルヲ以テ、同八日伊藤全權辨理大臣ハ新任清國全權大臣李經方ヲ其ノ旅館ニ招キ、縷々辯論スル所アリタリシニ、其ノ結果トシテ清國使節ハ九日ニ至リ（第六十九號）ノ通リノ覺書ヲ添ヘ、其ノ修正案ヲ提出セリ。而シテ右修正案ニ依レバ、其ノ緒言ニ於テ既ニ多少ノ變更ヲ加ヘタルノミナラズ、其ノ本文ニ於テモ又我ヨリ提出シタル條件ノ重要ナルモノニ對シ左ノ修正ヲ加フルコトヲ提議シタリ。

一、朝鮮ノ獨立ハ日清兩國ニ於テ之ヲ確認スルコト。

一、土地ノ割與ハ奉天省ノ安東縣、寬甸縣、鳳凰廳、岫巖州及澎湖列島ニ限ルコト。

一、賠償金ハ一億兩ニ減シ、利子ヲ附加セザルコト。

一、日清通商條約ハ清國ト歐洲諸國トノ條約ヲ基礎トシテ之ヲ締結スベク、又納稅、倉入開市、開港、航海等ニ關シテハ、日本國臣民ニ對シテ最惠國ノ待遇ヲ與フベシ、且ツ媾和條約批准交換ノ日ヨリ新通商航海條約締結ノ日迄ノ日本政府及其ノ臣民ハ總テノ點ニ於テ最惠國ノ待遇ヲ受クベシ、之ト均シク右通商航海條約締結ニ至ル迄ハ清國政府及其ノ臣民モ亦日本ニ於テ最惠國ノ待遇ヲ受クベキコト。

一、清國ニ於テ媾和條約ヲ誠實ニ施行スル擔保トシテ日本軍隊ハ一時威海衞ノミヲ占領スルコト。

一、將來ニ於テ日清兩國間ノ紛議又ハ戰爭ヲ避クル爲メ、媾和條約其他通商航海條約等ノ解釋又ハ其實施ニ關シ問題ノ生ジタルトキハ兩國協議ノ上第三友國ニ依賴シ仲裁者ヲ撰定シ、其ノ裁

斷ニ一任スベシ、若シ第三友國ノ義ニ關シ日清兩國ノ協議整ハザルトキハ合衆國大統領ヲシテ仲裁者ヲ指定セシムベキコト。

然ルニ右修正タル、到底帝國政府ニ於テ同意シ得ベキモノニ非ザルヲ以テ、同十日會合ノ節更ニ（第七十號）ノ通リ再修正案ヲ提出シタリ、其ノ要點左ノ如シ。

第一、緒言ニ對シテハ帝國全國辨理大臣ハ如何ナル修正ヲ加フルコトヲモ承諾スルコト能ハズ。

第二、朝鮮ノ獨立ニ關シテハ原案第一條ノ語句ヲ變改スルコトヲ得ズ。

第三、土地ノ割與ニ關シテハ臺灣及澎湖列島ハ原案ノ通リニシテ、奉天省ノ南部ノ地ニ付テハ鴻綠江口ヨリ該江ヲ溯リ、安平河口ニ至リ、該河口ヨリ鳳凰城、海城及營口ニ亘ル折線以南ノ地ニ減ズルコト、但シ前記ノ各城市ヲ包含ス。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼。

第四、償金ハ二億兩ニ減ズルコト。

第五、割與地住民ノ件ニ關スル修正案ニハ同意スルヲ得ズ。

第六、通商條約ノ件ニ關シテハ原案ノ通リ清國ト歐洲諸國トノ間ニ存在スル諸條約章程ヲ以テ日清兩國間諸條約ノ基礎トナシ又諸國ハ該條約締結ニ至ル迄ハ日本國政府及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲スベシ。

一、清國ニ於テ現ニ各外國ニ向テ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本國臣民ノ商業工業、住民及製造ノ爲メ左ノ市港ヲ開クベシ。

沙市、重慶、蘇州、杭州。

二、日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所ニ迄擴張スベシ。

（イ）楊子江上流、湖北省、宣昌ヨリ四川省重慶ニ至ル。

（ロ）上海ヨリ吳淞及運河ニ入リ蘇州杭州ニ至ル。

三、日本國臣民ハ清國內地ニ於テ購買シタル貨物又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ倉入スル爲メ何等ノ稅金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルヽノ權利ヲ有ス。

四、日本國臣民ガ清國ニ於テ納ムル諸稅及手數料ハ庫平銀ヲ以テシ、而シテ右ハ日本國本位銀貨ヲ以テ其代表價格ニ因リテ納金スルコトヲ得ベシ。

五、日本國臣民ハ清國ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ベシ。

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ內國運送稅、內地稅、賦課稅、取立金ニ關シ又清國內地ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民ガ清國ヘ輸入シタル商品ト同

一ノ取扱ヲ受ケ且ツ同一ノ特典免除ヲ享有スベキモノトス。

第七、媾和條約施行ノ擔保ニ關スル件ニ付テハ清國全權大臣ノ修正案ニハ同意スルコト能ハズト雖モ、原案ニ多少ノ修正ヲ加ヘ、山東省威海衞ノミヲ占領スルコトヲ承諾ス。而シテ軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ通商航海條約ノ批准交換後ニ至リ賠償金ノ殘額ニ對シ清國海關稅ヲ以テ抵當トナスコトヲ承諾スルニ於テハ、日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ撤回スベシ。

第八、將來日清兩國間ニ起ルベキ問題ヲ仲裁者ノ裁斷ニ一任スルノ件ニ付テハ帝國全權辨理大臣ハ同意スルコトヲ得ズ。

右修正ノ理由ニ付テハ、十日ノ會合ニ於テ既ニ伊藤全權辨理大臣ヨリ詳述シタリト雖モ、尙ホ念ノ爲メ翌十一日（第七十一號）ノ通リ書翰ヲ以テ右ノ修正ハ全ク最終ノモノナルコトヲ申送レリ。然ルニ清國使節ハ尙ホ之ニ服セズ、同十二日（第七十二號）ノ通リ我要求ノ不當ナル旨ヲ申出タルニ因リ、伊藤全權辨理大臣ハ翌十三日（第七十三號）ノ書翰ヲ送リテ我ガ再修正案ニ揭ゲタル條件ハ媾和ノ爲メニ爲シタル最極限ノ讓步ナルガ故ニ、今日ハ最早討議ヲ許スベキ限リニ在ラザル旨ヲ以テセリ。同十四日李經方ハ伊藤全權辨理大臣ニ面晤シ、明日迄其ノ決答ヲ延バスコトヲ求メ、其ノ旨尙ホ（第七十四號）ノ通リ書翰ニテ申來レリ。而シテ翌十五日更ニ會合シテ最後ノ談判ヲ爲シ、竟ニ十七日ヲ以テ兩國全權大臣ノ間ニ左ノ媾和條約、別約及追加休戰條約ヲ締結シ且議定書ニ調印セリ。

○媾和條約

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ兩國及其ノ臣民ニ平和ノ幸福ヲ回復シ、且ツ將來紛議ノ端ヲ除クコトヲ欲シ媾和條約ヲ締結スル爲メニ大日本國皇帝陛下ハ、內閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ヲ、大清國皇帝陛下ハ太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章二品項戴前出使大臣李經方ヲ各其ノ全權大臣ニ任命セリ。因テ各全權大臣ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ、其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ左ノ諸條欵ヲ協議決定セリ。

第一條　清國ハ朝鮮ノ完全無缺ナル獨立自主ノ國タルコトヲ確認ス。因テ右獨立自主ヲ損害スベキ朝鮮國ヨリ清國ニ對スル貢獻典禮等ハ將來全ク之ヲ廢止スベシ。

第二條　清國ハ左記ノ土地主權竝ニ該地方ニアル城壘兵器製造所及官有物ヲ永遠日本國ニ割與ス。

一、左ノ經界內ニ在ル奉天省南部ノ地。

鴻綠江口ヨリ該江ヲ溯リ安平河口ニ至リ、該河口ヨリ鳳凰城、海城、營口ニ亘リ遼河口ニ至ル折線以南ノ地、併セテ前記ノ各城市ヲ包含ス。而シテ遼河ヲ以テ界トスル處ハ該河ノ中央

ヲ以テ經界トスルコト、知ルベシ。

遼東灣東岸及黃海北岸ニ在テ奉天省ニ屬スル諸島嶼。

二、臺灣全島及其ノ附屬諸島嶼。

三、澎湖列島卽チ英國「グリーンウイチ」東經百十九度乃至百二十度及北緯二十三度乃至二十四度ノ間ニ在ル諸島嶼。

第三條　前條ニ揭載シ附屬地圖ニ示ス所ノ經界線ハ本約批准交換後直チニ日清兩國ヨリ各二名以上ノ境界共同劃定委員ヲ任命シ、實地ニ於テ確定スル所アルベキモノトス。而シテ若本約ニ揭記スル所ノ境界ニシテ地形上又ハ施政上ノ點ニ付完全ナラサルニ於テハ、該境界劃定委員ハ之ヲ更正スルコトニ任ズベシ。該境界劃定委員ハ成ルベク速ニ其ノ任務ニ從事シ其ノ任命後一箇年以內ニ之ヲ終了スベシ。

但シ該境界劃定委員ニ於テ更正スル所アルニ當リテ、其ノ更定シタル所ニ對シ日清兩國政府ニ於テ可認スル迄ハ本約ニ揭記スル所ノ經界線ヲ維持スベシ。

第四條　清國ハ軍費賠償金トシテ庫平銀貳億兩ヲ日本國ニ支拂フベキコトヲ約ス。右全額ハ都合八回ニ分チ初回及次回ニハ每回五千萬兩ヲ支拂フベシ。而シテ初回ノ拂込ハ本約批准交換後六個月以內ニ次回ノ拂込ハ本約批准交換後十二個月以內ニ於テスベシ。殘リノ金額ハ六個年賦ニ分チ其ノ第一次ハ本約批准交換後二個年以內ニ其ノ第二次ハ本約批准交換後三個年以內ニ、其ノ第三次ハ本約批准交換後四個年以內ニ、其ノ第四次ハ本約批准交換後五個年以內ニ、其ノ第五次ハ本約批准交換後六個年以內ニ、其ノ第六次ハ本約批准交換後七個年以內ニ支拂フベシ。又初回拂込ノ期日ヨリ以後未ダ拂込ヲ了ラザル額ニ對シテハ、每年百分ノ五ノ利子ヲ支拂フベキモノトス。但シ清國ハ何時タリトモ該賠償金ノ金額或ハ其ノ幾分ヲ前以テ一時ニ支拂フコトヲ得ベシ。如シ本約批准交換後三個年以內ニ該賠償金ノ總額ヲ皆濟スルトキハ、總テ利子ヲ免除スベシ。若シ夫迄ニ二個年半若ハ更ニ短期ノ利子ヲ拂込ミタルモノアルトキハ之ヲ元金ニ編入スベシ。

第五條　日本國ハ割與セラレタル地方ノ住民ニシテ、右割與セラレタル地方ノ外ニ住居セムト欲スル者ハ自由ニ其ノ所有不動產ヲ賣却シテ退去スルコトヲ得ベシ。其ノ爲メ本約批准交換ノ日ヨリ二個年間ヲ猶豫スベシ。但シ右年限ノ滿チタルトキハ未ダ該地方ヲ去ラザル住民ヲ日本國ノ都合ニ因リ日本國民ト視爲スコトアルベシ。

日清兩國政府ハ本約批准交換後直チニ各一名以上ノ委員ヲ臺灣省ヘ派遣シ、該省ノ受渡シヲ爲スベシ。而シテ本約批准交換後二個月以內ニ右受渡シヲ完了スベシ。

第六條　日清兩國間ノ一切ノ條約ハ交戰ノ爲メ消滅シタレバ清國ハ本約批准交換ノ後速ニ全權委員ヲ任命シ、日本國全權委員ト通商航海條約及陸路交通貿易ニ關スル約定ヲ締結スベキコトヲ約ス。

而シテ現ニ清國ト歐洲各國トノ間ニ存在スル諸條件章程ヲ以テ該日清兩國諸條約ノ基礎トナスベシ。又本約批准交換ノ日ヨリ該諸條約ノ實施ニ至ル迄ハ清國ハ日本政府、官吏、商業、航海、陸路交通貿易工業船舶及臣民ニ對シ總テ最惠國待遇ヲ與フベシ。

清國ハ右ノ外左ノ讓與ヲ爲スベシ、而シテ該讓與ハ本約調印ノ日ヨリ六個月ノ後有效ノモノトス。

第一、清國ニ於テ現ニ各外國ニ向ツテ開キ居ル所ノ各市港ノ外ニ日本臣民ノ商業、住居、工業及製造業ノ爲メニ左ノ市港ヲ開クベシ。但シ現ニ清國ノ開市場、開港場ニ行ハルル所ノ同一ノ條件ニ於テ同一ノ特典及便益ヲ享有スベキモノトス。

一、湖北省荆州府沙市

二、四川省重慶府

三、江蘇省蘇州府

四、浙江省杭州府

日本國政府ハ以上列記スル所ノ市港中何レノ處ニモ領事官ヲ置クノ權利アルモノトス。

第二、旅客及貨物運送ノ爲メ、日本國汽船ノ航路ヲ左記ノ場所マデ擴張スベシ。

一、揚子江上流湖北省宜昌ヨリ四川省重慶ニ至ル。

二、上海ヨリ吳淞及運河ニ入リ蘇州杭州ニ至ル。

日清兩國ニ於テ新章程ヲ安定スル迄ハ前記航路ニ關シ適用シ得ベキ限リハ外國船舶清國內地水路航行ニ關スル現行章程ヲ施行スベシ。

第三、日本國臣民ガ清國內地ニ於テ貨品及生產物ヲ購買シ、又ハ其ノ輸入シタル商品ヲ清國內地ヘ運送スルニハ右購買品又ハ運送品ヲ倉入スル爲メ何等ノ稅金取立金ヲモ納ムルコトナク一時倉庫ヲ借入ルルノ權利ヲ有スベシ。

第四、日本國臣民ハ清國各開市場開港場ニ於テ自由ニ各種ノ製造業ニ從事スルコトヲ得ベク、又所定ノ輸入稅ヲ拂フノミニテ自由ニ各種ノ器械類ヲ清國ヘ輸入スルコトヲ得ベシ。

清國ニ於ケル日本國臣民ノ製造ニ係ル一切ノ貨品ハ各種ノ內國運送稅、內地稅、賦課稅、取立金ニ關シ、又清國內ニ於ケル倉入上ノ便益ニ關シ日本國臣民ガ清國ヘ輸入シタル商品ト同一ノ取扱ヲ受ケ、且同一ノ特典免除ヲ享有スベキモノトス。

此等ノ讓與ニ關シ更ニ章程ヲ規定スルコトヲ要スル場合ニハ、之ヲ本條ニ規定スル所ノ通商航海條約中ニ具載スベキモノトス。

第七條　現ニ清國版圖內ニ在ル日本國軍隊ノ撤回ハ本約批准交換後三個月內ニ於テスベシ、但シ次條ニ載スル所ノ規定ニ從フベキモノトス。

第八條　清國ハ本約ノ規定ヲ誠實ニ施行スベキ擔保トシテ日本國軍隊ノ一時山東省威海衞ヲ占領ス

ルコトヲ承諾ス。而シテ本約ニ規定シタル軍費賠償金ノ初回次回ノ拂込ヲ了リ、通商航海條約ノ批准交換ヲ了リタル時ニ當リテ清國政府ニテ右賠償金ノ殘額ノ元利ニ對シ充分適當ナル取極ヲ立テ清國海關稅ヲ以テ抵當ト爲スコトヲ承諾スルニ於テハ、日本國ハ其ノ軍隊ヲ前記ノ場所ヨリ撤回スベシ。若シ又之ニ關シ充分適當ナル取極立タサル場合ニハ該賠償金ノ最終回ノ拂込ヲ了リタル時ニ非ザレバ撤回ヲ行ハザルモノト承知スベシ。

第九條　本條約批准交換ノ上ハ直チニ其ノ時現ニ有スル所ノ俘虜ヲ還附スベシ。而シテ清國ハ日本國ヨリ斯ク還附セラレタル所ノ俘虜ヲ虐待若ハ處刑セザルベキコトヲ約ス。日本國臣民ニシテ軍事上ノ間諜若クハ犯罪者ト認メラレタルモノハ清國ニ於テ直チニ解放スベキコトヲ約シ清國ハ又交戰中日本國軍隊ト種々ノ關係ヲ有シタル清國臣民ニ對シ如何ナル處刑ヲモ爲サズ。又之ヲ爲サシメザルコトヲ約ス。

第十條　本約批准交換ノ日ヨリ攻戰ヲ止息スベシ。

第十一條　本約ハ大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ニ於テ批准セラルベク、而シテ右批准ハ芝罘ニ於テ明治二十八年五月八日卽チ光緒二十一年四月十四日ニ交換セラルベシ。右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ玆ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年四月十七日卽光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル。

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從二位勳一等　伯爵　伊藤博文　（記名）　印

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從二位勳一等　子爵　陸奧宗光　（記名）　印

大清帝國欽差頭等全權大臣（太子太博文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯）　李鴻章　（記名）　印

大清帝國欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣　李經方　（記名）　印

別約

第一條　本日調印シタル媾和條約第八條ノ規定ニ依リテ一時威海衞ヲ占領スベキ日本國軍隊ハ一旅團ヲ超過セザルベシ。而シテ該條約批准交換ノ日ヨリ清國ハ每年右一時占領ニ關スル費用ノ四分ノ一庫平銀五拾萬兩ヲ支拂フベシ。

第二條　威海衞ニ於ケル一時占領地ハ劉公島及威海衞灣ノ全沿岸ヨリ日本里數五里ノ地ヲ以テ其ノ區域ト爲スベシ。

右一時占領地ノ經界線ヲ距ルコト日本里數五里ノ地內ニ在リテハ、何レノ所タリトモ淸國軍隊ノ之ニ近ヅキ若クハ之ヲ占領スルコトヲ許サヾルベシ。

第三條　一時占領地ノ行政事務ハ仍ホ淸國官吏ノ管理ニ歸スルモノトス。但シ淸國官吏ハ常ニ日本國占領軍司令官ガ其ノ軍隊ノ健康、安全、紀律ニ關シ、又ハ之ガ維持、配置上ニ付必要ト認メ發スル所ノ命令ニ服從スベキ義務アルモノトス。

一時占領地內ニ於テ犯シタル一切ノ軍事上ノ犯罪科ハ日本國軍務官ノ裁判管轄ニ屬スルモノトス。

此ノ別約ハ本日調印シタル媾和條約中ニ悉ク記入シタルト同一ノ効力ヲ有スルモノトス。

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年四月十七日卽光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル。

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從二位

勳一等伯爵　伊　藤　博　文（記名）印

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從二位

勳一等子爵　陸　奥　宗　光（記名）印

大淸帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯

李　鴻　章（記名）印

大淸帝國欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣

李　經　方（記名）印

追加休戰定約

下ニ記名スル大日本國皇帝陛下ノ全權辨理大臣內閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文及全權辨理大臣外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光及大淸國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯李鴻章欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣李經方ハ媾和條約ヲ締結シタルヲ以テ穩カニ該條約ノ批准ヲ交換スルコトヲ得タル爲メ左ノ個條ニ同意シ之ニ記名調印スルモノナリ。

第一條　明治二十八年三月三十日卽光緒二十一年三月五日ニ締結シタル休戰定約ハ本日ヨリ二十一日間延期スベシ。

第二條　本約ヲ以テ延期シタル休戰ハ双方ヨリノ通知ヲ要セズ明治二十八年五月八日卽光緒二十一年四月十四日ノ夜半ニ於テ終了スベシ。然レドモ其迄ノ內ニ兩帝國ノ一方ニ於テ該媾和條約ヲ否決スルトキハ別ニ豫告ヲ用ヒズ直チニ本約ヲ終了シタルモノト爲スベシ。

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年四月十七日卽光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ作ル。

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從二位
勳一等伯爵　伊　藤　博　文（記名）印

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從二位
勳一等子爵　陸　奥　宗　光（記名）印

大清帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯
李　鴻　章（記名）印

大清帝國欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣
李　經　方（記名）印

議定書

大日本國皇帝陛下ノ政府及大清國皇帝陛下ノ政府ハ本日調印シタル媾和條約中ノ意義ニ付將來誤解ヲ生ズルコトヲ避ケムト欲スル目的ヲ以テ双方ノ全權大臣ハ左ノ約定ニ同意セリ。

第一、本日調印セシ媾和條約ニ附スル所ノ英譯文ハ該條約ノ日本文本文及漢文本文ト同一ノ意義ヲ有スルモノタルコトヲ約ス。

第二、若該條約ノ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニシタルトキハ前記英譯文ニ依リテ決裁スベキコトヲ約ス。

第三、左ニ記名スル所ノ全權大臣ハ本議定書ハ本日調印シタル媾和條約ト同時ニ各兩帝國政府ニ提供シ、而シテ該條約批准セラルヽトキハ本議定書ニ揭載スル所ノ諸約定モ別ニ正式ノ批准ヲ要セズシテ亦兩帝國政府ノ可認セシモノト見做スベキコトヲ約ス。

右證據トシテ兩帝國全權大臣ハ之ニ記名調印スルモノナリ。

明治二十八年四月十七日卽光緒二十一年三月二十三日下ノ關ニ於テ二通ヲ作ル。

大日本帝國全權辨理大臣內閣總理大臣從二位
勳一等伯爵　伊　藤　博　文（記名）印

大日本帝國全權辨理大臣外務大臣從二位
勳一等子爵　陸　奥　宗　光（記名）印

大清帝國欽差頭等全權大臣太子太傅文華殿大學士北洋大臣直隸總督一等肅毅伯
李　鴻　章（記名）印

大清帝國欽差全權大臣二品頂戴前出使大臣

李　經　方（記名）印

是ニ於テ清國使節ハ十七日半後下ノ關ヲ解纜シ天津ヘ向ケ歸國セリ。因テ伊藤博文、陸奥宗光兩全權辨理大臣ハ翌十八日大本營所在地廣島ニ歸リ拜謁ノ上詳カニ此回媾和談判ノ次第ヲ復命シタリシニ　天皇陛下ハ御滿足ニ思召サレ左ノ勅語ヲ賜ハレリ。

清國曩ニ全權大臣ヲ簡派シ我ニ和ヲ請ハシム

朕其ノ切實ナルヲ認メ乃チ卿等ニ授クルニ全權ヲ以テシ命ジテ清使ト會商セシム卿等尊俎折衝數日ヲ費シ遂ニ善ク妥協ヲ得タリ今卿等カ奏スル所ノ梗概ハ朕カ旨ニ副フ洵ニ帝國ノ光榮ヲ顯揚スルニ足ル朕卿等カ功ヲ偉トシ深ク之ヲ嘉尚ス。

斯クテ同二十日ニ於テ右媾和條約及別約ヲ御批准アラセラレ（別紙第七十五號）而シテ翌二十一日右批准交換ノ爲メ內閣書記官長伊東巳代治ヲ全權辨理大臣ニ任命シ（別紙第七十六號）ノ通リノ全權御委狀ヲ授與シ給ヘリ。

三、三國干涉

日清媾和條件ノ歐洲諸國ニ知レ渡ルヤ、露獨佛三國政府ハ各其ノ東京駐劄公使ニ訓令スル所アリテ、四月二十三日（第七十七號第七十八號第七十九號）ノ通リ日本ニ於テ遼東半島ヲ永遠ニ占領スルコトハ清國帝都ニ危フシ、朝鮮ノ獨立ヲ有名無實ニシ、隨テ極東亞洲ノ平和ニ永久ノ妨害ヲ來スノ虞アルニ因リ、日本政府ハ該半島ノ永遠占領權ヲ拋棄セラレムコトヲ友誼上勸告スル旨申出デタリ。帝國政府ハ此干涉ノ主謀者ハ必ズ露國政府ナルベシト信ジタルヲ以テ、先ヅ露國政府ヲ動カスニ如カズト決シ、同二十五日（第八十號）ノ通リ在露帝國特命全權公使ニ電訓シテ同政府ノ再考ヲ求メシメタリシガ、同二十八日同公使ヨリ露國皇帝ハ帝國政府ノ請求ヲ肯諾セラレザル旨（第八十一號）ノ通リ回電アリタリ。因テ五月一日二日ノ兩日ニ於テ（第八十二號）ノ通リ三國政府友誼上ノ勸告ヲ納レ、批准ヲ交換シテ以テ我ガ名譽ノ威嚴トヲ全フシタル後、金州廳ヲ除キ遼東半島ノ永久占領權ヲ拋棄スベキ旨三國政府ニ回答シタリシニ、露國政府ハ帝國政府ノ回答ニハ滿足スルコト能ハズ、日本國ガ旅順口ヲ占領スルコトハ障碍アル故ニ、其ノ最初ノ勸告ヲ主張シテ動カザルベシト言明セシ旨（第八十三號）ノ通リ在露帝國特命全權公使ヨリ電報アリタルヲ以テ、帝國政府ハ同五日在露獨佛帝國公使ニ電訓シ、帝國政府ハ三國政府ノ忠告ニ依リ遼島半島ノ永遠占領權ヲ拋棄スベキコトヲ約スル旨（第八十四號）回答セシメタリ。是ニ於テ三國政府ハ各其ノ公使ヲシテ一般ノ平和ノ爲メ帝國政府ノ處置ヲ賀スル旨同九日（第八十五號第八十六號第八十七號）ノ通リ申出タリ。

是ヨリ先四月二十四日帝國政府ハ米國公使ヲ經テ清國皇帝陛下ハ何時頃媾和條約ヲ批准セラルベキヤヲ（第八十八號）清國政府ニ問ヒシニ、五月二日ニ至リ、清國政府ヨリ米國公使ヲ經テ媾和條

約ハ未ダ清國皇帝陛下ヨリ下附セラレザル旨（第八十九號）ノ通リ回答アリ。又同政府ハ遼東半島ニ關シ帝國政府ト露獨佛三國政府ト交渉ノ事アルヲ聞知シ、之ヲ理由トシテ批准交換ノ期日ヲ延長セムコトヲ同日（第九十號）ノ通リ申出タレドモ、帝國政府ニ於テハ毫モ批准交換ノ期日ヲ延長スルノ必要アルヲ見ザルノミナラズ、平和回復ノ爲メ反テ一日モ速ニ之ヲ交換スルコトヲ要セリ。又若シ露佛獨三國政府ヨリノ勸告ノ結果トシテ媾和條約中變更ヲ要スルコトアリトセバ、批准交換後ニ至リ修正ヲ議スルノ容易ナルニ如カザル旨（第九十一號）ノ通リ回答セリ。然ルニ同七日ニ至リ、清國政府ハ露獨佛三國政府ヨリ批准ヲ延期スベキ旨申出タリトテ更ニ（第九十二號）ノ通リ批准交換ノ延期及休戰期限ノ延長ヲ請ヒタルニ因リ、帝國政府ハ露獨佛三國トノ交渉事件モ最早其ノ局ヲ結ビタル後ニ至リ、再ビ清國トノ戰鬪ヲ繼續スルノ必要ナキヲ以テ、五日間休戰ヲ延バシ、其ノ期限内ニ可成速ニ批准交換スベキ旨（第九十三號）ノ通リ回答シタリシニ、翌八日（第九十四號）ノ通リ批准交換ノ義ニ關シ三國政府ヨリノ回答ニ接シタレバ、八日ヲ以テ批准交換スル樣已ニ芝罘ニ派遣シ置キタル全權委員ニ訓令シタリシ旨清國政府ヨリ申來レリ。

斯クテ芝罘ニ於テハ五月八日伊東全權辨理大臣ハ批准文ニ代フル爲メ（第九十五號）ノ通リノ外交文書ヲ清國換約全權委員ヨリ徵シ、遂ニ其ノ夜十一時三十分兩國全權大臣ノ間ニ於テ批准ヲ交換シ、（第九十六號）ノ通リノ交換證書ヲ互換シタリ。

因テ帝國政府ハ五月十三日ヲ以テ媾和條約、別約及議定書ヲ公布シ併セテ遼東半島拋棄ニ關スル十日附詔勅（別紙第九十七條）ヲ渙發セラレタリ。

（第一號）

電信譯文（千八百九十四年十一月二十二日午後十時四十分發二十三日午後十時十五分着）

東京米國公使　　北京米國公使

日本國外務大臣ニ左ノ通リ傳達セラレタシ。

清國ハ直接ニ媾和談判ヲ開クコトヲ本使ニ委任シ且ツ依賴セリ。

其條件ハ

朝鮮獨立ノ承認

相當ノ償金辨償

（第二號）

口上書譯文

北京及東京ニ於ケル合衆國ノ代表者ヲ經テ清國ノ申出タル提議ハ平和ノ基礎トシテ日本國ノ承諾スル能ハザル所ノモノナリ。

現今ノ狀況ニテハ清國政府ハ滿足ナル媾和ノ基礎ニ同意セムト欲スルガ如キ心情アリトモ思ハレ

ズ。然レドモ若シ清國政府ニ於テ眞實ニ和睦ヲ願望シ、之ガ爲メ正當ノ資格ヲ具ヘタル全權委員ヲ任命スルニ於テハ日本國政府ハ兩國全權委員ヲ會合セシメタル上、日本國政府ガ因テ以テ戰爭ヲ息ムルコトニ同意スベキ條件ヲ宣言スベシ。

千八百九十四年十一月二十六日東京外務省ニ於テ（但シ十一月二十七日米國公使ヘ交付）

（第三號）

電　信　譯　文（十一月三十日午前八時發）

東京米國公使　　北京米國公使

日本國外務大臣ヘ左ノ事ヲ傳達セラレタシ。

閣下ノ暗號電信中ニハ日本國政府ハ何ヲ以テ媾和ノ爲メニ充分ナル基礎ト見做スヤヲ明言セザルガ故ニ清國政府ニ於テハ日本政府ノ意見ノ存スル所ヲ推知スルノ道ナク、隨テ媾和ノ件ヲ議セシムル爲メ清國ヨリ大使ヲ任命スルコト難澁ナル旨ヲ申告スルコトヲ清國政府ヨリ本使ニ依賴セリ。又清國ヲシテ事ニ處スルコトヲ得セシメムカ爲メ兩國ノ將ニ議セントスル問題ノ概要ヲ日本國政府ヨリ垂示セラレムコトヲ清國ニ於テ希望シ居レリ。

（第四號）

口上書譯文

清國駐劄米國公使ノ傳ヘラレシ所ニテハ、清國政府ハ和ヲ請フベキヤ否ヤニ關シ今尙ホ確定スル所ナキガ如シ。然ルニ戰爭ヲ止息スルコトヲ請求セシハ日本國ニ非ラズシテ清國ナリ。是故ニ日本國ニ於テハ前キニ申述ベタル如ク適當ノ資格ヲ具ヘタル兩國大臣中ヨリ任命セラレタル全權委員相會シタル上ニ於テ、初メテ日本國ヨリ媾和條件ヲ宣言スルコトヲ得ベキ旨茲ニ重ネテ申述ベザルヲ得ズ。因テ今若シ清國ニ於テ之ヲ肯諾スルコト能ハザル以上ハ夫迄ノ事ニテ止メザルヲ得ズ。

千八百九拾四年十二月二日東京外務省ニ於テ

（第五號）

電　信　譯　文（十二月十二日午後九時二分發　同十三日午前十一時十五分着）

東京米國公使　　北京米國公使

日本國外務大臣ヘ左ノ通リ通知セラレタシ。

日本國政府ガ前回ノ提議ヲ接納スルコトヲ拒ミタルハ、清國ノ遺憾トスル所ナリ。清國政府ハ日本國政府ノ申述ル所ニ從ヒ、全權ヲ帶ビタル委員ヲ任命シ、和ヲ結ブノ方法ヲ商議スル爲メ、日本國ノ全權委員ト會合セシムルコトヲ提議ス。

清國政府ハ上海ヲ以テ委員會合ノ地ト爲スコトヲ建議ス。

清國政府ハ何時委員會合ノ運ニ至ルベキヤヲ前以テ之ヲ承知シタシ。

（第六號）

口上書譯文

若シ清國政府ニ於テ和ヲ結ブベキ全權ヲ帶ビタル委員ヲ任命スルニ於テハ、日本國政府ハ何時ニテモ委員ヲ任命スベシ。但シ日本國政府ニテ右任命ヲ爲スニ先チ清國政府ヨリ其ノ委員ノ氏名官位ヲ日本國政府ニ通知スルコトヲ必要トス。

委員會合ノ地ハ必ズ日本國內ニ於テセザルヲ得ズ。

千八百九十四年十二月八日東京外務省ニ於テ

（第七號）

電信譯文（十二月二十日午後八時三十三分發）

北京米國公使

東京米國公使

本使ハ左ノコトヲ日本政府ヘ傳達スルノ光榮ヲ有ス。

和議ヲ商訂スル爲メ清國政府ハ尙書銜總理衙門大臣戶部左侍郎張蔭桓及頭品頂戴兵部右侍郎署湖南巡撫邵友濂ヲ全權委員トシテ日本國ニ派遣シ、日本國全權委員ト會同商議セシム。

清國ハ往復ノ便利ノ爲メ日本國ガ上海近傍ニ於テ會商ノ場所ヲ撰定セラルヽコトヲ願フ。

清國ハ日本國ガ直チニ全權委員ヲ任命シ、速ニ會商ノ期日ヲ定メ、而シテ日本國ニテ全權委員ヲ任命シタル日ニ於テ兩國ニテ休戰ヲ始ムル期日ヲ決定スベキコトヲ望ム。

清國ハ長崎ノ地ニ於テスルコトヲ建議ス。

（第八號）

口上書譯文

日本國政府ハ清國政府ニテ任命シタル二名ノ全權委員ト和議ヲ締結スベキ全權ヲ帶ビタル一名若ハ一名以上ノ全權委員ヲ任命スベシ。日本國政府ハ廣島ヲ以テ全權委員會合ノ地ト撰定ス。而シテ右會合ハ清國全權委員廣島ニ到着ノ後四十八時間以內ニ之ヲ開クベシ。尙ホ會合ノ時日ト場所トハ清國全權委員廣島ニ到着ノ後可成速ニ之ヲ通牒スベシ。清國政府ハ其ノ全權委員ノ本國發程ノ日取及廣島ヘ到着ノ豫定日取ヲ前以テ日本國政府ヘ通告スヘキコト。休戰ノ條件ニ至テハ假令日本國政府ニ於テ休戰ヲ許諾スルコトアリトスルモ、兩國全權委員ニ於テ會合ノ上ニ非ザレバ其ノ條件ヲ明言セザルベシ。

千八百九十四年十二月二十六日東京外務省ニ於テ

（第九號）

電信譯文（十二月二十九日午後五時發　同三十日午前十時着）

北京米國公使

東京米國公使

十二月二十九日清國ハ日本國ニテ任命スベキ一名若クハ一名以上ノ全權委員ノ姓名官職ヲ知ルコトヲ欲ス。又清國全權委員ガ廣島ニ到着スルニハ何レノ地若クハ何レノ港ニ於テ上陸スベキヤヲ明告セラレムコトヲ日本國外務大臣ニ求ム。清國ハ清國全權委員ガ日本國ニ向テ出發ノ期日ヲ定ムル都合ノ爲メ日本國ヨリ電信ニテ回答アラムコトヲ望ム。

（第十號）

口上書譯文

日本國政府ハ清國全權委員ガ日本國ニ到着ノ上速カニ之ト會同セシムル爲メ、相當ノ官職ヲ有スル一名若ハ一名以上ノ全權委員ヲ任命スル積リナリ。日本政府ハ豫メ其ノ全權委員ノ姓名官職ヲ清國政府ニ通知スルノ必要ヲ認メズ。清國全權委員ハ中立國ノ國旗ヲ掲ゲタル船ニテ下ノ關ニ來着セラル、方都合善シ。而シテ同處ニテ日本國官吏迎接シ清國全權委員ガ同處ヨリ廣島ヘノ旅行ヲ便ナラシムル爲メ必要ノ準備ヲ爲スベシ。

千八百九十四年十二月三十一日東京外務省ニ於テ

（第十一號）

電信譯文（千八百九十五年一月五日午後五時二十分發同六日午前十一時三十分着）

東京米國公使　北京米國公使

一月五日清國政府ハ左ノコトヲ日本政府ニ達ス。

張蔭桓ハ七日ニ北京ヲ出發シ、山海關ヨリ中立國ノ國旗ヲ掲ゲタル汽船ニテ上海ニ赴キ、同地ニテ邵友濂ニ會シ、中立國船ニテ廣島ニ向テ渡航スベシ。但シ日本國ノ港ニ入ルトキハ慣例ニヨリ清國々旗ヲ掲グベシ。又全權委員上海出發ノ日時ハ米國公使ヨリ電報スベシ。

（第十二號）

口上書譯文

日本國政府ハ清國政府ヨリ申出ノ取極ヲ承諾スベケレドモ左ノ制限ヲ附スルコトヲ要ス。

日本國政府ヨリ特ニ派遣スル所ノ官吏下ノ關ニテ船ニ臨檢シ、清國全權委員ノ乘込居ルコトヲ見届ケル迄ハ清國々旗ヲ掲グルヲ得ズ。

千八百九十五年一月七日東京外務省ニ於テ

（第十三號）

大日本帝國皇帝陛下ノ外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ハ茲ニ大清帝國皇帝陛下ノ欽差全權大臣ニ向テ左ノコトヲ通知ス。

大日本帝國皇帝陛下ハ內閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文及本大臣ヲ全權辨理大臣ニ任命セラレ大清帝國皇帝陛下カ任命セラレタル欽差全權大臣ト媾和預定條約ヲ締結スルノ全權ヲ委任セラ

レタリ。

明治二十八年一月三十一日廣島ニ於テ

外務大臣　子爵　陸奥宗光（官印）

（封筒上宛名）

大清帝國欽差全權大臣張蔭桓閣下

大清帝國欽差全權大臣邵友濂閣下

（第十四號）

大日本帝國全權辨理大臣ハ玆ニ大清帝國欽差全權大臣ニ向テ左ノコトヲ通知ス。

大日本帝國全權辨理大臣ハ二月一日午前十一時廣島縣廳ニ於テ大清帝國欽差全權大臣ニ會晤スヘシ。而シテ其ノ時ニ於テ互ニ帶有スル所ノ全權委任狀ヲ交換スベシ。

明治二十八年一月三十一日廣島ニ於テ

大日本帝國全權辨理大臣　伯爵　伊藤博文

大日本帝國全權辨理大臣　子爵　陸奥宗光

（第十五號）（譯文）

本大臣命ヲ奉ジ、恭テ國書ヲ賫シ、貴國ニ出使シ光緒二十一年正月六日廣島ニ到リ、貴大臣ヨリノ來文ニ接シ、貴大臣ハ貴國大皇帝ノ旨ヲ奉ジ特ニ全權辨理大臣ノ任ヲ授カリ、本大臣ト媾和豫定條約ヲ締結セシメラルトノ事ヲ敬悉ス。貴國ガ舊好ヲ忘レラレザルノ意ヲ繦縫セムトテ、期ヲ請ヒ相會セムト欲スル折柄、其後貴曆二月一日午前十一時廣島縣廳ニ於テ會晤セムトノコトヲ通知セラレシニ因リ、本大臣ハ期ニ至リ前往スベシ。此段公文ヲ以テ回答ス。

光緒二十一年正月六日

大清欽命出使全權大臣　尚書銜總理各國事務大臣戶部左侍郎　張

頭品頂戴署湖南巡撫邵

大日本帝國欽命全權辨理大臣　伯爵　伊藤

大日本帝國欽命全權辨理大臣　子爵　陸奥　閣下

（第十六號）

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル大日本帝國皇帝（御名）此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス。

朕帝國ト大清國トノ和好ヲ回復シ、以テ東洋全局ノ平和ヲ維持セムガ爲メ、玆ニ信任スル所ノ內閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文外務大臣從二位勳一等子爵陸奥宗光ノ材能敏達ナルヲ以テ全權辨理大臣ニ簡命シ、委スルニ各別ニ又ハ共同シテ大清國全權委員ト會同協議シ、便宜事ヲ行ヒ、媾和豫定條約ヲ締結シ、之ニ記名調印スルノ全權ヲ以テス。而シテ其ノ議定スル所ノ各條項ハ朕親

シク檢閲ヲ加ヘ其ノ妥善ナルヲ認メタル後之ヲ批准スベシ。

神武天皇即位紀元二千五百五十五年明治二十八年一月三十一日廣島行在所ニ於テ親ラ名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム。

御名國璽

內閣總理大臣　伯爵　伊藤博文　副署

（第十七號）（譯文）

大清國大皇帝ハ大日本大皇帝ノ好ヲ問フ。我兩國誼同洲ニ屬シ、素ト嫌怨ナカリシニ、近ゴロ朝鮮ノ一事ヲ以テ彼此兵ヲ用ヰ民ヲ勞シ、財ヲ傷フハ議ニ已ムヲ得ザルニ非ズ現ニ米國ガ間ニ居リ調處スルヲ經ルニ因リ、中國ヨリ全權大臣ヲ派シ、貴國ヨリ全權大臣ヲ派シ、會商シテ妥カニ局ヲ結バン爲メ茲ニ特ニ尙書銜總理各國事務大臣戶部左侍郎張蔭桓、頭品頂戴署湖南巡撫邵友濂ヲ派シ、全權大臣ト爲シ、貴國ニ前往シテ商辨セシム。惟タ願フ、大皇帝接待セラレ該使臣ヲシテ以テ職ヲ盡スベカラシムルコトヲ、是レ望ム所ナリ。

（第十八號）（譯文）

皇帝ノ勅諭

尙書銜總理各國事務大臣戶部左侍郎張蔭桓頭品頂戴署湖南巡撫邵友濂ヲ派シテ全權大臣トナシ、日本ヨリ派出ノ全權大臣ト事件ヲ會商スベシ。爾ハ仍ホ一面ニ總理衙門ニ電達シ、朕ノ旨ヲ請フテ遵行スベシ。隨行ノ官員ハ爾ノ節制ニ聽カスベシ。爾其レ精誠ヲ彈竭シ謹テ事ヲ行ヒ委任ニ負ムクコト勿レ。爾其レ之ヲ愼メヨ、特ニ諭ス。

光緒二十年十二月初十日　勅命之寶（滿文）

（第十九號）

節　略

大日本帝國全權辨理大臣カ只今大清帝國欽差全權大臣ニ知照セシ所ノ全權委任狀ハ媾和結約ノ件ニ付大日本國皇帝陛下ヨリ該全權辨理大臣ニ附與セラレタル一切ノ權限ヲ包含スルモノナリ。

就テハ可成他日ノ誤解ヲ避クル爲メ、且ツ互相ノ主意ニ基キ、大日本帝國全權辨理大臣ハ大清帝國欽差全權大臣ヨリ知照セラレシ所ノ全權委任狀ハ未ダ査驗ヲ經ザレドモ、果シテ大清國皇帝陛下ヨリ媾和結約ノ件ニ付、該欽差全權大臣ニ附與セラレシ一切ノ權限ヲ包含スルモノナルヤ否、書面ヲ以テ確答アラムコトヲ望ム。

明治二十八年二月一日廣島ニ於テ

（第二十號）

光緒二十一年正月七日貴大臣ハ奉ズル所ノ貴國大皇帝ノ勅書一通竝ニ節略一通ヲ面會シテ交付セラレ、本大臣ニ於テハ何レモ既ニ敬悉ス。又本大臣ガ奉ズル所ノ全權職任ヲ洵問シ、公文ニテ回答スベキコトヲ請求セラル。本大臣貴國ニ出使シ奉ズル所ノ勅書ハ貴大臣ト卽日交換スル經タリ。本大臣ハ本國大皇帝ヨリ媾和締結ノ爲メ條欵ヲ會商シ、記名調印ノ全權ヲ與ヘラレタリ。議スル所ノ各條欵ハ迅速ニ辨理スルヲ期スルヲ以テ、電信ニテ本國ニ奏聞シ、勅旨ヲ請ヒ、期ヲ定メ調印シ、其ノ上ニテ議セシ所ノ條約書ヲ賫シテ中國ニ歸リ、恭テ大皇帝ノ親カラ披閱ヲ加ヘ果シテ妥善ナリトシテ批准セラルヽヲ待テ、施行スベキコトヽス。此段公文ヲ以テ聲明ス。

光緒二十一年正月八日

大清欽命出使全權大臣　尙書銜總理各國事務大臣戶部左侍郎　張頭品頂戴署湖南巡撫邵

大日本帝國欽命全權辨理大臣　伯爵　伊東博文閣下

大日本帝國欽命全權辨理大臣　子爵　陸奥宗光閣下

（第二十一號）

本大臣ガ今同僚ト俱ニ將サニ探ラムトスルノ處置ハ理論上止ムコトヲ得ザルノ結果ニ出ヅルモノニシテ、其責素ヨリ本大臣ニ歸スベキニ非ズ。

從來清國ハ殆ンド列國ト全然睽離シ時ニ或ハ列國ノ社團ニ伍伴スル爲メニ生ズル所ノ利益ヲ享受シタルコトアルモ其ノ交際ニ伴フ責守ニ至テハ往々自ラ顧ミザルコトアリ。清國ハ常ニ孤立ト猜疑トヲ以テ其ノ政策トス。故ニ其ノ外交上ノ關係ニ於テハ善隣ノ道ニ必要トスル所ノ公明ト信實トヲ缺クヤ宜ナリ。

清廷ノ欽差使臣ガ外交上ノ盟約ニ付公然合意ヲ表セシ後、却テ翻然トシテ之ニ調印スルコトヲ拒ミ、或ハ嚴然已ニ締結シタル條約ニ向テ更明白ナル理由モ無ク漫然之ヲ拒否セルノ實蹟一ニシテ足ラズ。

右等ノ實蹟ニ就テ之ヲ徵スルニ當時清廷ノ意中操持スルノ誠實ナク、其ノ談判ノ局ニ當レル欽差ニ至リテモ復必要ナル權利ヲ委任セラレザルコト比々皆然ラザル無キヲ見ルベシ。

故ニ今日ノ事アル、當初ニ於テ我帝國政府ハ先ヅ既往ノ事實ニ鑑ミ、全權ノ定議ニ協ハザル清廷ノ欽差トハ一切談判ヲ避クルノ決意ヲ以テ斷然媾和談判ヲ開クニ當リ、清廷ノ委任者ハ媾和締結ニ對スル全權ヲ有セザルベカラザルヲ以テ豫メ一ノ條件ト爲シタリ。而シテ清廷ハ此ノ條件ヲ恪遵シテ其ノ全權者ヲ我國ニ派遣セラレタリトノ確然タル擔保ヲ認メ、我ガ大日本帝國天皇陛下ハ本大臣竝ニ同僚ニ委スルニ清廷ノ全權者ト媾和ノ豫定條約ヲ締結シ之ニ調印スルノ全權ヲ以テシ給ヘリ。

清廷ハ既ニ此ノ擔保ヲ爲シタルニ拘ラズ、兩閣下ノ委任權ノ甚ダ不完全ナルハ、清廷ノ意未ダ和ヲ求ムルニ切ナラザルコトヲ確認スルニ足ルベシ。

昨日此席ニ於テ交換シタル雙方ノ委任狀ハ、一見以テ其ノ軒輕ノ甚ダシキヲ知ル、殆ンド批判ヲ俟タズト雖モ、茲ニ之ヲ指摘スルモ肯テ徒爲ノ業ナラザルヲ信ズ。卽チ一ハ開明國慣用ノ全權ノ意ニ適フモ他ハ全權委任ニ須要ノ諸項幾ト悉ク缺乏シタルコト是レナリ。加之兩閣下ガ携帶シタル委任狀ハ、閣下等ガ談判セラルベキ事項ヲ明カニセズ。又何等訂約ノ權利ヲ與ヘズ且ツ兩閣下ノ所爲ニ對スル清國皇帝陛下事後ノ批准ニ付テモ一言スル所ナシ。之ヲ要スルニ閣下等ニ委ネラレタル職權ハ本大臣及同僚ガ陳述スルノ所ヲ聞テ之ヲ貴政府ニ報ズルニ止マルモノト謂ハザルベカラズ。事既ニ茲ニ臻ル本大臣等ニ在テハ此上談判ヲ繼續スルコト決シテ能ハザル所ナリ。

或ハ云ハム、今回ノ事ニ於テハ敢テ從來ノ慣例ニ背キタルモノニ非ズト。

本大臣ハ斷ジテ此ノ如キ說明ヲ以テ足レリトスル能ハズ。清國內地ノ慣例ニ至リテハ本大臣素ヨリ之ヲ容喙スルノ權ナシ。然リト雖モ我國ニ關連スル外交上ノ案件ニ至テハ清國特殊ノ慣例ハ國際上ノ法則ニ凌駕セラレ裁抑ヲ受ケザルベカラザルコトヲ主張スベキハ獨リ本大臣ノ權利ナルノミナラズ又本大臣ノ義務ナリト信ズ。

抑〻平和ノ克復ハ至重至大ノ事タリ。今再ビ輯睦ノ道ヲ啓カムトセバ固ヨリ之ヲ目的トシテ條約ヲ締結スルノ必要アルノミナラズ、其ノ互ニ締約スル所亦必ズ之ガ實踐ヲ期スルノ誠衷ナカルベカラズ。

媾和ノ事ニ關シテハ我帝國ヨリ進テ清國ニ求ムベキ理由ヲ見ズト雖モ、我帝國ハ其ノ代表セル開明ノ主義ヲ重ムズルヲ以テ、清廷ガ至當ノ道軌ヲ履ミ、其ノ緒ヲ開クニ於テハ、之ニ應ズル義務アリト信ズ。然リト雖モ無效ノ談判若ハ紙約ニ止マルノ媾和ニ參與スルガ如キハ、將來堅ク謝絕スル所ナリ。我帝國ハ一旦締約シタル所ノ條件ハ必然之ヲ實踐スベキヲ明言スルト同時ニ、清國ニ向テモ亦此ノ如ク其ノ履行ヲ確カメザルベカラザルナリ。

此ノ故ニ清國ガ切實信誠ニ和ヲ求メ、其ノ使節ニ委スルニ現實ノ全權ヲ以テシ、且ツ其ノ締結セル條約ノ實踐ヲ擔保スルニ足ルベキ名望官爵アル者ヲ擇ンデ此ノ任ニ當ラシムルニ於テハ、我帝國ハ更ニ談判ニ應ズルヲ拒マザルベシ。

（第二十二號）

節　略

大日本帝國政府ハ東京駐劄及北京駐劄亞米利加合衆國特命全權公使ニ由テ、和ヲ講ズルニハ和約ヲ締結スルニ足ルベキ全權ヲ帶有スル委員ヲ簡命スベキコトヲ屢〻聲スルヲ經タリ。

然ルニ本月一日大清帝國欽差全權大臣ヨリ大日本帝國全權辨理大臣ヘ知照セラレタル所ノ命令狀

ハ其ノ之ヲ發セラレタル所以ノ目的ニ對シ、極メテ妥當ヲ缺クモノト爲サヾルヲ得ズ。何トナレバ該命令狀ニハ普通ニ全權委任狀ニ缺クベカラザルモノト知ラレタル所ノ要素ヲ殆ント具備セザレバナリ。

而シテ大日本帝國政府ノ所見ハ今尙ホ前キニ亞米利加合衆國特命全權公使ヲ經テ聲明セシ所ト相異ナルコトアルナシ。因テ大日本國皇帝陛下ヨリ授與セラレタル適當且ツ完全ナル全權委任狀ヲ帶有スル所ノ大日本帝國全權辨理大臣ハ、單ニ事件ヲ會商シ總理衙門ヘ咨報シ、旨ヲ請フテ遵行スベシトノ命令狀ノミヲ帶有セラル、所ノ大清帝國欽差全權大臣トハ會議スルコトヲ肯諾スルコト能ハズ。

是ヲ以テ大日本帝國全權辨理大臣ハ今回ノ會議ハ此ニ止メザルヲ得ズト宣言スルノ外ナキニ至レリ。

明治二十八年二月二日廣島ニ於テ

清國使節ハ其ノ出發ニ先タチ、更ニ一封ノ公文ヲ帝國全權辨理大臣ニ送リ來レドモ、既ニ開議ヲ拒絕セシ所ノ使節ヨリ公文ヲ領收スベキ謂ナキヲ以テ、余ヨリ一書ヲ裁シテ伍廷芳ニ寄セ、右來牘ヲ還送セリ。後ニ至リ彼ハ右ノ公文ヲ上海刊行洋文新聞ニ揭載セシヲ以テ余ノ書簡ヲ東京日々新聞ニ載セ之ヲ還送セシコトヲ世ニ公ケニセリ。

◎却送セラレタル清和使ノ文書

清國講和使張邵兩人ノ全權委任狀ニ不備ノ廉アリテ、我伊藤、陸奥兩全權ヨリ談判ヲ拒絕セラレタルノ顚末ハ林外務次官ガ帝國議會ニ朗讀セル彼我往復ノ公文ニ由テ明カニ世ニ示サル。然ルニ右公文中尙ホ一ノ漏レタルモノアリトテ、北淸日日新聞ハ去ル十八日ノ紙上ニ張、邵兩人ヨリ我全權ニ送リタル最後ノ公文ナルモノヲ揭ゲ、橫濱ニ發兌スル英字新聞之ヲ轉載シ、都下ノ邦字新聞又之ヲ譯出シタリ。當時往復ノ公文トテハ林次官ノ口ヲ假テ議會ニ報ゼラレシモノノ外之レアラン筈ナク、其ノ漏レタリトイヘルモノ如何ニモ怪シムベキヲ以テ、本社ハ其ノ筋ニ就テ探問ヲ遂ゲタルニ左ノ事實ヲ知リ得タリ。

兩國全權ノ談判ハ二月二日ヲ以テ我ヨリ送リタル第二ノ節略（林次官ノ議會ニ朗讀セシ第九號談判拒絕ニ關スル節略）ニテ全ク絕止ニ歸セリ。其ノ以後ニ於テハ全權委員トシテ互ニ文書ノ往復ヲナスベキ限リニアラズ。然ルニ張、邵兩人ハ其ノ出發歸程ニ止ル前ニ當リ、一書ヲ裁シテ之ヲ伊藤、陸奥兩大臣ニ送リ來レリ。兩大臣ニ於テハ談判拒絕ノ後ニ之ヲ受クルノ謂レアラザルヲ以テ、中田外務大臣祕書官ニ命ジ其書ヲ返却セシメラル。依テ中田祕書官ハ左ノ一書ヲ添ヘ直ニ件ノ書面ヲ張、邵兩人ノ書記官タル伍廷芳ニ却送セシメタリ。

以書翰致啓上候陳者張蔭桓、邵友濂兩閣下ノ使命ハ談判ノ絕止ト同時ニ終了シタルヲ以テ、

伊藤伯爵、陸奥子爵兩閣下ハ張蔭桓、邵友濂兩閣下トノ往復ヲ謝絶セラル、ノ外無之候因テ本官ハ茲ニ內閣總理大臣外務大臣兩閣下ノ命ニ依リ、別紙一通張蔭桓、邵友濂兩閣下ヘ御返附ノ爲メ貴下ヘ及御回送候　敬具

明治二十八年二月三日廣島ニ於テ

外務大臣祕書官　中田敬義

張蔭桓、邵友濂兩閣下ノ書記官

伍廷芳貴下

斯カレバ北淸日日新聞載スル所ノ張、邵兩人ノ書ハ所謂公文ニ非ザルハ勿論、其ノ書中記スル所ノモノ如何ナリシカ、又之ヲ問フヲ要セズ。彼等ハ我ニ向テ愚痴ヲ訴ヘルノ道アラザリシカ爲メニ一轉シテ之ヲ新紙ニ投ジテ幾分不平ヲ慰セント試ミタルモノノ如シ其情亦憫ムベシ。

（第二十三號）

電信譯文（二月七日午前十一時發　同　午後十一時着）

東京米國公使　　北京米國公使

二月七日淸國政府ハ左ノ電信ヲ發スルコトヲ本使ニ依賴セリ。

總理衙門ハ閣下ヨリ轉電セラレタル張、邵兩全權大臣ヨリノ電報ヲ昨日接手セリ。右電報ニ據レバ日本國ハ委任狀中ニ媾和條約ヲ締結調印スルコトニ關スル權限ヲ明記セザリシトテ異議ヲ申出タリ。就テハ同全權大臣ト談判スルハ日本政府ノ難シトスル所ナリ。是ヲ以テ張、邵兩氏ハ長崎ヘ送致セラレタリト、アリ。然ルニ同全權大臣ニ附與セラレタル信任狀ハ「全權」ノ語アルヲ以テ、條約ヲ締結シ、且之ニ調印スルニ全ク充分ナリト思考ス。此語ハ一切ノ事ヲ包含スルヲ以テ、別ニ一々詳記スルノ必要ヲ見ヅ、然レドモ日本國ニ於テ右信任狀ノ效力ニ付疑惑ヲ抱クガ故ニ、淸國ハ之ヲ更改スルコトヲ拒マザルベシ。尤討議ヲ悉シタル後兩國全權大臣ハ其ノ議定シタル條約ニ調印シ、而シテ該條約ハ其ノ批准交換ヲ了ル前ニ皇帝ノ認可ヲ俟テ而ル後初メテ有效ナルベシ等ノ事項ヲ信任狀中ニ記載スルコトトナスベシ。

而シテ此ノ訂改ヲ加ヘタル信任狀ハ張、邵氏ヘ送付シテ以テ日本國當該官吏ヘ差出サシムベシ。又信任狀ヲ日本國ヘ發送スルニハ多少ノ日子ヲ要スルヲ以テ閣下ヨリ前記ノ趣旨ヲ委細日本國ヘ電報セラレタシ。張、邵兩氏ハ目下長崎ニ滯在中ナレバ右兩氏ト開談スル樣兩氏ノ上海ニ歸航スルニ及バザル樣閣下ヨリ日本國ヘ請求セラレタシ。

（第二十四號）

口上書譯文

日本政府ハ若シ淸國政府ニシテ誠意ニ平和ヲ希望シ、適當ナル全權委任狀ヲ授與セラレタル高位

ニシテ且名望アル全權委員ヲ派遣スルニ於テハ、何時ニテモ再ビ媾和談判ヲ開クコトヲ承諾スベシト雖モ、一度談判不調トナリタル所ノ今回ノ使節ヲシテ本國政府ヨリノ訓令ヲ待ツタメ日本國ニ滯留セシムルコトハ承諾スルコト能ハザル所ナリ。

千八百九十五年二月八日東京外務省ニ於テ

（第二十五號）

電　信　譯　文（二月九日發）

北京米國公使　東京米國公使

日本國外務大臣ハ閣下ニ依賴スルニ日本國政府ハ斷然清國全權委員ノ日本國ニ滯留スルコトヲ許サズ。因テ同全權委員ハ直チニ歸國セザルベカラズ、トノ旨ヲ清國政府ヘ通知セラレタシトノコトヲ以テセリ。日本國外務大臣ノ本使ニ告ゲラレタル所ニ據レバ、清國政府ハ其ノ全權委員ニ附與スベキ權限ニ付誤解スル所アルガ如シ。日本國皇帝ハ清國全權委員ヲ引見セラルベキ筋ニ非ザルヲ以テ、信任狀ハ無益ナリ。然レドモ全權委員ナルモノハ媾和豫定條約ヲ商議締結シ、且之ニ調印スル爲メ妥當合式ノ全權委任狀又ハ勅書ヲ帶有セズムバアルベカラズ。

（第二十六號）

口　上　書　譯　文

日本國政府ハ清國ニテ軍費賠償金ヲ支拂フコトヽ、朝鮮ノ完全ナル獨立ヲ認ムルコトノ外、戰爭ノ結果トシテ土地ヲ割讓シ、及將來ノ交際ヲ律スル爲メ確然タル條約ヲ締結スルコトヲ基礎トシテ談判スルコトヲ得ベキ全權ヲ具備シテ來ルニ非ザル以上ハ、更ニ其ノ媾和使ヲ派遣スルモ全ク無益ニ屬スベキコトヲ聲明ス。此他尙其ノ重要ノ度以上諸件ニ次グ事項アリ。是亦商議決定スルコトヲ要ス。又日本國政府ハ今後何時ニテモ必要ト認メ又ハ望マシキト思考スルニ於テハ此上更ニ要求ヲ提出スベキ權利ヲ保有ス。

千八百九十五年二月十六日東京外務省ニ於テ

（第二十七號）

電　信　譯　文（二月十九日發）

東京米國公使　北京米國公使

清國政府ハ本使ニ求ムルニ左ノ事ヲ日本國政府ヘ傳達セラル、樣閣下ニ依賴スルコトヲ以テセリ。

內閣大學士李鴻章任命セラレ、全權ヲ附與セラレタリ。

同氏ノ榮譽タル花翎黃馬掛及頂戴ハ還與セラレタリ。同氏ハ本月十九日總督ノ事務ヲ引繼ギ、北京ヘ向ケ出發シ、二十一日ニ當地ヘ來着スベシ。

清國ハ日本國ガ何レノ地ヲ以テ兩國全權委員會合ノ地ト定メタルヤ、成ルベク速ニ電答アラムコトヲ請ヘリ。李鴻章ハ條約ヲ締結シ之ニ調印スルノ全權ヲ附與セラレタル所ノ信任狀ヲ帶有スベシ。而シテ同氏ハ數日內ニ北京ヲ出發スベシ。

此ノ電信ハ昨日ノ貴電接手前ニ草セシモノニテ總理衙門ノ請求ニ應ジ之ヲ發送ス。

（第二十八號）

口上書譯文

在北京米國公使ノ本月十八日ノ電信中清國政府ヨリ求ムル所ノ回答ヲ爲スニ先チ日本國政府ハ清國政府ヨリ其ノ全權委員ハ本月十七日日本政府ヨリノ電信中ニ揭記スル所ノ條件ニ遵テ派遣セラルベシトノ保證ヲ得ルコトヲ欲ス。

千八百九十五年二月十九日東京外務省ニテ

（第二十九號）

電信譯文（二月十九日發）

北京米國公使　　東京米國公使

二月十九日日本國政府ハ左ノコトヲ清國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依賴セリ。

在北京米國公使ノ本月十八日ノ電信中清國政府ヨリ求ムル所ノ回答ヲ爲スニ先ダチ日本國政府ハ清國政府ヨリ其ノ全權委員ハ本月十七日日本國政府ヨリノ電信中ニ揭記スル所ノ條件ニ遵ツテ派遣セラルベシトノ保證ヲ得ルコトヲ欲ス。

日本國外務大臣ハ閣下ノ暗號電信中信任狀ナル語ヲ使用セラレ居ルコトニ付注意スル所アリタリ。同大臣ハ使節ヲシテ徒勞ニ歸セシムルガ如キコト無カラシメムガ爲メ、清國全權委員ノ帶有スベキ權限ハ必ズ全權委任狀ヲ要シ、信任狀ニ非ザルコト明カニ承知シ置カレムコトヲ希望セリ。因テ李鴻章ニ附與セラルベキ全權委任狀ノ文言ヲ清國政府ヨリ電信ニテ提供スル方宜シカルベシ。

（第三十號）

電信譯文（二月二十三日午後四時五十分發　同二十四日着）

東京米國公使　　北京米國公使

二月二十三日本使ハ玆ニ二通ノ書翰及勅書案ノ漢文ヲ電送ス。清國政府ハ閣下ニ乞フニ之ヲ日本國政府ヘ交付スルコトヲ以テセリ。

若シ日本國政府ニテ之ヲ飜譯スルコト能ハザレバ本使ハ譯文ヲ電送スベシ。

逕啓者現在頭等全權大臣李中堂奉命與日本會商事件按照公法全權大臣與本國可通密電各國大臣

十六日日本所發兩電均已閱悉李中堂奉派全權大臣凡日本二十三日電內欲商各節均有此全權責任希卽轉達日本政府竝問明擬在何所論皆同應請貴大臣先行電日本按照公法辨理幸勿阻止竝希見復是荷順頌日祉。

正月二十九日

逕啓者貴大臣送來二十三日ニ處會議卽行電復以便約期前往此次勅書詞意悉照日本所發勅書辨理今將底稿錄送閱看應商轉電日本希貴大臣酌度可也順頌日祉。

正月二十九日

大清國大皇帝諭現因大日本國重敦睦特授文華殿大學士直隸總督北洋大臣一等肅毅伯李鴻章爲頭等全權大臣與日本所派全權大臣會同商議便宜行事豫定和約條欵予以署名畫押之全權該大臣公忠體國夙著勳勞定能評愼尅事締結邦交不負朕之委任所完條欵朕親加查閱果爲妥善便行批准特授。

（第三十一號）

口上書譯文

二通ノ書翰及勅書案ノ漢文本文中意味不明瞭ノ處多シ。因テ日本政府ハ誤解ヲ防グガ爲メ、清國政府ニテ譯成シタル右英譯文ヲ電送アランコトヲ求ム。

千八百九十五年二月二十五日東京外務省ニ於テ

（第三十二號）

電信譯文（二月二十六日午後二時五十分發　同二十七日着）

二月二十六日請求ニ應ジ本使ハ玆ニ本月二十三日漢文ニテ電送セシ所ノ書類ノ英譯文ヲ閣下ニ電送ス。

「閣下ハ本月十七日及二十日（十九日トアルベキ筈ナリ）附日本國來電ヲ本衙門ニ送付セラレ、俱ニ閱悉ヲ經タリ。李鴻章ハ全權委員ニ任ゼラレタリ。本月十七日附日本國來電中各種ノ問題ヲ商議スルコトヲ望ムトアリ、李氏ハ此等ノ任務ヲ執行スベキ全權ヲ帶有セリ。希クハ閣下ヨリ之ヲ日本國政府ヘ傳達セラレ、日本國ハ何レノ地ヲ以テ兩國全權委員會合ノ地ト場所ト定メタルヤヲ問合ハサレ、且李氏ガ適宜ノ時期ニ及デ出發スルコトヲ得ルタメ、成ルベク速ニ電信ニテ回答スルコトヲ求メラレタシ。今回ノ勅書ハ其文意日本國ニテ發セシモノト同一ナリ。玆ニ右案文寫ヲ閣下ノ閱覽ニ供シ、且ツ之ヲ日本國ヘ電知致スベキヤ否ヤ閣下ノ一考ヲ加ヘラレムコトヲ乞フ」

「王大臣ノ名刺ヲ添フ」

「李鴻章ハ大使ニ任ゼラレ、日本國ト事件ヲ商議スベキ全權ヲ授與セラレタリ。國際公法ニ據

レバ、全權委員ハ其ノ本國政府ト秘密電信ヲ往復スルコトヲ得ベシ。各國代表者ノ意見皆一ナリ。因テ希クハ閣下ヨリ豫メ日本國ニ向テ、國際公法ニ照ラシテ措施シ、阻止スルコト勿ルベキ旨ヲ通報シ置カシムコトヲ、且閣下ヨリ日本國ノ回答ヲ通知セラレムコトヲ乞フ」

「王大臣ノ名刺ヲ添フ」

「清國皇帝陛下勅諭ス。日本皇帝ト重ネテ親睦ナル友誼ヲ修ムルコトヲ欲シ、特ニ文華殿大學士直隷總督北洋通商大臣一等伯李鴻章ヲ大使ニ任ジ、授クルニ全權ヲ以テシ、日本國ニテ任命スル所ノ全權委員ト會シ、共同商議シテ便宜事ヲ行ハシム。同大臣ハ豫メ和約條款ヲ訂完シ、然ル後之ニ記名調印スルノ全權ヲ有セリ。同大臣ハ國家ニ公忠ニシテ夙ニ勳績ヲ著セリ。必ズ能ク勤愼任ニ當リ、兩國ヲシテ親好ニ歸セシメ、以テ朕ノ委任ニ負カザルベシ。然レドモ其ノ議定スル所ノ條款ハ、先ヅ朕ノ查閲ニ提供セシメ、果シテ妥善ナルコトヲ認メルニ於テハ朕之ヲ允可スベシ」

玆ニ前記漢文書翰二通ヲ訂正スルトキハ左ノ如シ。

逕啓者貴大臣送來二十三日二十六日日本所發兩電均已閲悉李中堂奉派全權大臣凡日本二十三日電內欲商各節均有此全權責任希卽轉達日本政府並問明擬在何處會議卽行電復以便約期前往此次勅書調意悉照日本所發勅書辨理今將底稿錄送閲看應商轉電日本希貴大臣酌度可也順頌日祉。

正月二十九日

逕啓者現在頭等全權大臣李中堂奉命與日本會商事件按照公法全權大臣與本國可通密電各國大臣所論皆同應請貴大臣先行電知日本按照公法辨理幸勿阻止並希見復是荷順頌日祉。

正月二十九日

（第三十三號）

口上書譯文

二通ノ書翰及勅書ノ譯文ト其ノ漢文本文トヲ比較シタルニ大差アルコトヲ發見セリ。是レ蓋シ之ヲ電送スルニ當リテ文章ヲ割斷シ、及其ノ文字ヲ置違ヘタル爲メナラム。但シ日本國政府ハ左ノ條件ヲ附シテ勅書ヲ承認スベシ。

第一、譯文ヲ左ノ通リ修正スベキコト。

冒頭ニ在ル「清國皇帝」ノ下「陛下」ノ語ヲ削除スルコト。

「預メ」ノ語「然ル後」ノ語及末文ニ在ル「先ヅ」ノ語モ亦之ヲ削除スルコト。

第二、漢文本文ハ修正セシ譯文ト毫モ差異ナキ樣ニ具製スベキコト。

特ニ注意ヲ呼起シタキハ勅書ヲ發スル理由ヲ述ベタル處ニ在リ日本政府ニテ接手セシ漢文本文ニテハ日本國ヨリ和ヲ求メタルモノノ如ク見ユレバ此處モ漢文本文ヲ譯文ノ通リニ具製スルコトヲ要ス。

會合ノ地ハ下ノ關タルベシ、而シテ清國全權委員ノ提出スル所ノ全權委任狀ノ妥善ナルコトヲ認ムルニ於テハ日本國政府ハ該全權委員ノ其ノ本國政府ト暗號電信ニテ往復スルコトヲ許スベシ。

前述ノ如ク修正セシ勅書ノ漢文本文ヲ接收シタル上ハ日本國政府ハ兩國全權委員會合ノ期日ヲ取極ムベシ。

千八百九十五年三月一日東京外務省ニ於テ

（第三十四號）

大清國大皇帝勅諭現因欲與大日本國重敦睦誼特授文華殿大學士直隸總督北洋大臣一等肅毅伯李鴻章爲頭等全權大臣與日本國所派全權大臣會同商議便宜行事定立和約條款予以署名畫押之全權該大臣公忠體國夙著勳勞定能洋愼將事締結邦交不負朕之委任所定條款朕親加查閱果爲妥善便行批准特敕。

（第三十五號）

日上書譯文

電送シ來リタル所ノ勅書案ハ滿足ナリ、之ニ署名鈐璽スレバ日本國政府ニ於テ異議ナシ、兩國全權委員會合ノ期日ハ清國全權委員ガ下ノ關ニ到着シタル上之ヲ通知スベシ、但シ必要ノ準備ヲ爲スタメ清國全權委員ハ本日ヨリ二週間ノ後下ノ關ニ到着スル樣ニシテ發程アリタシ、日本國政府ハ成ルベク速ニ發程ノ預定日取及該全權委員隨行員ノ人數ヲ承知シタシ。

千八百九十五年三月四日東京外務省ニ於テ

（第三十六號）

電信譯文（三月四日午前十一時四十分發　同日午後五時三十分着）

三月四日清國政府ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依賴セリ。

李鴻章ノ乘坐シテ日本國ヘ渡航スヘキ船上ニハ左ノ形樣ノ大使旗ヲ揭グベシ。

長方形黃色旗ニシテ其ノ中央ニアル圓形中ニ眞向キノ龍アリ其ノ周圍ニ「大清一統」トイフ意味ナル四字アリ。▲「卽大清帝國」此旗ノ下ニ靑龍紅珠ノ清國々旗

（第三十七號）

日上書譯文

日本帝國政府ハ李鴻章ノ乘坐シテ日本國ヘ渡航スヘキ船上ニ揭クベキ旗章ノ形樣ニ關スル在北京米國公使ノ三月四日ノ電信ヲ接手セリ。日本國政府ハ清國全權委員ノ乘坐シテ下ノ關ヘ來航スル船

ハ中立國旗ヲ掲クル中立國船ナルベシト推則シ居レリ、日本國政府ハ成ルベク速カニ右船名及其ノ所屬國旗ヲ承知シタシ。

千八百九十五年三月七日東京外務省ニ於テ

（第三十八號）

電信譯文（同三月十一日午前十時發着）

本使ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ電送スルコトヲ清國政府ヨリ依頼セラレタリ。

李鴻章ハ本月十四日日本國ニ向ツテ出發スベシ。獨國々旗ヲ掲グル獨國商船二艘禮裕（リーユー）號、生義（シエンイー）號ハ同使節及其ノ隨員ヲ乘セテ日本國ヘ渡行スベシ。

隨員ハ十數人ナルベシ。

李鴻章ハ大使ノ旗章ヲ掲グベシ。

本使ハ天津ヘ發電シテ李鴻章ノ隨行員ノ確數ヲ問合セ置キタレハ追テ閣下ニ電知スベシ。

（第三十九號）

書翰譯文

拜啓陳者「デンベー」氏ノ昨日ノ來電ハ十分明瞭ナラザルニ付閣下ヨリ左ノ意味ニテ同氏ヘ御問合被下候ハバ幸甚ニ存候

李鴻章ハ天津ヨリ下ノ關直航スルヤ下ノ關ヘ到着ノ豫定期日ハ何日頃ニシテ隨行員ノ確數ハ幾人ナルヤ。

千八百九十五年三月十二日

外務次官　林　董

米國特命全權公使　ヱドウキン・ダン閣下

（第四十號）

電信譯文（三月十二日發同日着）

東京米國大使　北京米國公使

三月十二日清國清府ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依頼セリ。

李鴻章ハ生義號ノ代リニ獨國國旗ヲ掲グル獨國商船公義（ユンイー）號ニ乘坐スベシ。

同氏ハ本月十四日ニ出發スベシ。

同氏ノ隨行員ハ從者ヲ除キ三十三人ナリ。

（第四十一號）

電信譯文（三月十二日發同十三日着）

三月十二日清國政府ハ左ノコトヲ日本國政府ヘ傳達スルコトヲ閣下ニ依頼セリ。

若シ日本國政府ニテ異議ナクムバ清國使節ハ其ノ隨行員ト共ニ二艘ノ汽船中ニ住居スルコトヲ欲セリ汽船ハ特ニ其ノ支度ヲ整ヘ居レリ且斯クスルトキハ日本國政府ニテ旅館ヲ設備スルノ勞ヲ執ラルヽコトヲ要セザルベシ。

（第四十二號）

電信譯文（三月十三日午前九時二十分發同日着）

東京米國公使　　北京米國公使

三月十三日李鴻章ハ其ノ請求ヲ東京ヘ電致スルコトヲ本使ヘ依賴セリ。

日本國政府ヨリ水先案内者ニ命示シ下ノ關ノ沖合ニテ其ノ乘坐スル所ノ二艘ノ汽船ニ會シ港内ヘ導カシメラルヽ樣セラレタシ。

（第四十三號）

電信譯文（三月十三日午前九時四十五分發同日着）

三月十三日李鴻章ハ本月十四日天津ヲ發シテ下ノ關ヘ直航シ多分十九日ニ到着スベシ、隨行官吏ハ三十三人ニシテ從者九十人ナリ。

（第四十四號）

大日本國皇帝陛下ノ外務大臣ハ玆ニ大清國皇帝陛下ノ欽差頭等全權大臣閣下ニ向テ左ノコトヲ通知スルノ光榮ヲ有ス。

大日本國皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文閣下及本大臣ヲ全權辨理大臣ニ任命セラレ大清國皇帝陛下ガ任命セラレタル欽差頭等全權大臣ト媾和條約ヲ締結スルノ全權ヲ委任セラレタリ。

明治二十八年三月十九日赤間關ニテ

外務大臣　子爵　陸奥宗光　印

（第四十五號）（譯文）

大清帝國欽差頭等全權大臣ハ大日本帝國外務大臣ヨリ本日附ノ通知ニ由リ大日本帝國大皇帝陛下ハ内閣總理大臣從二位勳一等伯爵伊藤博文閣下及貴大臣ヲ特派シテ全權辨理大臣ト爲シ大清帝國大皇帝陛下ノ特派欽差頭等全權大臣ト媾和條約ヲ締結セシムル爲メ全權ヲ授與セラレタル旨ヲ領承セリ、本大臣ハ大清帝國大皇帝陛下ノ命ヲ奉ジ特派頭等全權大臣トシテ大日本帝國大皇帝陛下ノ特派全權大臣ト會同シテ媾和條約ヲ締結シ竝ニ便宜事ヲ行フノ全權ヲ帶ビ現ニ本日午前當港ヘ到着セリ因テ大日本帝國全權大臣ニ於テ速ニ期日ヲ定メ全權委任狀ヲ交換シテ以テ商議ヲ開キ兩國媾和條約ヲ妥完スルニ便セラレタシ。敬具

光緒二十一年二月二十三日（我三月十九日）